

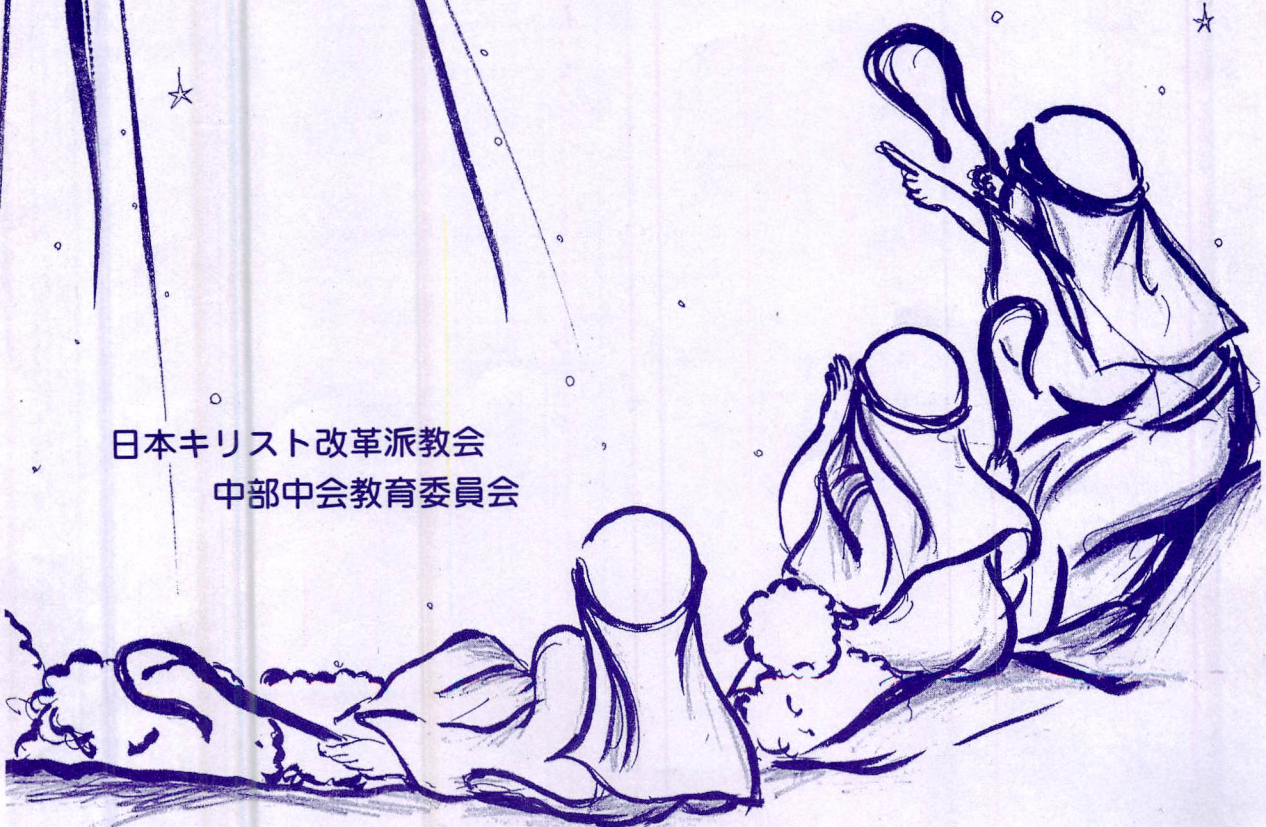
日曜学校教案誌

vol. **11**

2003.10.11.12月号

いと高きところには栄光、神にあれ、
地には平和、御心に適う人にあれ。

日本キリスト改革派教会
中部中会教育委員会



も く じ

まえがき	木下裕也 ...	3
巻頭説教「神さまのつくられた人の目的」	アンドリュー・カリク ...	4
自由献金のお願い		7
日曜学校・教会学校訪問 花見川伝道所日曜学校の紹介	潮田 佑 ...	8
2003年10・11・12月分カリキュラム		10
聖書研究・説教展開例・分級展開例		11
10月5日		12
10月12日		19
10月19日		26
10月26日		33
11月2日		40
11月9日		47
11月16日		54
11月23日		61
11月30日		68
12月7日		75
12月14日		82
12月21日		89
12月28日		96
小学科下級教材		103
2004年1・2・3月分カリキュラム		106
あとがき		107

まえがき

木下裕也（豊明教会牧師）

この春、長男が小学校に入学し、しばらくして家庭訪問がありました。私たちの信仰についてもいくつかのことをお伝えしたうえで、「日の丸」「君が代」の問題に関しての配慮もお願いしました。担任の先生は「たいせつな問題ですから、考慮させていただきます」と応じてくださり、まずはほっと安堵しました。

家庭や学校において子どもたちの心の荒廃をうつしだすような出来事が続けて起こっている一方で、「日の丸」「君が代」法制化、教育基本法の改正、文部科学省の手になる『心のノート』による「道徳」教育のくわだてなど、教育の現場における国家的介入の度合いが加速度的に強まっているように思われます。おそらくこのふたつの傾向には、何らかの平行な関係を見て取ることができるはずです。

私たちの教会でも、かつて、「日の丸」「君が代」法制化に対応して、教会員の父兄が学校宛に配慮を求める手紙を書く場合の文案を作成したことがあります。教会にあっては子どもたちの教育を両親にまかせるのみでなく、教会もまた教育の責任を担うのである以上、こうした事柄にも教會的な取り組みが求められると考えたためです。その文案にこういうくだりを盛り込みました……「私どもの願いは、現憲法に保障

されている思想及び良心の自由、信教の自由、教育を受ける権利にもとづいて、私どもの子どもたちが、国旗に敬礼「しない」自由と、国歌を「歌わない」自由とを確保していただきたい、ということです。

思想・信条の自由や信教の自由は、人の心の内面にかかわるもっともデリケートで、かつかけがえのないものです。現行憲法は、そうした領域に国家が無神経に、そして意図的にせり出していくことにブレーキをかけていると見るこ

とができます。しかし、近代以後の歴史から見ても、この国はしばしば人権や人間の尊厳を守ることにける鈍感さを示してきました。国家には個人の人生の意味や価値を決める権限はありませんし、人の生死を意味づける権利もありません。私たちの命と人生を意味づけ、また握っておられるお方はただ神おひとりです。私たちはこのことをいつもしっかりとわきまえておかなければならないと思います。

以前、ダニエル書3章を扱ったおりに、教案誌編集部でも国家の動向を視野に置いた信仰教育ということがおのずから話題となりました。各教会の日曜学校教師会の場でも、よき語り

「神さまのつくられた人の目的」

—マタイによる福音書5章14～16節による説教—

アンドリュー・カリク (PCUS 協力宣教師)

聖書 (私訳)

ヨブ記24章13節

ある人々は光に反抗して、それに気付かず、その道にとどまってもいない。

詩編18編29節

あなたこそはわたしのランプに火をともしお方、
わたしの闇に輝いているのはわたしのヤーウエという神だ。

マタイによる福音書5章14～16節

君たちが世の光だ。町は丘の上に立ったら、隠れられないね。

君たちはランプをつけたら、大きい籠の下に隠すかい？

まーさか。それを ランプスタンドの上にたて、家のすべてを照らすだろう。

同じように、君たちの光をみんなに照らして、君たちの生活をみんなに見せなさい。

そうすれば、みんなは、君たちの生活の行いを見て、天にいる父を賛美するだろう。

神さまは君をどのような人におつくりになったのだろうか？ いろんな宗教では、わたしたちは自分自身を捨てなければなりません。わたしたちはある決まった人になったほうがよいと教えられます。わたしたちは個性的になってはだめというわけです。でもこういう教えは魂をなくさせますね。キリスト教はこのような宗教じゃないから、本当に感謝しています。もちろん、わたしたちは自分の罪をなくさないといけません。けれども、神さまにつくられている自分の個性をなくすことはぜったいだめです。

わたしが4歳ぐらいの時に、両親はアメリカのアリゾナ州から特別なランプを3台買いました。すべてサポテンで作られていました。サポテンで作られていたランプの笠には、それぞれ異なった絵が書いてありました。一つのランプの笠には、いろんな種類のサポテンが書いてありました。もう一つのランプの笠の絵は、砂漠

の鳥とがらがら蛇のけんかの図でした。三番目のランプの笠の絵は、遠くから見えるロッキーマウンテンの景色でした。昼間、ランプが消えている時、そのランプの笠は暗かったから、わたしたちは、そのきれいな絵は、はっきりとは見えませんでした。でも、毎晩、ランプをつけると、それぞれ個性的なランプの絵が、わたしたちの部屋で輝きました。

今日は、「神さまは君をどのような人におつくりになったのか？」という話です。

みんなのうち、何人がモーセのような人になりたいですか？ モーセは神の民の歴史の中で、もっともすばらしい預言者の一人ですね。ヨルダン川を分けたほかの預言者たちがいたけれども、モーセだけが大きい海を二つに分けましたね！ もちろん、モーセのしたことじゃなくて、神さまのなさった御業なのだけれども、みんなはそれはもうわかるでしょう？ モーセ

は神さまのためのすばらしい人でした。でも、
彼は、また罪人でもあったのです。彼は人を殺
して、砂漠に逃げました。でも聖書は、モーセ
がほかの人より謙そんであったと書いてありま
す。そして、神さまはモーセをすばらしいこと
のために用いました。ですから、モーセのよう
な人になるのはすばらしいと思いませんか。

では、ダビデはどうでしょうか。みんなのうち、
何人がダビデのような人になりたいですか？
ダビデは歴史の中で、もっともすばらしい
王様の一人ですね。うまく国を治めたほかの
王様もいるでしょうが、ダビデだけが国の中心
に神さまをおきました。ダビデは神さまのため
のすばらしい人でした。でも、彼もまた、やは
り罪人でもあったのですよね。彼は、ほかの男
性の奥さんと罪を犯しました。そして彼はその
男性を殺しました。聖書には、ダビデが自分の
罪を悔い改めたと書いてあります。そして、神
さまはダビデをすばらしいことのために用いら
れましたね。ですから、ダビデのような人にな
るのはすばらしいと思いませんか。

では、ペトロはどうでしょう。みんなのうち、
何人がペトロのような人になりたいですか？
ペトロは十二人の弟子たちのうちの最初の弟子
でした。ペトロだけがイエス様と一緒に湖の上
を歩きましたね。ペトロは神さまのためのすば
らしい人でした。でも、彼もまた罪人だったの
です。イエス様が捕えられたとき、ペトロは
イエス様を三回否定しました。そしてペトロは
隠れてしまいました。でも、十字架のあとで、
イエス様は、ペトロに三回、「ヨハネの子シモ
ン、この人たち以上にわたしを愛するか」と尋
ねられました。イエス様はペトロに、そのたび
に、「わたしの羊の世話をしなさい」と言われ
て、ペトロを慰め、力づけましたね。そして、
神さまはペトロをすばらしく用いられました。
ですから、ペトロのような人になるのはすばら
しいでしょう。

それでは、モーセはアブラハムと同じような

人だったかな？ いいえ。では、ダビデはモー
セかアブラハムと同じような人だったかな？
いいえ。ではペトロはどうかな？ ペトロは、
モーセかアブラハムかダビデと同じような人
だったかな？ いいえ、みんなそれぞれ個性的
でした。神さまが彼ら一人一人を照らされて、
ランプの笠を通してその中心の光が見えるよう
に、彼らを通して、一人一人の中の聖霊の光が
見えました。同じ聖霊が彼ら一人一人を内側か
ら光で照らしたのだけれども、ランプの笠の絵
が違うように、みんなだいぶん違いましたね。

わたしたちも同じです。聖霊がわたしたちを
救うためにわたしたちの内に入って、そうして、
わたしたちの命を通して、ランプの笠の内側か
ら、その中の聖霊という光が輝きます。わたし
たちには、一人一人、まわりのみんなのために、
それぞれの個性的な生活の絵が輝いています。
わたしたちは一人一人個性的なランプの笠のよ
うです。でも、わたしたちは、ランプの中から
の光と同じように、聖霊が命の中で輝く時まで、
だれにもわたしたちがつくられた目的が全然み
えません。書かれている絵が見えないのです。
ですから、君たちの個性的な命のランプの笠か
ら、聖霊の光を輝かしなさい。

神さまは、ほなみ、みのり、るつこ、れいな、
めぐみ、だいき、いくえ、ともみ、いずみ、せ
いや、まりな、のぶゆき、さつき、いのり、……
の個性的な命の中から輝かれます。神さまは君
をほかの人と同じようにはならさせたくはあり
ません。神さまは君を、ただモーセやエリサベ
トやダビデやマリア、ペトロなどになってほし
くないのです。聖霊は君たちをほかの人と同じ
ようにはさせたくはないです。神さまは、君が
自分自身のままで、いてほしいのです。ですか
ら、ランプの中からの光と同じように、聖霊を
あなたの命の中で輝かせなさい。そうしたら、
君は神さまのおつくりになった目的、そのもの
になります。

お祈りしましょう。

天にいる父なる神さま。わたしたちはみんな個性を持ってつくられたことに、本当に感謝しています。わたしたちはみんなあなたのために個性を持っているから、ありがとうございます。

あなたの光で輝けるように、聖霊で満たしてください。主イエス様の御名によってお祈りします。アーメン。

(Rev. Andrew Carrick)

(中部中会連合高校生会夏のキャンプ開会礼拝説教)

『日曜学校教案誌』発行のための 自由募金のお願い

教会のかしらなる主イエス・キリストの御名をあげます。

中部中会教育委員会は、日本キリスト改革派教会をはじめとする改革・長老主義諸教会の教会学校・日曜学校教育に資することを目的として、『日曜学校教案誌』を発行しています。教案誌はすでに第11号を数え、中部中会においては三分の二を越える教会がこの『教案誌』を採用してくださっています。また、他中会、他教会においても採用してくださる教会が与えられています。皆様のご支援に心から感謝を申し上げます。

この『教案誌』の発行は中部中会の事業として行われておりますが、中部中会教育委員会では、あわせて皆様からの自由献金によってご支援いただきたいと願っています。この献金は、『教案誌』の編集・出版のための費用として用いられます。子どもたちの信仰教育のための『教案誌』の発行のために、ぜひ皆様からのお祈りと献金のご支援をいただきたく、よろしくお願い申し上げます。『教案誌』を購入くださることも、発行のための支援となります。信仰の養いの益ともなりますので、ぜひ『教案誌』をご購入いただき、ご支援いただきたいと願っています。よろしくお願い申し上げます。

目標金額	30万円
期 間	2003年7月～2004年3月末
送 金 先	郵便振替 長谷川正一
	00840-3-3192

※『教案誌』自由募金である旨、振込用紙にご記入ください

花見川伝道所日曜学校の紹介

花見川キリスト伝道所宣教教師 潮田 佑

1. はじめに

花見川キリスト伝道所は、花見川団地の中にある教会です。そして、近くに花見川第一小学校があります。毎主日の教会学校は、大人も含めて10数名程度の小さい群れであります。出席している生徒は、契約の子と近隣に住む生徒たちで、割合は、近隣に住む生徒が多いです。

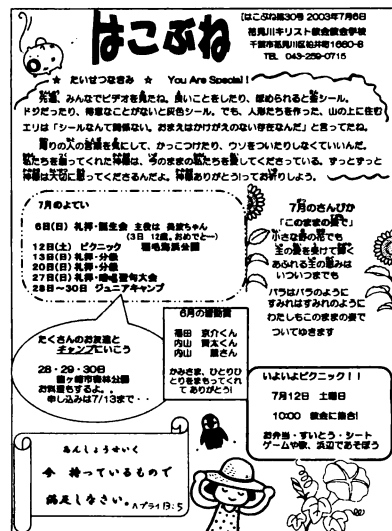
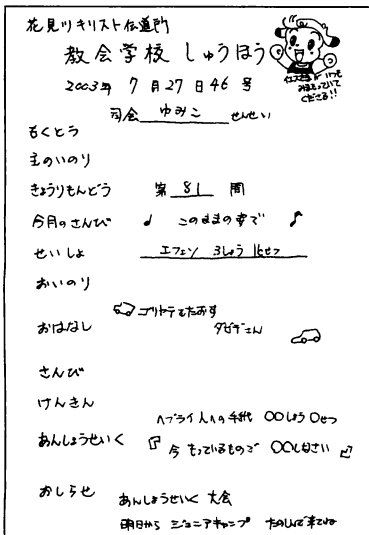
2. 教会学校の様子

毎週日曜日、朝8時50分に教師たちが集まり、その日の説教箇所を朗読し、祈祷会をして、教会学校が始まります。礼拝は、朝9時から、分級は、9時30分から10時までの30分間です。分級は、幼稚科、小学低学年、小学高学年、中等科という4クラスで構成されています。今、一番、にぎやかなのは、小学高学年です。教案は、CS成長センター発行の『成長』をもとにして、礼拝を行っております。

第一主日は、みんなでお誕生日会をします。

お誕生会では、その月の誕生の生徒を賛美でお祝いし、みんなでお菓子などを食べ、ゲームなどをしてワイワイやっております。また、第四主日は、暗唱聖句大会をします。暗唱聖句大会とは、今月の覚える聖書箇所を一人一人発表してもらう会です。教師会では、たくさんの御言葉を覚えてもらうより、大人になるまで心に残るような御言葉を選んでいきます。その工夫として、できるだけ短く、子どもたちにもわかりやすく、覚えやすい聖書箇所を選んでいきます。そして、一度で終わるのではなく、年間に何度か、同じ御言葉を繰り返して、暗唱しております。そして、第二、三主日は、『成長』の教材をもとにして、分級を行っております。

今年から、子どもたち用のメールボックス(週報ボックス)を作りました。メールボックスには、教会学校専用の週報、そして、毎月発行している新聞「はこぶね」が入ります。教会学校専用の週報も、今年度からはじめました。



「はこぶね」は、今月の暗唱聖句、今月の行事のお知らせ、ちょっとした今月のお話の要約などが記載されております。

3. 教会学校の主な行事

昨年と今年から例を挙げますと、春のピクニック、イースターエッグ作り会、夏の一泊おとまり会、クリスマス準備会がありました。春のピクニックでは、近くの公園に行き、アスレチック、ゲームなどをして遊びました。また、夏の一泊おとまり会は、教会でおとまり会をします。みんなで夕食を作り、花火をし、近くのスーパー銭湯に行き、ビデオをみて、過ごします。メインは、スペシャル暗唱聖句大会です。一年間、覚えてきた御言葉を、ゲーム感覚で、楽しく行きます。

また今年も、初の試みとして、近隣教会である稲毛海岸教会と合同のピクニックを行いました。この初の試みは、東関東地区ジュニアキャンプに出席してもらいたいという願いと、他教会で友だちをたくさん作ってもらいたいという願いから実現しました。

4. 教会学校教師会

教会学校の教師は、現在4名の奉仕者がおり、定期の教師会は、第三主日に行っております。教師会では、礼拝プログラムの確認、次月の誕

生者の確認、精勤賞者の確認、教会学校の行事の打ち合わせなどが話し合われます。なかでも、今年、試みたこととして、「御言葉の分かち合い」を行っております。教師の霊性を高め、生徒たちに御言葉を少しでも分かってもらうという目的によって、牧師が、次月の説教を要約して説明し、その後、教師たちが、御言葉を分かち合って、話し合いをします。

5. 今後の課題

中学になると、部活、クラブ活動で、教会学校にこない生徒たちが多く見られます。そのような生徒たちにどう伝道をするか。これが、私たちの大きな課題になるかと思っております。この他にも、出席率の向上、近隣の子どもたちへの伝道もあるかと思いますが、大人の礼拝につながる教会学校を目指していきたいと思えます。

6. まとめ

以上、花見川キリスト伝道所の教会学校の様子をご紹介させていただきました。教会学校は、次代の教会を担う働き人を育てるといった信仰継承、地域の伝道という理解がある限り、この目的から目をそらさず、主に祝福されることを信じて、これからも励んでいくものでありたいと思えます。



稲毛海岸教会との合同ピクニック



東関東地区ジュニアキャンプに参加した生徒たち

日曜学校 2003年度カリキュラム (2003年10～12月分)

—救済史に基づく一年間のカリキュラム—

月 日	主 題	聖 書 箇 所	暗 唱 聖 句
教会暦・行事	単 元 の 目 標		
10月5日	洗礼者ヨハネ・神の小羊	ヨハネ福音書1:19-34	ヨハネ1:29
	小羊キリストの贖いによってキリストの証人とされた光栄と使命を学び、招く		
10月12日	カナの婚礼	ヨハネ福音書2:1-12	ヨハネ1:14ab
	主イエスを信仰によって迎えて、主が共にいてくださる幸いと確かさへと招く		
10月19日	ニコデモとの対話	ヨハネ福音書3:1-16	ヨハネ3:16
	救いは恵みである。主イエスと結ばれて新しい人とされる喜びへと招く		
10月26日	サマリアの女との対話	ヨハネ福音書4:1-26	ヨハネ4:24
	真の礼拝をささげて、人生の目的を満たすことへと招く		
11月2日	ベトサダの池でのいやし	ヨハネ福音書5:1-18	ヨハネ5:17
	悩みを知り、近づき解決してくださる主イエスを知り、摂理の信仰へと招く		
11月9日	5000人の給食	ヨハネ福音書6:1-15	主の祈り・第四祈願
	日々の必要を主イエスに求めさせる。信仰が生活そのものとなるよう招く		
11月16日	生まれつきの盲人のいやし	ヨハネ福音書9:1-12	ヨハネ9:3
	主イエスの力を知り、主と共に働き、主のみわざを担うことへと招く		
11月23日	父に至る道	ヨハネ福音書14:1-7	ヨハネ14:6
	キリストこそ救いの頂点、救いの唯一の道であることを学び、伝道へと励ます		
11月30日	待降節・マリアへの予告	ルカ福音書1:26-38	ルカ1:28
	主が共にいてくださる恵みを喜ぶことへと招く		
12月7日	待降節・マリアの賛歌	ルカ福音書1:39-55	ルカ1:47
	自らを小さくして、主なる神をほめたたえることへと招く		
12月14日	待降節・ヨハネの誕生	ルカ福音書1:57-66	ルカ1:63-64
	神を信頼して待ち望み、希望のうちに忍耐し、祈り続けることへと招く		
12月21日	降誕祭・主イエスの誕生	ルカ福音書2:1-20	ルカ2:11
	主イエスを受け入れて、主イエスのお誕生を心から喜び祝おう		
12月28日	一年の感謝	詩編121編	詩編121:1-2
	この一年の歩みを感謝し、新しい一年を待ち望み、神に信頼することへと招く		

聖書研究・説教展開例・分級展開例

テキスト ヨハネによる福音書1章19～34節

〈洗礼者ヨハネ〉

エルサレムのユダヤ人たちは、ヨルダン川で人々に洗礼をさずけていたバプテスマのヨハネを呼び出して、あなたはいったいどなたなのかと問います。このような特別なことをしているからには、あなたは特別に偉大な人なのかと問うたのです。

ヨハネは答えます。わたしはメシアではない。またエリヤやモーセの再来でもなく、人々が好むような偉大な人間的英雄でもない。

ヨハネは言います。「わたしは荒れ野で叫ぶ声である／『主の道をまっすぐにせよ』と」(23節)

ヨハネはこのように、自分を声であると認識しているのです。声であるとはこの場合、み言葉を語る者であるということです。

声は荒れ野において叫ぶのです。荒れ野は罪と滅び、渇きと絶望の支配する場所です。福音書の時代のみならず、現代社会にも荒れ野が広がっています。表面的には平穏に見える場所であっても、霊の目をこらして見れば、さまざまな意味でそこは荒涼とした荒れ野であるということがあるのだと思います。

しかし神は荒れ野をそのままにはなさいませんでした。暗闇に光を、荒れ野に命の水をもたらしてくださいました。言が肉となって世に來たりたもうたお方(1章14節)、主イエス・キリストによってです。

そしてヨハネはこのお方を指さす者、このお方のみ言葉を語る者として立てられ、召されたのです。彼は自分について語る者ではなく、ひたすら

に主イエスを指さすことに徹することによって、ゆだねられたつとめを果たすのです。

〈神の小羊〉

ヨハネは主イエスを指さして言います。「見よ、世の罪を取り除く神の小羊だ」(29節)

旧約聖書の昔に、神はイスラエルの民をエジプトの地、奴隸の家から救い出されるにあたって、小羊の血を目印にしてエジプトの家を打たれ、イスラエルの家を過ぎ越されました。この主の過越のみわざは、旧約時代にあつて罪の赦しと永遠の命の祝福をあらかじめ示すしるしでした。

そして今時が満ちて、神の小羊が世に來られたのです。永遠の神が、罪の闇の中に置かれている世界のために、またアダムの原罪の中に生まれ、死ぬべきさだめの中にあるわたしたちのために人となって來られ、神の怒りをなだめる犠牲の小羊として十字架の上に血潮を流し、罪の贖いをなして、わたしたちを罪と死の縄目からときはなしてくださいました。十字架の上にただ一度ご自身をほふられた神の小羊によって、救いのみわざは成就したのです。

バプテスマのヨハネは聖霊が主イエスの上にとどまるのを見(32節)、聖霊に導かれてこのお方こそ神の小羊であると告白しました。聖霊はわたしたちの霊の目をも開いてくださって、このお方こそわたしたちの罪を除くためにわたしたちの身代わりに十字架に死なれ、よみがえられた救い主であると喜びをもって告白する者としてくださるのです。(木下裕也)

テキスト ヨハネによる福音書1章19～34節

〔単元のねらい〕

本号では、ヨハネによる福音書から主イエス・キリストの物語を説くこととなる。この單元では、洗礼者ヨハネと主イエスとの出会いという二つの物語を合わせて語る。説教者は、祈りのうちに、伝えるべきメッセージの中心点を定めることとなろう。この説教は、「声」に焦点をあてながら、キリストの証人としての使命と幸いに子らを招こうとしている。しかし、その中で同時に、キリスト御自身が神の小羊であることをもきちんと語りたい。なお、『子どもカテキズム』の問22を参照のこと。

「洗礼者ヨハネと神の小羊」

神さまは、イエスさまが生まれる半年前に、一人の男の子を誕生させられました。その子の名前は、ヨハネと言います。ヨハネは、祭司ザカリヤをお父さんとしてエリサベツをお母さんとして生まれました。神さまは、イエスさまがお働きを始める前に、その準備のお働きをこのヨハネさんにさせられました。それは、どのような働きだったのでしょうか。

ヨハネは、ヨルダン川でイスラエルの人たちに説教をしました。「神さまの前に悔い改めなさい。信仰によって生きなさい。」そして、集ってきた多くの人たちに洗礼を施してあげていました。

さて、ヨハネの活躍が目立ってきたときに、エルサレムの神殿に仕える偉い人たちが、そわそわし始めました。「なんだか、大勢の人たちがヨハネという男のところに出向いて、洗礼を受けているという。いったい、ヨハネとは何者なのか。何をしようとしているのか。」このように不安に思った人たちが、このヨハネのところに行ってきました。そしておそろおそろ、こう尋ねました。「もしもし、あなたはどなたですか。」ヨハネはこう答えました。「わたしはメシアではありません。救い主ではありません。」祭司たちは、がくと来ます。「なーんだ、メシアではないと自信満々に言っている。やっぱりこんなみすばらしい身なりの男が救い主ではないのは当然だ。」そしてもう一度尋ねます。「ヨハネさん、それなら、あなたはエリヤですか。」「いいえ、違います。」祭司た

ちはまががくと来ます。「うーん、そうなら、私たちが待ち焦がれている世界の終りのときに来る預言者なのですか。」ヨハネは首を振って言います。「そうではありません！」

祭司たちは、もうたまりません。「ヨハネさん、わたしは違う。わたしは違うって言うばかりではなくて、あなたは誰なのか、はっきり言ってもらいたい。そうでなければ、エルサレムの祭司長たちに報告できなくて困ります。」ヨハネはこのように答えました。「わたしは預言者イザヤが預言した、主の道をまっすぐにせよと荒れ野で叫ぶ声です。」

「わたしは声です。」これは、とても不思議な自己紹介ですね。僕たち私たちは、自分のことを「わたしは声です」だなんて言いませんね。声というのは、何でしょう。それは、人が言葉を話すときの音です。音は、見えません。声は、話をしたらすぐに消え去ります。先生の声も、一度言葉を発音すれば消えます。つまり、声は、言葉を乗せるものですね。声は言葉を乗せると意味が出ます。力がでます。言葉があっても、声にならなければ僕たち私たちがその人が何を言っているのか、言いたいのか分かりません。

ヨハネによる福音書の一番最初に、このような言葉が記されています。「初めに言（ことば）があった。」言というのは、イエスさまのことです。イエスさまは、命の言です。すべてのものを作り出す力のある言であって、人間を救い、生かす命

の言なのです。ヨハネは、「わたしは声です。」と言ったのは、喜んで言っているのです。どうしてかと言えば、自分の声は、イエスさまをお乗せしているからです。先生も今、聖書のお話をしています。神さまの御言葉を先生の声に乗せて皆に届けています。この声は、ステキな声ではないけれども、声に乗せている言葉は、イエスさまの言であって、イエスさま御自身です。だから、聖書のお話を信じて聴いてくれているお友だちは、イエスさまを礼拝できるのです。そして、イエスさまに救っていただける、出会っていただいているのです。

僕たち私たちも、イエスさまをお乗せする声を与えられています。お友だちに、イエスさまの言葉を届けてあげて、お友だちに最高のプレゼントをすることができるのです。

さて、その翌日。ヨハネは、イエスさまが自分の方に来られるのを見ました。そして、右手の人差し指をイエスさまに向けて叫びました。「見よ、世の罪を取り除く神の小羊だ！」ヨハネは、こ

れまで一生懸命、救い主が来られるから、悔い改めなさいと叫びましたが、遂に今、目の前にその救い主が立っておられるのを見たのです。イエスさまを指差して、声になり切っています。もう、自分が褒められるとか、自分が重んじられるとか、そんなことはどうでもかまいません。とにかく、嬉しくて仕方ありません。「このお方こそ、わたしが紹介して来たご本人です。わたしはこのお方を紹介する人、このイエスさまが世の罪を取り除く神の小羊と紹介する人です。」ヨハネは自分がイエスさまの声になっていることが嬉しかったのです。

僕たち私たちも、イエスさまを見てくださいます。紹介したいですね。そして、「イエスさまは、僕たち私たちの罪を赦してくださるために十字架で死んでくださったんだ。三日目にお墓の中からおよみがえりになられたんだ。教会に来れば、イエスさまのことをもっと教えてもらえるよ。」そのようにイエスさまの声になりましょう。

(相馬伸郎)

[今日の暗唱聖句] ヨハネによる福音書1章29節

その翌日、ヨハネは、自分の方へイエスが来られるのを見て言った。

「見よ、世の罪を取り除く神の小羊だ。」

〈ねらい〉

ちいさなわたしたちでも、イエスさまの御用のお役に立つことができることの光栄と喜びを知る。

〈展開例〉

みんなは人からほめられたり、他のお友だちよりもお勉強やスポーツがよくできて、目立つことができたらうれしいでしょう。けれども、今日の聖書の箇所には、自分が目立たないことを喜んだ人が出てきます。洗礼者ヨハネさんです。ヨハネさんは、イエスさまが近づいてこられるのを見て、「このお方こそ、わたしたちの救い主です。わたしなどくらべものにならないほど素晴らしいお方が来られると言ったのはこのお方のことです。」と喜んで言いました。神さまを悲しませるような罪をたくさん犯してしまうわたしたちを救うために、イエスさまは犠牲の小羊のように、わたしたちの身代わりとなって十字架にかかるためにこの世に来てくださった、本当の救い主です。ヨハネさんは自分がほめられることよりも、このイエスさま

を指差して、「このお方こそわたしたちの救い主です。」とお伝えすることができることのほうがうれしかった。イエスさまのお役に立てることが一番うれしかったのです。

イエスさまはちいさなわたしたちをも、ご用のために用いてくださいます。お友だちにイエスさまのことを教えてあげたり、教会に誘ってあげたりすることによって、わたしたちもイエスさまのお役に立つことができます。そしてそれは、自分がほめられたり、目立ったりすることよりも、もっともっとすばらしいことなのです。

〈お祈り〉

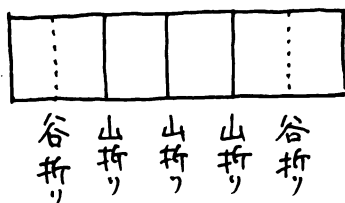
天のお父さま、ちいさなわたしたちでも、イエスさまのお役に立てますことを感謝いたします。わたしたちが勇気を出して、お友だちにイエスさまのことを、お伝えすることができますように、お守りください。イエスさまのお名前によってお祈りいたします。アーメン。

〈やってみよう〉

工作をしよう！

尺取虫を作ろう♪

- ① 折り紙を4等分したものを
下図のように折る



- ② 顔をかくて、下図のように
真上から息をふきかけると、
「シヤクッ、シヤクッ」と重くくヨ!



〈ねらい〉

わたしたちも、イエスさまがどんなお方なのか、みんなにつたえる「こえ」になろう。

〈展開例〉

礼拝でお話を聞いたヨハネさんのように、わたしたちも、イエスさまがどんなお方なのかを、お友だちにおはなししましょう。

○では、イエスさまはどんな方かな？

- ・わたしのことを、とつてもたいせつにしてください方。
- ・わたしを、神さまのところへつれて行ってくださる方。

※「神様の子ども」「なんでもできる方」等、いろんな答が出てくると思いますが、それぞれを大切にしつつ、上記2点を強調したいと思います。

「神の小羊」というテーマにおいては、「わたしの罪のために身代わりになって」ということが重点となると思われますが、この先のカリキュラムでも扱いますので、ここでは「神さまのところへ

つれて行ってくださる」というような言い方が良いかと思います。

○どうしたら、友だちにイエスさまのことをおはなしできるかな？

- ・イエスさまのことを、もっとよく知ること。
 - ・イエスさまのことを、もっと好きになること。
- ※どちらも、聖書の御言葉に聞くことです。日曜学校でたくさん御言葉の種をいただくことを勧めましょう。

子どもたちの魂にまかれた御言葉の種が、神様によって生まれ、信仰の実をつけるように、子ども一人一人の顔を思い浮かべながら祈りましょう。

〈ちいさなお祈り〉

○イエス様がいてくださって良かったと思うことを、一つ考えて「ありがとう」とおいのりしましょう。

○先週、神様がしてくださったうれしかったことを、一つ思い出して「ありがとう」とおいのりしましょう。

〈やってみよう〉

ことばつくりゲーム

例)

からす	すいか
みるく	はさみ
さとう	かさ
まめ	こま
のりまき	あれの
ことり	たらこ
ひこうき	ゆうひ
つき	ばけつ
じてんしゃ	すうじ

・「かみさまのこひつじ」とたてに書いてもらう

・ヨーイドンで、その文字で始まることばを考えて書いてもらう。

・一番先に書けた人が勝ち

・今度は、その文字で終わることばを考えてもらう。

〈ねらい〉

洗礼者のヨハネはその素晴らしい働きで多くのイスラエルの民から信頼を得、多くの人に洗礼を授けた。その行為、権限が与えられていても決して誇らず、高ぶらず、ただひたすらに主イエスの到来の準備をした。この謙虚で頑なまでの神への態度が私たちの信仰生活とどのような関わりがあるのかを学ぶ。また、主イエスを見たときに、「神の小羊」と叫び、ヨハネの弟子たちまでもが主イエスに従った。そのヨハネの証、また、どの「声」に聞き従うのかを一緒に考える。

〈展開例〉

1. ヨハネさんの誕生の次第を考えてみよう。
ヨハネさんはお父さんのザカリアさん、お母さんのエリザベトさんから生まれましたが、生まれる前、とても不思議な出来事が起こりました。どのようなことだったでしょう。
→ザカリアさんとエリザベトさんには子どもがいませんでした。長い間子どもが生まれるようにとお祈りしていましたが、神様はそれを聞いてくださいました。でも、御使いガブリエルを通して教えてくださったのでとても驚いたのです。(ルカ1:13)
2. ヨハネさんの働きについて考えてみよう。
ヨハネさんはどのような働きをするためにこ

の世に来たのですか。

→ヨハネさんは自分のことを証するためではなく、イエス様を証しするために生まれてきました。だから、自分の栄光を表すのではなく、イエス様の栄光を表すために働きました。また、すべての人がイエス様によって信じるように準備をするためでもありました(ヨハネ1:7、20、21)。ヨハネさんは声を張り上げて、イエス様のことを喜んで証しし(ヨハネ1:15)、水で洗礼を授けました(ヨハネ1:31)。

3. ヨハネさんがイエス様のことをどのように考えていたのか確かめてみよう。
イエス様がヨハネさんの方へ来られました。そのときに、ヨハネさんは何と言いましたか。
→「見よ、世の罪を取り除く神の小羊だ」(ヨハネ1:29)。
4. 「声」について考えてみよう。
ヨハネさんは、「わたしは荒れ野で叫ぶ声である」と言いました。「声」とはいったい何でしょう。その箇所から考えてみてください。
→荒れ野(罪と滅び)の中で「声」(御言葉)を語る者、という意味です。光(イエス様)について証しするためにこの世に来たヨハネさんのように、私たちも「声」を語り、光を証して喜んで生活しましょう。

ねらい

- 旧約最大の預言者とも言われる洗礼者ヨハネの偉大な生き方を学び、また主イエスとの違いについても考えてみる。

展開例

- 洗礼者ヨハネは、クムラン教団のエッセネ派出身とも言われる、偉大な預言者。主イエスも、またのちに主イエスの弟子になった何人かも、かつてはヨハネの弟子であったと推測されている。ヨハネ教団は、当時力があり、しばしば主イエスの弟子と対立し論争している。論点は、旧約と新約の違いを明らかにしている。断食論争や安息日論争等。ヨハネ教団は、厳格な律法

主義の点では、ファリサイ派に近かった。

- 主イエスがヨハネの水の洗礼を受けた出来事は、旧約との連続性を示す。福音は、旧約時代の課題を継承しつつ、新しい時代の訪れを告げている。

話し合ってみよう！

- 悔い改めを説く水の洗礼と、福音を説く主イエスの違いについて話し合ってみよう。

祈り

主イエスの福音が悔い改めの土台の上に立っていることを理解させてください。

○暗唱聖句○

ヨハネ福音書1:29

○祈りの課題○

聖書日課

日	ヨハネ福音書	1章19～28節
月	マタイ福音書	3章1～12節
火	マタイ福音書	3章13～17節
水	マルコ福音書	1章1～11節
木	ルカ福音書	1章5～25節
金	ルカ福音書	1章57～66節
土	ルカ福音書	3章1～20節

☆三日記☆

テキスト ヨハネによる福音書2章1～12節

〈水がぶどう酒に〉

ガリラヤのカナで行われた婚礼の喜びの席に、イエス・キリストも同席して下さっています。インマヌエルの祝福が現実となっています。神の民の祝宴がここに先取りされていると言えますでしょう。

しかし予期せぬ事態が起こります。客人をもてなす大切なぶどう酒がきれてしまったのです。これは花婿や花嫁はもとより、宴席をしつらえた側の者たちにとっては大失態です。このように喜びのただ中に突如危機や困窮がおそい、それがわたしたちの人生を深くえぐるということはめずらしいことではないと思います。

このときイエス・キリストは水をブドウ酒にかえられ、この宴席をお救いになります。これは主イエスがなさった最初の奇跡であると言われます。

ここには水とぶどう酒との鮮やかな対比があります。水は人間の外側をきれいにすることはできますが、人間の内側をきよめることはできません。

水をぶどう酒にかえるみわざによって、主イエスはご自分が無から有を生み出し、罪を赦し、死者をよみがえらせる力と権威を持っておられるお方であることを示されたのです。すなわちぶどう酒は神の天からの救いの恵み、主イエスの十字架と復活のみわざを通して人間に注がれる恵みをあらわしているのです。ぶどう酒とはそれゆえに主イエスのみ言葉であり、また聖餐の恵みであると考えられるでしょう。

人間は自分で自分をきよめるわざではなく、ぶどう酒、主のみ言葉と杯によって生かされるので

す。

この世界にあってぶどう酒をたくわえている場所はキリストの教会です。主の日の礼拝において、説教と聖餐の恵みを通して、主の民はぶどう酒を豊かに受けて、みずからの命を養います。

しかしそれにとどまらず、教会はぶどう酒の欠乏に悩む世の人々にぶどう酒を持ち運ぶことをもおのが使命とするのです。

ぶどう酒の味見をした宴会の世話役は、はじめのうちこのぶどう酒がどこから来たのかを知りませんでした。そのように世界ははまだ真の命の恵みのありかを知らず、ぶどう酒に渴き、み言葉の飢饉にうめいています。だからこそ、主のぶどう酒をたずさえて遣わされていく召使、すなわち教会のつとめは大きいのです。

〈マリアの祈り〉

主イエスの母マリアは、ぶどう酒の欠乏に気づいたとき、主イエスに「ぶどう酒がなくなりました」と告げました（3節）。ある神学者は、このマリアの短い一言こそが祈りそのものだと語っています。

そのとおりであると思います。祈りとは人間がみずからの困窮の中で主にぶどう酒の欠乏を訴え、ひたすらにぶどう酒を願い求めることなのです。

マリアは真に求めるべきお方に、真に求めるべきものを求めたのです。わたしたちも自分自身の欠乏を知り、単純素朴にぶどう酒を祈り求めるものでありたいと思います。（木下裕也）

テキスト ヨハネによる福音書2章1～12節

(単元のねらい)

ヨハネによる福音書は、主イエスが最初になされた奇跡としてこの物語を記す。主イエスは、婚礼というもっとも人間的な喜びの場に共にいてくださる。しかも、その喜びのはかなさを先回りするかのようにして危機を祝福へと変えてくださる。この物語に込められているメッセージは広く深い。水がめの意味、ぶどう酒の霊的な意味などについて、ヨハネは読者に告げる。しかし、この説教では主イエス・キリストが共にいてくださる人生の幸いと確かさを示すことに集中し、その主を信仰によって迎え入れることへと励ます。なお、『子どもカテキズム』の間22を参照のこと。

「イエスさまが助けてくださる」

イエスさまが、伝道のお働きをし始めたばかりのある日のことです。ガリラヤのカナという村で結婚式が行なわれました。結婚式が終わると、お祝いが始まります。このお祝いの席は、大勢の人たちがやってきて、何日もかけて祝われる、盛大なお祝いでした。美味しいお食事やそしてぶどう酒もたくさん振舞われます。二人はとても幸せそうです。

ところが、そんな楽しく嬉しいときに、大変なことが起こってしまいました。ぶどう酒が足りなくなってしまったのです。このままだと、楽しく続くはずのお祝いの席は台無しになってしまいます。一緒に喜んでくれるはずのお客さんたちは、言うでしょう。「なーんだ、途中でぶどう酒がなくなってしまうなんて、きちんと用意することもできないような、この二人のこれからの生活は、大丈夫かなあ。上手く行くかなあ。あー、しらけちゃうなあ。」二人の間にもこんな話がでるかもしれません。「ねえ、〇〇さん、あなたがぶどう酒を用意するはずではなかったかしら？」「いや、〇〇さん、君の責任だったはずだ。」最初の夫婦げんかになるかもしれません。さらにひどくすれば、二人の親戚、両親までが言い争うかもしれません。とにかく、ぶどう酒がなくなってしまうたら、大変なことになるのです。

さて、そこに、イエスさまのお母さん、マリアさんも、イエスさまと弟子たちも招かれていま

た。そのことに気がついたマリアは、イエスさまにこの大変な状況を知らせます。

イエスさまは、これを聞いて、このようにおっしゃいました。「この家には、ユダヤ人のしきたりどおり、手や足を清めたりするための水がめ、100リットルの水を入れられる大きな水がめが6つおいてありますね。その水がめに水をいっぱいに入れなさい。」召使たちは言われるままにしました。けれどももしかすると、心の中にこのような思いが湧いたかもしれません。「ユダヤ人のしきたりに使うお水とぶどう酒が足りなくなったことと何の関係があるのかなあ。」するとイエスさまは、さらにその水を飲んで宴会の席に持って行きなさいとおっしゃいます。召使は、きっとさっきよりもっと強く思ったかもしれません。「エーッ、嘘でしょう。ぶどう酒がなくなりましたので、手や足を洗うためのお水を飲んでくださいってことかなあ。大丈夫だろうか……。」けれども、召し使いたちはイエスさまの言われたとおりにしたのです。

さあ、このお祝いの席のお世話をする人が、召使たちが運んで来た水がめを見て、顔色を変えました。「そんな手や足をあらう水をこんなところに運んできて何を考えているんだ、あの召し使いたちは。」けれども、よく見てみると、水がめの中には、ぶどう酒があふれているではありませんか。さらに、舐めてみるとそれはそれは美味し

かったのです。今までのぶどう酒よりも美味しいのです。とても驚きました。そして、誰よりも驚いたのは、召使です。そしてマリアさんや弟子たちも驚きました。ぶどう酒が足りなくなって困っていた人たちは皆、驚きました。水がぶどう酒に変わったからです。そうです。イエスさまがなさったのです。イエスさまは、この二人の結婚式を祝福してあげたからです。イエスさまは、この二人にだけではなく、僕たち私たちをもこのように祝福したいと思っています。ですから、

皆の中で、この二人のように幸せだなあ、嬉しいなあ、楽しいなあと思っているところで、そこからまっさかさまに落ち込んでしまうような嫌な目があったことのあるお友だちはいますか。「ああ、もうダメだ。もうおしまいだあ。」思わず叫んでしまいたくなるような冷や汗をかくようなときです。先生には、あります……。そんなとき、何が助けになるのでしょうか。何が本当に僕たち私たちを支えてくれるのでしょうか。それは、イ

エスさまと一緒にいてくださるかどうかです。もしも、このお祝いの席にイエスさまがいてくださらなければ、この二人の始まったばかりの新しい生活はどんなに悲しく、大変なことになってしまったことでしょう。

でも、二人は、自分たちの結婚式にイエスさまをお招きしていたのです。そうです。僕たち私たちも、嬉しいときも、悲しいときも、健康なときにも、病気のときにも、いつでもイエスさまをお招きしてください。でも、本当を言うと、イエスさまの方が、皆がお願いするより先に、「わたしのところに来なさい。わたしはいつもあなたと共にいるのだ。」と招いておられるのです。だから、僕たち私たちは、今日も、イエスさまに教会に来ることができたのです。だったら、僕たち私たちも、積極的に、「イエスさま、どうぞいつも一緒にいてください。イエスさまから離れないように助けてください。」とお祈りしましょう。

(相馬伸郎)

[今日の暗唱聖句]

ヨハネによる福音書 1章14節前半

言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。

わたしたちはその栄光を見た。

〈ねらい〉

真の救いの恵みを与えてくださるイエスさまが共にいてくださることの幸い、平安を感じる。

〈展開例〉

このカナの結婚式でぶどう酒がなくなったときにイエスさまに命じられて水がめに水を汲んだ僕たちはどんな風に思ったでしょう。どうしてこんなことをするのか不思議に思ったでしょうね。おまけに、この水を汲んで宴会の席にもって行きなさいというイエスさまのお言葉を聞いた時は、びっくりしたでしょうね。ぶどう酒がなくて困っている時に、手や足を洗う水などもっていったらしかられるに違いないと思って怖くなったかもしれません。けれども、僕たちはイエスさまのおっしゃるとおりに従いました。すると、水はぶどう酒に、しかも前のものよりもっとおいしいぶどう酒に変

わっていたんですから、びっくり仰天ですね。こうしてイエスさまは、この二人の結婚式を祝福してくださいました。

この奇跡は、イエスさまの救いの恵みを表しています。どんなに困ったことが起こっても、わたしたちを命がけで愛してくださって、一番よい方法で助けてくださるイエスさまと一緒にいてくださるなら、わたしたちは何も怖がらなくてもいいのです。



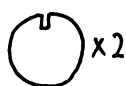

〈お祈り〉

天のお父さま、どんなに困った時も、どんなに悲しい時も、イエスさまと一緒にいてくださることを、わたしたちが忘れることがありませんように、どうぞお導きください。イエスさまのお名前によってお祈りいたします。アーメン。

〈やってみよう〉

工作をしよう！

コロコロ コロちゃんを作ろう！

- ① 厚手の紙で同じ大きさの円を2枚つくる。 
- ② それぞれの面に色をぬったり絵を描く。 
- ③ それぞれの円の中心に向って紙の厚みと同じ切り込みを半径の $\frac{1}{4}$ くらい入れる 
- ④ それぞれの切り込みどうしをはめこんで出来上がり！ 
 - ☆ おやつのおびせんべいでもつくれるのや！ (しかもでもしらないよ!?)
 - * 坂からこぼした(り)息をふまかしてみよう!

〈ねらい〉

なんでもできるイエス様がいっしょにいて助けてくださるからだいじょうぶ！

イエス様が私たちを神さまのところへ道に迷わないように連れて行ってくださる。

〈展開例〉

礼拝で聞いたお話を思い出しましょう。

この結婚式の花婿・花嫁は、ぶどう酒がなくなりそうになったところを、イエス様に助けていただきました。

○みなさんも困った時にだれかに助けてもらった事があるでしょう。どんなことがあった？

※子どもたちのレスポンスを受け入れながら、教師が主に助けられた経験を語りましょう。

ここでは、「回心」ということよりも、日々の祈りが聞かれた、というような経験が良いと思います。

私たちのこの世の歩みにおいてはいろんなことがあります、イエス様がいっしょにいてくださるから「すべてのことはわたしにとって益である」

(ローマ8：28) という喜びを語りましょう。

○先週、イエス様は私たちを神様のところへつれていってくださる、ということをお話しました。その道のりでも、イエス様は私たちを助けてくださいます。

※神様への道を踏み外してしまって迷いそうになった時に、イエス様が助けてくださって、また神様への道に戻ることができた教師の経験をかたまりましょう。どんな小さなことでもかまいません。教師自身が、イエス様に守られ導かれている事を改めて感謝し、喜びを語りましょう。

〈ちいさなお祈り〉

○イエス様が私を助けてくださったことを一つ思い出して、「ありがとう」とお祈りしましょう。

○イエス様がいつも私といっしょにいて、迷わずに神様のところに行けるようにまもってくださることに、「ありがとう」とお祈りしましょう。

〈やってみよう〉

ゲーム：目かくしクレーン

- ・用意するもの 目かくし用タオル
ジュースの空き缶 5個くらい

- ・一人ずつ目かくしをし、片手で空き缶を積み上げていく。
制限時間1分間で、たくさん積み上げた人が勝ち。
まわりの人は「もっと右」「もっと上」と声をかける。

〈ねらい〉

イエス様がいつも私たちと共にいて、支え、助けてくださることを学ぶ。

〈展開例〉

1. 礼拝説教のおさらいとして、質問し、対話しよう。

- ①ぶどう酒がなくなったことをイエス様に知らせたのは誰でしたか。(母マリヤ)
- ②イエス様は召し使いたちに何とおっしゃいましたか。(「水がめに水をいっぱい入れなさい」)
- ③イエス様が人々の前で奇跡を行ったのはこれが何度目ですか。(一度目)

2. 話し合ってみよう。

- ①結婚式の後のパーティーや披露宴に出席したことはありますか？ 新しい家庭の誕生をみんなでお祝いする、とても楽しくて賑やかな時ですね。でも、イエス様のお働きとはあまり関係がない場のようにも思えます。イエス様はこれから病気の人を治したり、お腹がすいている人に食べ物を与える奇跡を行われますが、最初の奇跡はこのような喜びの場を

救うために行われました。イエス様は大きなことでも小さなことでも、私たちのことをよくご存知で、常に必要な助けの手を差し伸べてくださるのですね。イエス様が共にいて助けてくださったことを感じた出来事はありませんか？

- ②イエス様の母マリヤは、ぶどう酒がなくなっていると知った時、すぐにイエス様にそのことを知らせました。イエス様が助けてくださる、その力を持っておられることを知っていたのですね。私たちは何か困ったことがあった時、すぐに素直に神様にお祈りすることができるのでしょうか？「こんなお祈り聞いてもらえないかな」と思ったことはありませんか？

☆子どもたちの率直な意見や経験を聞き、互いに話し合う。

☆イエス様が私たちの身近にいて、絶えず導き、助けてくださること、神様に素直に祈り願うことの大切さを確認する。

☆教会学校として、または個人の祈りの課題があれば、分かち合い、覚えて共に祈る。

ねらい

- 主イエスが、水をよいぶどう酒に変えて人々を喜ばせたように、人々の魂の渇きをいやすお方であることを学ぶ。

展開例

- よいぶどう酒とは、よいぶどうの木の実り、成果と考えられる。主イエスは、旧約のイスラエル(ぶどうの木にたとえられる)の成就として、よいぶどう園の実りを人々にもたらすお方として、この世に來られた。この奇跡は、主イエスのこれからの、神から与えられた働きの成果の先取り、予見、しるしであった。

- 最初の奇跡が婚姻の喜びの席でなされたことは、主イエスの福音が私たちに喜びと感謝をもたらすものであることを示している。

話し合ってみよう！

- 主イエスと信仰者の関係は、しばしば婚姻の関係にたとえられる。この意味について、話し合ってみよう。

祈り

- 主イエスは私たちに喜びと祝福を与えてくださるお方であるという、信頼感をお与えください。

○暗唱聖句○

ヨハネ福音書1:14

○祈りの課題○

聖書日課

日	ヨハネ福音書	2章1～12節
月	マルコ福音書	2章18～22節
火	エフェソ書	5章21～33節
水	マタイ福音書	22章1～14節
木	イザヤ書	5章1～7節
金	ヨハネ福音書	15章1～5節
土	ヨハネ福音書	15章6～10節

☆三日記☆

テキスト ヨハネによる福音書3章1～16節

〈ニコデモの信仰〉

1節にあるように、ニコデモはユダヤ教ファリサイ派の一員であり、さらにユダヤの議会の議員でもありました。当時のユダヤにあっておそらくは指導的な地位にあり、尊敬もかちえていた人であったと思われます。

ところで、ファリサイ人というと、主イエスの教えに対立し、ついには主イエスを十字架に追いやった人々という印象があります。しかしファリサイ人の中にも、このように真摯に主イエスのもとを訪れて、み言葉に耳を傾けようとした人があったのです。彼のような立場になれば、主イエスを訪ねるといっただけでいくつもの壁やさまたげがあったはずですが（彼が夜主イエスを訪ねた（2節）ところにも、それはうかがえるのではないのでしょうか）。そのことを思うとき、主イエスの恵みはどのような人にも及ぶのだということをおぼろげにはおれませんが、

ただし、ニコデモの信仰は、まだこのときには不確かであやういものでした。ここでの主イエスとニコデモとの対話も、真剣ではあってもどこかちぐはぐなところがあります。

2節でニコデモは主イエスのことを神からつかわされた教師、また偉大なしるしを行う方として告白しています。自分もこのような教師に学ぶなら神の道に入り、偉大なわざを行う力を得ることができるのではないかの期待もあったかもしれませんが、しかし、本当に偉大な奇跡は、人が神の恵みの力によって新しく生まれ変わることなのです。

〈新たに生まれなければ〉

主イエスはニコデモに仰せになります。

「はっきり言っておく。人は、新たに生まれなければ、神の国を見ることはできない」（3節）

ニコデモはこのみ言葉を誤解して、新たに生まれるとはすでに年老いた自分がもういちど母の胎から生まれなおすという意味だと思ったのです。第二の人生を、白紙の、まっさらなものとして生きなおすことだと思ったのです。

しかしたとえ第二、第三の人生が用意されていたとしても、わたしたち人間はアダムのすえであり、生まれながらに罪と死の支配のもとにあります。神の恵みによって存在の根本において作りかえられなければ、どれほど長寿を与えられても、まためざましいご利益にあずかっても、神の国を見ることはできないのです。

3節の「新たに」という言葉は、もともとは「上から」という意味を持つ言葉です（実際にここを「上から」と訳している聖書翻訳もあります）。上から、天から来られたメシアの救いのみわざにあずかることによって、人は天からの恵みの力によって新しく生まれるのです。罪と死に支配された存在から、罪赦され永遠の命の祝福に生きる者に変えられるのです。

そのように人を新しく生まれ変わらせてくださるのは主イエスのみ霊です。聖霊は風のように自由なお方です（8節）。風が思いのままに吹くように、聖霊の息吹もまた何者にもさまたげられず、どんなにかたくなな心をも揺さぶり、説き伏せ、神の恵みの力によって支配なさるのです。

（木下裕也）

テキスト ヨハネによる福音書3章1～16節

〔単元のねらい〕

老教師ニコデモと主イエスとの対話の物語が与えられている。救いの教理を物語る上で、ふさわしいテキストである。ここで、救いの必要性を学びたい。救いは、上（神）から、恵みとして与えられること。信仰によって、主イエス・キリストを信じ、主イエス・キリストと一つに結び合わせられることを学びたい。小聖書とも呼ばれる暗唱聖句がこの物語の直後に記されていることに留意したい。ここでは、ニコデモの信仰告白として理解している。キリストの救い、福音のまさに中心を語る日となる。いっそう祈って備えたい。なお、『子どもカテキズム』の間28～31を参照のこと。

「あたらしく生まれる」

ニコデモという年をとった、見るからに立派そうな人がいました。それもそのはず、この人は、ユダヤの国会議員なのです。ある日の夜のことで、ニコデモさんは、イエスさまの噂を聞いて心がそわそわしていました。「イエスさまという人は立派な聖書の先生に違いない。そうでなければ、水をぶどう酒に変えたり、神殿を清めたり、驚くような奇跡をなされるはずがない。わたしは、皆から立派な先生と呼ばれてきた。けれども、本当は、確信がないのだ。本当に神さまの国に入れる自信がないのだ。あの人なら、きっと答えを出してくれるに違いない。しかし、うーん、皆が集まっているところに出かけて行くのは恥ずかしい。そうだ、誰の目にも留まらないように、こっそりと夜中に行こう。」こうして、ニコデモさんは、夜の闇にまぎれるようにして、イエスさまのところに出かけて行きました。

さて、イエスさまは、ニコデモさんが何をしに来たのか。何を心悩んでいるのか、もう分かっておられます。そこで、こうおっしゃいました。「人は、新たに生まれなければ、神の国を見ることはできない。」つまり、神さまの国に入ることが出来るのは、新しく生まれた人だけである、ということです。ニコデモさんはすぐに質問しました。「こんな年をとった者が新しく生まれることなどできませんよ。母親の胎内にもう一度入るなんて……。 (しかもこのわたしの母親はとうの昔に死

んでしまっている……。)」そこで、改めておっしゃいました。「人が新しく生まれるというのは、赤ちゃんが生まれるということとは違います。神さまの国に入るのは、神さまの霊によって生まれることが必要なのです。神さまの霊を受けることが新しく生まれることで、そのことこそ神さまの子として新しく生まれることなのだ。神さまの霊は、風のようにこの目では見えない。けれども、風が通れば、音がする。木の葉が揺れる。風は見えないけれど確かにあるのだ。神さまの霊も目には見えないが、神さまの御心のままに吹くのだ。」

ところがニコデモは、答えました。「どうして、そんなことがありえましょうか。」信じるのができなかったのです。イエスさまはおっしゃいました。「ニコデモさん、あなたはイスラエルの先生のはずなのに、こんな基本的な真理が分からないのですか。もう一度言います。人は、新しく生まれなければ、つまり神さまの霊によって生まれなければ、神さまの霊を受けなければ、神さまの国に入れません。永遠の命を受けることができません。」イエスさまは、何とか、わざわざ尋ねて来たこの真面目なニコデモさんを救ってあげたかったのです。信仰の確信、永遠の命の確信、希望を与えてあげたかったのです。けれども、この時には、できませんでした。心が固く閉じてしまって、イエスさまのおっしゃることを理解できませんでした。

イエスさまは、しかし、最後まで、お見捨てになられません。イエスさまが、僕たち私たちに神さまの霊を与え、神さまの子として、天国に入れる子ども、永遠の命を受けることができるためにくださったあの御業を、前もって教えられるのです。それは何ですか。十字架です。こうおっしゃいました。「モーセが荒れ野で蛇を上げたように、わたしも木の上に上げられなければならない。」イエスさまは、イスラエルの人なら誰でも知っているモーセが荒れ野で蛇を上げたお話をなさいました。それは、毒蛇に噛まれた人が、神さまの命じられるように、長い木の上に掲げられた青銅でつくった蛇を仰ぎ見るなら助かるというお話です。つまり、イエスさまは、罪という毒蛇に噛まれて死ぬほかないような僕たち私たち罪人の命を救うため、永遠の命を与え、天国に入らせるために、十字架についてくださるといふ約束です。このイエスさまを仰ぎ見ること、信仰するなら救われるということをはっきりと教えてくださったのです。

ニコデモさんは、夜の闇に一人、来たときよりももっと暗い顔つきをして帰って行きました。イエスさまはどんな思いでこの人の背中をご覧になっておられたことでしょうか。けれども後で、もう一度、ニコデモさんは登場します。それはイエスさまがお墓に葬られたときです。この人は、イエスさまの十字架を見たのです。先生は、このように信じています。ニコデモは、その時にはじめて気がついたのです。「ああ、分かった。イエスさまの十字架は、このわたしを新しく生まれさせるためだったのだ。わたしはイエスさまを信じる。」やがて、ニコデモさんとイエスさまだけしか知らない、あの夜のお話をお弟子さんに言いました。ニコデモさんは、涙を流しながら言ったはずです。「神さまはイエスさまを与えるほどにこのわたしを愛してくださったのだ。このわたしが神さまの子となるために、十字架につけられたのだ。なんという愛だろう。この神さまの愛をわたしも伝えたい。」

(相馬伸郎)

[今日の暗唱聖句] ヨハネによる福音書3章16節

神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。

独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。

〈ねらい〉

イエスさまを信じる者だけが、新しく生まれた人として天国に入ることができる、ということを感じる。

〈展開例〉

みんなはお母さんのおなかの中から生まれたよね。もし、もう一度お母さんのおなかの中に入ってもう一度生まれないと天国にいけないよ、と言われたらどうする？ そんなことできっこないよね。今日の聖書の箇所には、そういう勘違いをした人が登場します。ニコデモさんです。ニコデモさんはユダヤの国の国会議員で、偉い人でした。でも、ニコデモさんは本当に自分が天国にいけるかどうか不安だったのです。そこで、いま評判のイエス先生ならどうすれば天国にいけるか教えてくださいに違いないと思ったのです。そこでこっそりとイエスさまのところにいきました。その時イエスさまは、「人は新しく生まれなければ天国に入れませんよ。」とおっしゃいました。そこでニコデモさんは困ってしまいました。でもイエスさまがおっしゃられたのは、お母さんのおなかの中に戻りなさいと言うことではありませんでした。

わたしたちの身代わりに十字架の上で罪の罰を換わって受けてくださるイエスさまを信じる人だけが、すべての罪を赦されて、生まれ変わって、天国に入ることができます、ということだったのです。ニコデモさんはこの時イエスさまのおっしゃることが分かりませんでした。でも、イエスさまが十字架におかかりになられた時、そのことが分かったのです。「イエスさまはこのわたしが生まれ変わるために、わたしの身代わりとなって死んでくださったのだ。」このことが分かったのです。聖霊なる神さまがそのことをニコデモさんに分からせてくださったからです。聖霊なる神さまは、今も人にイエスさまのことをわからせてくださって、信じて生まれ変わることができるようにしてくださるのです。

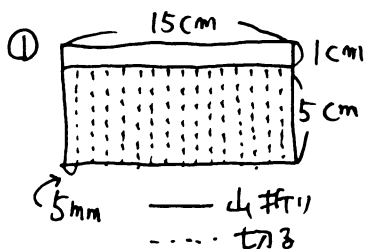
〈お祈り〉

神さま、わたしたちがイエスさまを信じて、生まれ変わって天国にいけるようにしてくださいましたことを感謝いたします。わたしたちのお友だちも、イエスさまを信じて生まれ変わることができますようにお導きください。イエスさまのお名前によってお祈りいたします。アーメン。

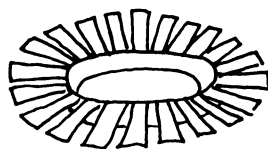
〈やってみよう〉

工作をしよう！

花びら落下傘を作ろう！



② ぐるっと丸めて
テープでとめて
完成！



↓
高いところから
落とすとクルクル
回って落ちる。

※ 紙は印刷用紙でよい。

〈ねらい〉

まだ子どもの私たちも、アダムの末であり神の国にはふさわしくない。

イエス様が私たちが神さまにふさわしいように新しくしてください。

〈展開例〉

礼拝で聞いたお話を思い出しましょう。

ニコデモさんは、イエス様に「新しく生まれなければ神様の国には行けない」と言われておどろいてしまいました。

○どうして「新しく生まれ」なければならないのだと思いますか？

※ここでは、まだ小さい子どもたちも「神さまの言う事を聞くよりは、自分が神さまになりたい」（創世記3：4）と考えたアダムとエバの子どもたちであり、そのままでは神さまにはふさわしくないということをごまかさずに語りましょう。

○「新しく生まれる」というのは、どういうことだと思いますか。

※子どもたちは「生まれかわり（輪廻）」というようなことも言うかもしれませんが、それに対しては、この命は神さまからいただいたたった一度限りのもので、この世での生まれかわりは無いという事をはっきりと語っておきましょう。

イエス様が、「神さまになりたい」私を十字架にもって行っていっしょに死んでくださり、三日目によみがえって「神さまを心からよろこぶ」新しい私、神の子とされた私を連れてきてくださったことを語りましょう。

このことはかなり抽象的なことなので、子どもたちには、にわかに理解しにくいことと思われませんが、ふさわしい時に魂を照らしてくださる聖霊の働きに信頼して、教師のいただいている確信を自信を持って語りましょう。

〈ちいさなお祈り〉

○イエス様が私を神様の国にふさわしくないままでおいておかないということをよろこんで、「ありがとう」とお祈りしましょう。

〈やってみよう〉**クイズ**

- ① イエス様に「新しく生まれなければ神の国には行けない」と言われておどろいたのは、○ニコデモさんです。
- ② 「新しく生まれる」というのはどういうことでしょうか。
次の中から選んでください。
ア. もう一度、お母さんのお腹の中に入って生まれなおすこと。
イ. 「神様を心からよろこぶ」新しい私にかわること。
ウ. 一度死んでちがう私になること。
エ. 一度死んでちがう動物になること。

〈ねらい〉

救いは恵みであり、主イエスを信じる信仰によってのみ与えられる。主イエスと結ばれることによって新たに生まれ、永遠の命をいただくことができるのだという聖書の中心メッセージをしっかりと伝えたい。

〈展開例〉

いくつかの質問をし、自由に話し合いをするなかで、生徒一人一人の理解を深めることができるようにしたい。

○質問例

- ①ニコデモは何のためにイエス様のところに来たのでしょうか。また、なぜ夜に来たのでしょうか。この時のニコデモの気持ちも考えてみましょう。
- ②イエス様のお答えは「人は新たに生まれなければ神の国を見ることはできない」でしたが、「新たに生まれる」とはどういうことですか。また、どうしたら新たに生まれることができるのでしょうか。
- ③私たちが救われるために、イエス様は何をし

てくださいましたか。また、救われるために、私たちに必要なことは何ですか。

〈やってみよう〉

二人組になって、ニコデモとイエス様の役になり、それぞれの問と答えを実際に読み合ってみよう。

〈暗唱聖句〉

神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。

ヨハネ3:16

☆皆でくりかえし暗唱し、この機会にしっかり覚えることができるようにしたい。

〈祈り〉

神様、私たちが救ってくださるために、御子イエス様が十字架にかかり身代わりとなって死んでくださったことを感謝します。私たちがそのことを心から信じ、イエス様と結ばれ、永遠の命をいただくことができるようにしてください。アーメン。

ねらい

○人は二度生まれる、肉体的に母から、霊的に神によって。主イエスは、この二度目の誕生を人に与えるためにこの世に来られた方であることを学ぶ。

展開例

- 洗礼は、霊的生まれ変わりのしるしである。生まれ変わらせる力は、主イエスの救いの恵みを各人の心に吹き付ける聖霊の働き（風とか息の意味もある）である。聖霊の働きによって、各人の心に信仰が植え付けられる。信仰によって救われるとは、このことを意味している。
- 霊の働きは、風と同じように目には見えないの

で、不思議な感じがする。しかし、霊が働くところに必ず結果があらわれる。

○教会共同体に聖霊の風が吹く。この風は、愛・喜び・平和・親切などの人格的交わりをもたらす。

話し合ってみよう！

○教会や私たちの交わりにどのような風が吹いているか、感想を語り合おう。

祈り

神よ、私の内にきよい心を創造し、新しい確かな霊を授けてください。

○暗唱聖句○

ヨハネ福音書3:16

○祈りの課題○

聖書日課

日 ヨハネ福音書 3章1～16節
 月 ペトロ書 2章1～5節
 火 ガラテヤ書 5章16～21節
 水 ガラテヤ書 5章22～26節
 木 ローマ書 8章1～11節
 金 ローマ書 8章12～17節
 土 コリント書 12章1～3節

☆三日記☆

テキスト ヨハネによる福音書4章1～26節

〈サマリアの女〉

主イエスとサマリアの女との対話の中でまず浮かび上がってくるのは、この女性が人生の悲しみの中で生きてきた人だということです。

まず一般的な背景として、サマリア人とユダヤ人とは長い年月にわたって敵対関係にありました。人と人が憎み合い、たがいに敵意を燃やすというのは悲しいことです。このことがこの女性の人生にも、きつとかげをおとしていたはずです。

さらに個人的な悲慘があきらかにされます。16～18節で主イエスは彼女の境遇をずばりと言い当てておられますが、この人は過去に五人の夫と連れ添い、今はまた夫ではない男性と暮らしています。周囲には何と身持ちの悪い、と眉をひそめる人々もあったでしょう。しかし見方をかえるなら、この人は何度も愛を求めながら、そのたびに愛に破れてきたと考えることもできるのです。その果てに人生に疲れ、望みを失ったまま生きていたとも考えられるのです。

しかし主イエスはこの人にも出会ってくださったのです。主イエスとの出会いにおいてこそ、わたしたちはあらゆる罪と憎しみ、争いと敵意の鎖からときはなされ、真実の愛と命の祝福に生きることができるのです。

〈永遠の命に至る水〉

この対話において、はじめは主イエスがサマリアの女に、水を飲ませてほしいと乞うておられます。しかし主イエスは、ご自分こそ永遠に渴くことのない命の水を与えることのできるお方であることを明らかにされます。主イエスは仰せになり

ます。

「この水を飲む者はだれでもまた渴く／しかし、わたしが与える水を飲む者は決して渴かない。わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水がわき出る」(13～14節)

そして15節ではサマリアの女のほうが、主よわたしにもその水をくださいと乞い求めているのです。この転換はきわめて大切です。

主イエスこそわたしたちの命の水の源です。このお方こそ汲めども尽きせぬ命をわたしたちに注ぎ続けてくださる井戸です。そして主イエスを信じる者とは、この真に人を生かす命の水脈を知っている者のことなのです。

主イエスにつながる時、わたしたちは流れのほとりに植えられた木(詩編1編)のように、つねに神がくださる豊かな命を吸い上げ、渴くこともしおれることもなく、豊かに実を实らせ続けるのです。主イエスを通して命の神につながって生きることこそ、わたしたちにとってもっとも大切なことなのです。

〈霊と真理による礼拝〉

主イエスの到来によって、わたしたちにまことの神礼拝がもたらされました。霊と真理による(24節)礼拝です。

まことの礼拝は人間の手がつくりあげるものではありません。神がみずからそなえてくださるのです。み言葉を受け、聖餐にあずかる時、わたしたちは主イエスの真理のみ霊に生かされ、主イエスの命をいただいて歩む者となるのです。

(木下裕也)

テキスト ヨハネによる福音書4章1～26節

(単元のねらい)

主イエスとサマリアの女性が井戸辺で対話する。それは、ユダヤ人の男性、しかも律法の教師にとって「ありえない行為」であった。しかし、主イエスは一人の失われた羊を探し出される。それが社会の検舞台上で尊敬を集める男性であろうが、日陰に生きる女性であろうが、関係がない。この女性の問題は、人生の目的を見失っていることである。そのためには、主イエスは彼女に真の礼拝とは何かを示し、与えてくださる。子らと共に、改めて、人生の目的、真の礼拝の大切さを説き、このすばらしい主イエスを礼拝したい。なお、『子どもカテキズム』の間1～4を参照のこと。

「すばらしい礼拝」

イエスさまが伝道の旅をしておられた時のことです。弟子たちと一緒にユダヤからガリラヤに向かって歩いておられます。ガリラヤに早く行くためには、サマリアという国を通れば良いのです。ところが、ユダヤ人は決してサマリアを通りません。それは、サマリアの人たちのことを、「あんな人たちと関わったら、汚れてしまう」と軽蔑していたからです。

ところが、この時、イエスさまはサマリアを通って行かれたのです。どうしてでしょうか。それは、たった一人の人、女の人とお話をするためでした。そして今、イエスさまは、旅の疲れを覚えてシカルという町の井戸辺に腰を下ろしておられます。弟子たちは、イエスさまを残してお昼の買出しをしに行っています。ちょうど太陽が照り付ける一番暑いお昼の時のことです。向こうから一人の女性が水を汲みに来ます。こんな暑い時間に水を汲みにくる人など誰もいません。この女の方は、誰にも会いたくなかったようです。

イエスさまはその女の人を見ると、こうおっしゃいました。「すみません。お水を飲ませてください。」女の方はびっくりして、言いました。「ユダヤ人のくせに、どうしてサマリアの女性のこのわたしに水を飲ませてくださいなどと頼まれるのですか。」すると、イエスさまはおっしゃいました。「もし、あなたが本当の神さまのことを知っていて、このわたしのことを知っていたなら、

あなたの方から、水を飲ませてくださいとお願いするだろうね。そして、わたしはあなたに生きた水を与えてあげたと思いますよ。」これを聞いてますます驚きあきれてしまいました。女の方は、軽蔑するような口調で言いました。「お偉い先生。あなたは汲む物も持っていないし、この井戸は深いのです。どうやって、その生きた水とやらを汲もうって言うのですか。あるいは、この井戸ではないどこかの井戸から汲むのでしょうか。この井戸は、私たちの祖先、あの有名なヤコブの井戸なのです。すごいでしょ。」

イエスさまは、おっしゃいます。「この水をどれほど飲んでもまた喉が渇きますよ。しかし、わたしが与える水を飲む者は決して渇くことはありません。そればかりか、その人の内で泉となつてあふれ出ます。」それを聞いて、この人は目を丸くしてしまいました。そんな水があるわけないと思ったからです。でも、同時に思いました。もしもそんな井戸や水があるんだったら、毎日毎日、こんな暑いときにここまで来る必要もなくなる。そんな水が欲しい！ そう思ったのです。思ったとおり、イエスさまにお願いしました。

するとイエスさまは、いきなりこんなことをおっしゃいました。「あなたの夫をここに呼んで来なさい。」あんまり突然でしたから、この人はますます驚いて、正直に答えてしまいました。「わたしに夫はいません。」イエスさまはおっしゃい

ます。「その通り。あなたには五人の夫がいましたが、今の人は夫ではないですね。」この女の人、これでもうすっかりイエスさまがただの人ではないことが分かりました。イエスさまを、神さまの預言者と認めたのです。そこで、この人は心の奥底にしまいこんでいた質問をしました。「私たちは、目の前にあるこのゲリジム山で礼拝してきました。けれども、ユダヤ人のあなたがたはエルサレムが本当の礼拝場所であると言っています。本当はどっちなんですか。」

イエスさまはなんとお答えになったのでしょうか。「婦人よ。わたしを信じなさい。」イエスさまはここで、一番大切なことを、一番最初におっしゃったのです。「わたしを信じなさい。」イエスさまを信じること、これこそ本当の礼拝なのです。神さまは、昔はエルサレムの神殿を大切にされました。けれども、その時代は終わったのです。なぜなら、本当の神殿はイエスさま御自身だからです。人となられた真の神さま、イエスさまを信じて生きることが本当の神さまを礼拝することなのです。

イエスさまは、この女の人を、このように見ておられます。「本当の礼拝をしていないから、人生の目的が分からない。だから、心の中が空しい。その空しさを満たすために、どんなに好き勝手に遊んでも、ますます自分と相手を悲しませ、傷つけ、結局、人の目を避けて生きようになってしまう。なんと憐れなのだ。」けれども、この女の人だけが特別ではありません。僕たち私たちも、もしもイエスさまを礼拝しないでいたら、まったく同じです。僕たち私たちは、今朝、教会に来て、イエスさまに礼拝をささげています。これこそ、イエスさまが僕たち私たちに求めておられること、一番大切なことです。イエスさまは今、信じるひとりひとりに、命の水、正しく、本当の生きる道を、その力を与えてくださっているのです。これからも、イエスさまを信じて、本当の自分だけではなく、誰かを本当の意味で助けてあげる命の水をわけてあげたいと思います。イエスさまのところ、この教会に連れてきてあげたいと思います。

(相馬伸郎)

[今日の暗唱聖句] ヨハネによる福音書4章24節

神は霊である。だから、神を礼拝する者は、霊と真理をもって礼拝しなければならない。

〈ねらい〉

イエスさまを信じるこそが本当の礼拝であることを覚える。

〈展開例〉

この女の人は、毎日井戸に水を汲みに来ながら、「こんなことをしなくても水が手に入ったらいいのにな」と思っていたかもしれませんね。でも、この女の人に本当に必要だったのは、井戸の水だけではありませんでした。何度結婚しても幸せになれないこの女の人は、のどだけではなくて、心もからからに乾いていたのではないのでしょうか。イエスさまはそんなこのサマリアの女の人に、一番必要な命の水をくださったのです。この女の人は、礼拝をする時はゲリジム山で礼拝するのが正しいのか、ユダヤ人が言うようにエルサレムで礼

拝するのが正しいのか、どっちだろうと思っていました。けれども本当に大切なことは、礼拝する場所ではなくて、どなたを礼拝するかということなのです。本当の礼拝とは、神の子、救い主なるイエスさまを礼拝することなのです。わたしたちのことを命をかけて愛してくださる神の子イエスさまを信じて、イエスさまを礼拝する人は、イエスさまの大きな愛の中に生きることができます。そして、心がからからになったりしない、本当の幸せが与えられるのです。

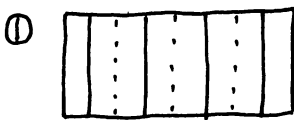
〈お祈り〉

イエスさま、わたしたちがあなたを心から礼拝して、いつも心の中に命の水がわきあふれるようにしてください。イエスさまのお名前によってお祈りいたします。アーメン。

〈やってみよう〉

工作をしよう！

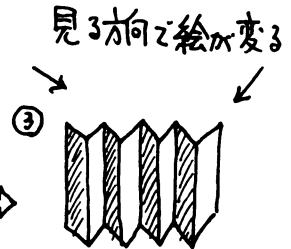
やぶにらみ絵本を作ろう！



① 長めの画用紙を、山折り谷折り交互に折る。



② ①の紙の半分のサイズの紙2枚に別々の絵を描いて、4つに切り分ける。



③ 4つに分けた絵を交互に貼り付ければ完成！

〈ねらい〉

子どもも大人も、いちばん大切なことは、神様のすばらしさを喜ぶこと。

神様を礼拝して、元気をいっぱいいただこう！

〈展開例〉

礼拝で聞いたお話を思い出しましょう。

イエス様はサマリアの女の人に「私を信じるのがほんとうの礼拝だ」とおっしゃいましたね。

私たちは、毎週、日曜学校で「礼拝」をしています。

○礼拝ではどんなことをしますか？

・さんびか、おいのり、聖書のおはなし、献金等
※礼拝にはいろいろな要素がありますが、そのどんなことも、イエス様のすばらしさを喜ぶことであると語りましょう。

さんびか：神様・イエス様ってすごいなあたたえる歌。

おいのり：何でもできる神様とイエス様に手伝ってもらっておはなしすること。

聖書のおはなし：神様とイエス様からいただくプレゼントの事を教えてもらうこと。

献金：私が神様にありがとうと言うしるし。

○毎週礼拝で神様から何をいただきますか？

毎週日曜日に礼拝でイエス様のすばらしさにふれることで、その週のこの世の働きに立ち向かう元気をいただいている教師の経験を語り、子どもたちにも「礼拝で元気をいただく」ことをすすめましょう。

〈ちいさなお祈り〉

○今日もイエス様が私たちを日曜学校につれてきてくださり、神様から元気をいただけることを「ありがとう」とお祈りしましょう。

〈やってみよう〉

めいろ

何秒でイエス様のところへ行けるかな？

(図版は103ページに掲載しています。)

〈目標〉

主イエス様は父なる神様の創られた自然にたどって、いきいきと豊かに誰にでもわかりやすい言葉で、私たちの救いについて教えてくださいました。特にこの場面では、誰からも見放されたサマリアの女と対話されることによって、彼女の心の奥底にある思いをしっかりと引き出され、救いの手をさしのべられました。私たちも、主イエス様の一人一人に向けられた救いの手に感謝しつつ、子どもたちとの対話の中で、一人一人が何を感じ何を持っているのかを、少しでも引き出してあげたいと思います。いくつかのテーマを決め、一人一人が簡単でも良いので、素直な意見を出し合って、話し合いたいと思います。

〈話し合いのテーマ例〉

1. 主イエス様がたとえられた自然と生活

- ① 泉って見たことありますか？ もしなくても想像してみてください。
- ② 水がないと私たちは生きていけません。どれくらい水が私たちの生活の中で大切かを、考えて見ましょう。
- ③ 今私たちの時代、水道の蛇口をひねれば水が出ます。しかし、この時代に水道はありませんでした。水道のない生活を想像してみてください。

2. サマリアの女について

- ① サマリアの人とユダヤの人はどうして仲が悪かったのでしょうか？
- ② この女の人はみんなから嫌われていました。私たちのまわりにも、みんなから嫌われている人がいませんか。また、私たち自身も嫌われたり、人を嫌ったりしてしまうのではないのでしょうか？ それはどうしてだと思いますか？
- ③ この女の人はどうしてイエス様に、真の礼拝について尋ねたのでしょうか？

3. イエス様の救い、真の礼拝

- ① どうしてイエス様は、この女の人に語りかけられたのでしょうか？
- ② 永遠の命を与える水とは何だと思いますか？今の時代、私たちはそれを何からいただけていると思いますか？
- ③ 今の時代の中で“渴いている”と感じるものはありますか？
- ④ あなたにとって真の礼拝とは何ですか？

☆話し合いのテーマはほんの一例です。短い時間でいくつも話し合うのは困難です。一つのテーマだけでも、じっくり話し合えば充分だと思います。

ねらい

- 生きた水、命に至る水、その人の内に泉となって湧き出る水を飲む幸いを求める。

展開例

- 良心のどがめに心が支配されるほど苦しいことはない。絶えず人目を気にして、自分が後ろ指を指されているごとく、おどおどした人生を送らなければならない。この女性は、愛を求めて飢え渴き、五人もの夫を持ったのであろう。自分の心が汚れている感じるほど惨めなことはない。
- 心にきよい泉を持った人の幸いはいかほどであ

ろうか。主イエスとの出会いは、この要求を満たしてくれるのである。

話し合ってみよう！

- 聖霊降臨（ペンテコステ）は、主イエスがこの世に渴くことのない水をもたらした記念日ではないだろうか。
- 証をするとはどういうことなのか、ヨハネ福音書4章28～30節から考えてみよう。

祈り

神よ、私の内にきよい心を創造し、新しい霊によって渴きをいやしてください。

○暗唱聖句○

ヨハネ福音書4:24

○祈りの課題○

聖書日課

日	ヨハネ福音書	4章1～6節
月	ヨハネ福音書	4章7～15節
火	ヨハネ福音書	4章16～26節
水	ヨハネ福音書	4章27～30節
木	ヨハネ福音書	4章31～38節
金	ヨハネ福音書	4章39～42節
土	ヨハネ福音書	7章37～39節

☆ニ日記☆

テキスト ヨハネによる福音書5章1～26節

(1) ベトサダの池の周りで

ベトサダの池の周りには病を負い、癒しを求め人々が集まっていたことが語られています。この大勢いる病人たちの中の一人の人物に主イエスは声をかけておられます。主はその全能の力でもって長患いに苦しむ男の苦悩を知り、声をかけられるのです。主イエスは、多くの者の中からたった一人の人を見だして声をかけておられるのです。その主に見出されて選ばれ、声をかけられる一連の事柄の中には、38年間病に苦しんでいた男の側からの主イエスに対する働きかけは記されていません。このところで苦しみの中にある一人の男が主によって見出され、主の方から一方的に声をかけられるのです。

(2) 38年間病気で苦しんでいる人の苦悩

主が38年もの間病に苦しんできた男に対して声をかけておられますが、その問いは「よくなりたか」というものです。この問いはいささか奇異な感じを受けるものです。病で苦しむ男は当然いやされたいと願っているのです。

この奇異にも映る問いは病人の状況を明らかにしています。彼は直りたいと願っています。しかし、病のために体が動かず池に入り癒しを得ることができません。誰かに助けてもらわなければ池に入れず、誰かに助けてもらわなければ病は癒されないのです。彼は自分自身の力では癒しを得ることができないのです。誰かに頼るしかなく、その自分の弱さを、いやというほど彼は思い知らされてきました。しかし、彼は病から解放されたいと強く願っており、そのときを期待し待ち続けたのです。彼は未だその思いを遂げることができずにいたのです。

(3) 癒しの奇跡—もう罪を犯してはいけな—

この、誰かに頼る以外に癒される道の無くなっ

たこの男を主イエスは癒されます。その癒しの後主はこの男の前から一度退かれ、再びその神殿の中であわれた時に、「もう、罪を犯してはいけない。さもないともっと悪いことが起こるかもしれない」とおっしゃったことが記されています。

ここにおいて主イエスは病と罪の因果応報的關係を語っているのではありません。むしろこのところで語られる、彼に起こるかもしれない悪いこととは、身体的病の問題ではなく、罪の内にとどまることによる最後の結果なのです。言い換えれば、罪の内にとどまるならば神様の罰を受けることになるということなのです。そこで待っているのは永遠の死なのです。

ここで主イエスは38年もの間病に苦しめられてきた男をその苦しみの中に見出し、病からの癒しを与えられました。しかし、それは単なる癒しのためではなく、彼を死から命へと招くためであったのです。そして、そのために主は彼を見出し、彼に声をかけられたのです。

(4) 安息日論争

最後に、このところで大きな問題となっている安息日論争についてみておきます。ここでユダヤ人指導者たちが最初に非難したのは、主イエスが安息日に癒しの業をしていたからでした。しかし、人間の窮乏に應えることが安息日のすべての活動禁止にも優先するとの教えがラビ文献の中にあるそうです。つまり、指導者たちの非難は妬みのためであったのです。その妬みを持つ指導者たちは、主が御自信を神様と等しい者であるとおっしゃられたことに対して激しく怒りを覚えたのです。そして、妬みと共に神様を冒瀆すると思われた発言により、彼らは主イエスを迫害したのです。つまり、これは信仰的動機による論争ではなく、妬みによって引き起こされたものです。(春名義行)

テキスト ヨハネによる福音書5章1～18節

(単元のねらい)

ベドザタの池のほとりに38年間も病気で苦しみ続けていた名もなき男と主イエスとの出会いの物語である。想像を絶する苦しみといわざるを得ない。しかし、彼の苦しみを王なる主イエスにご存知であった。それゆえに、主イエスは、彼の病、孤独の苦しみを制圧される。この物語を通して、子らの悩みも喜びもこの王イエスに知られていること、王の働きが信じる者の上にあることを仰がせ、摂理の信仰を養いたい。安息日の問題はここでは中心としなかったが、王の働きは安息日にこそあることを確認することも大切であろう。なお、『子どもカテキズム』の間27および14を参照のこと。

「声をかけてくださるイエスさま」

皆は、一日中お布団の中になければならないとしたらどうですか。もう辛くて辛くてたまらないと思います。もしもあなたが38年間も、ずーっとお布団の中になければならなかったとしたら、どうでしょうか。

今、ここに38年間、ベドザタという池のほとりで寝ている人がいます。このベトサタの池は、池の水が動いたとき、一番最初に池に入った人は病気が治ると信じられてきたのです。ですから、病院に行くお金がない人、病院に行っても治してもらえなかった人は、この池にやってきました。まるで大きな病院のように、池の回りにベッドをこしらえて大勢の病人、看取る人たちがいました。皆、そこで何をしているのでしょうか。皆、池の水面を見ているのです。今まで、ニコニコと楽しそうに話していた人も、池の水が動いたと思ったら、先を争って、池に降りて行くのです。よくなりたいたからです。心の中では、「今度はわたしの番。」「今度こそ、うちの子どもの番。」このように競争する思いがあったのです。

今、この人には、病気を看取ってくれる人がいません。昔はいたのかもかもしれません。けれども38年も病気でしたから、お父さんもお母さんももう、死んでしまったのかもかもしれません。もしかすると、お父さんお母さんはとっくに諦めて、この人を捨ててしまったのかもかもしれません。とにかく、この人は孤独です。友だちもいません。38年間ずっと、

助けてくれる人がいないのです。ずーと、他の人が入るのをただ恨めしそうに見ているしかありませんでした。

「アッ、水面が動いた。今だ!」「ごそ ごそ、ごそ ごそ」一生懸命体を動かそうしているその動きを他の人に見つけられてしまいます。そして、すぐに先をこされてしまうのです。もう、いったい何百人に先を越されてしまったことでしょうか。その度に、多くの人たちが、「わぁー、やったぁ、病気が治った。体が楽になった。力が入った。目が見えるようになった。歩けるようになった。わぁー嬉しい。」こんな嬉し涙の声を出したのです。この人はそれを聞いたときに、心が悲しくなり、またいらいらするのです。「ちくしょお。俺には、誰も助けてくれる人がいない。」

そんな彼のところに、今日、イエスさまがやってこられました。そして声をかけられます。「よくなりたいたか。」どうしてこんなことをおっしゃったのでしょうか。よくなりたいたいに決まっていると思います。イエスさまは、この人が38年間どんなに悲しい思いで過ごしてきたのか、知らないのでしょうか。それに対して、この人は、こう答えました。「わたしには、池に入れてくれる人がいません。」不思議なことに、治りたいとすぐに答えませんでした。この人にとって、今、病気であることより、自分が一人ぼっちでいることが辛かったのかもかもしれません。そして、自分のことを

見捨てて、どんどんよくなって行く人への妬みの気持ちでいっぱいになっていたのかもしれませんが。

けれども、そんなこの人にイエスさまははっきりとこう命じられます。「起き上がちなさい。床を担いで歩きなさい。」イエスさまは、この人を池に入れてあげられるのではないのです。イエスさまは、直接にこの人の病気を癒すことがおできになるのです。病気を癒されるのは、池の水が動くのを待つことでも、天使が働くのを待つのではないのです。イエスさまにお願いすれば良いのです。何故なら、イエスさまは、この人のことを心に留めておられるからです。

この人は、こう命じられて、すぐに癒されてしまいました。そして立ち上がることができたのです。この人は、イエスさまにお会いして、病気が癒されただけでなく、自分が独りぼっちではないことが分かったのです。イエスさまは自分のことを見捨ててはおられないと分かったのです。イ

エスさまは、この人の王様なのです。

真の王様は、僕たち私たちの悩み、苦しみ、悲しみを理解してくださいます。そして、助けてくださいます。悪者から守ってくださいます。だから、心配することはないのです。悲しいこともうれしいことも僕たち私たちに必ず役に立つこととなるのです。ですから、僕たち私たちは、あの人は羨ましい、この人は自分より神さまに祝福されていると妬んだり、心配したりする必要はありません。イエスさまは、毎日毎日、日曜日も月曜日も、僕たち私たちを神さまの子として守ってくださるために働いておられます。だから、どんなときでもこの王様イエスさまに従ってゆくのです。「天のお父さま、イエスさま」と御名を呼べば、神さまと一緒にいてくださることがわかるのです。今週も、お祈りしながら勉強したり、遊んだり、毎日を過ごしましょう。 (相馬伸郎)

[今日の暗唱聖句] ヨハネによる福音書5章17節

イエスはお答えになった。「わたしの父は今もなお働いておられる。だから、わたしも働くのだ。」

〈ねらい〉

絶望から希望へと招いてくださるイエスさまの主権的な恵みを感じる。

〈展開例〉

みんなは風邪を引いたり熱を出したりして寝込んだことがありますか。何日も熱が続くとつらいよね。病気がなかなか治らないということは大変つらいことです。

今日の箇所には38年間も病気で苦しみ続けた人が登場します。この人はベトサイダという池の周りに寝かされていました。この池の水が動いた時に最初に水に入った人は病気が治ると信じられていたからです。でもこの人は、38年も病気で苦しんだ上に、もう身の回りのお世話をしてくれる人もいませんでした。この人はもう希望を失っていました。けれども、イエスさまはこの人に目を注いでくださって、この人の苦しみを教えてくださいました。そしてお声をかけてくださったのです。「良くなりたいか。」これは、希望を失ったこの人を希望へと招くお言葉でした。でもこの人は「誰

もわたしを水に入れてくれないのです。水が動いても他の人が先に入ってしまうのです。」と、恨みごとかいえませんでした。けれどもイエスさまは、そんな希望を失っていたこの病人を、立ち上がらせてくださいました。それは、イエスさまはわたしたちが力を失い、元気を失い、希望を失うような時にも、わたしたちの辛さを知ってくださって、そんなわたしたちに希望を与え、立ち上がらせてくださり、歩き始めることができるようにしてくださるお方だということです。わたしたちはそんなイエスさまがいつもわたしと一緒にいてくださるという、この大きな恵みをいつも覚えましょう。

〈お祈り〉

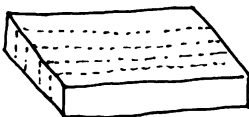
神さま、わたしたちがどんなに苦しくても、悲しくても、そんなわたしたちを助けてくださるイエスさまがいつも一緒にいてくださることを、わたしたちがいつも覚えることができますように。イエスさまのお名前によってお祈りいたします。アーメン。

〈やってみよう〉

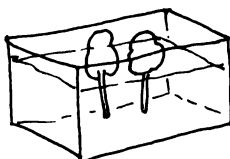
工作をしよう!

浮き人形を作ろう!

- ① 発泡スチロールの板を
1~1.5cmの幅に切る

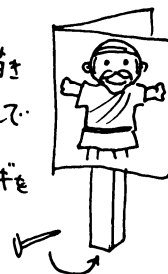


③



水の上に浮かべてあそぼう!

- ② 画用紙を2つ折りに
（上の方に好きな絵を描き
発泡スチロールの先にははさみ
のリップする。
発泡スチロール棒の下にクギを
さしておもりにする。



〈ねらい〉

イエス様は、私たち一人一人のことを良く知っておられ、私に何が必要なかをよくご存知なすばらしい方！

〈展開例〉

礼拝で聞いたお話を思い出しましょう。

○イエス様と長い間病気で苦しんできた人と、どちらが先に声をかけたかな？

・イエス様

※まず、イエス様の方から苦しんでいた病人に声をかけてくださったことを語りましょう。

同じように、私たちもイエス様は「私のところへおいで」と声をかけてくださいます。だから、私たちはこうして日曜学校にきて礼拝ができるのだということを語りましょう。

○イエス様は何て声をかけたかな？

・「良くなりたいか」

※イエス様の質問は分かりきった事を聞いているようですが、イエス様に尋ねられて初めて本当に必要なものが分かるのです。

グリム童話にある、魔法使いに三つの願いしか出来なかったおじいさん・おばあさんのように（「ソーセージがほしい」「ソーセージなんかお前の鼻にくっついてしまえばいい」「ソーセージを鼻から離してください」）、私たちは自分にとっていちばん必要なものが何なのかも、なかなかわからないのです。

〈ちいさなお祈り〉

○イエス様が私を教会へさそってくださったことをよろこんで、「ありがとう」とお祈りしましょう。

〈やってみよう〉**ゲーム「池の水が動いた」**

1. 長いロープを輪にして地面に置き「池」にする。
2. 鬼を一人決めて、他の人たちは鬼と池をはさんで反対側に横一列に並ぶ。
3. 鬼が「池の水が動いた！」と言ったら、ほかの人たちは池の方に一步近づいてとまる。
鬼が「池の水が動かない！」と言ったら、そのまま動かない。鬼はみんなが動いたかどうかを見ていてチェックする。動いた人は一步後ろに下がる。
4. いちばん早く池に入った人が勝ち。

〈ねらい〉

まず何よりも、38年間病気で苦しんだ男に声をかけられたのはイエス様であること、つまり、どんなに小さな者であっても、イエス様の方から手を差し伸べてくださることを学ぶ。また、イエス様のいやしは肉体のいやしというだけではなく、人をその罪から救ういやしであることにも話を展開したい。ポイントが分散するので、小学科上級では、安息日論争は省略する。

〈展開例〉

設問を一緒に一つずつ解きながら、上記の「ねらい」の理解を目指す。

○設問

- 1) 以下の文章のカッコを埋めましょう。
() の傍らにベトサダと呼ばれる池がありました。その池のまわりには多くの病気の人や、体の不自由な人が横たわっていました。その池の() が動くとき、池に() に入った人は病気がなおると信じられていたからです。
さて、そこに() 年間も病気で苦しんでいる人がいました。そこを通りかかったイエス様はその人に「良くなりたいか」とお尋ねになりました。その人は答えました。「主よ、わたしを池にはこんでくれる人がいないのです。」イエス様はこう答えられました。「起き上がりなさい。() をかっいで歩きなさい。」そうするとその人の病気はたちどころになおったのです。

その後、イエス様はいやされたその人に、神殿で再び出会い、こうおっしゃいました。「もう、() してはいけない。もっと悪いことが起こるかもしれない。」

- 2) この物語で、イエス様と病気の方は、どちらから声をかけたでしょうか。もう一度聖書を読んでみましょう。
- 3) イエス様はこの人に二つのことを与えてくださいました。それは何と何でしょう。
() と ()
- 4) 今日のお話の中からは、イエス様がどんなお方であることが分かるでしょうか。自由に話しあってみましょう。

○設問の説明

- 1) 説教で語られたストーリーの復習です。分からない部分（特にイエス様の言葉）については、聖書の当該箇所を示してあげましょう。
- 2) この部分をもう一度考えることで、今日の第一のポイントである、イエス様が自ら悩み苦しむ者に目を留めて手を差し伸べられる方であることに注意を喚起しましょう。
- 3) 答えはもちろん「病気がなおること」と「罪の赦し」で、今日の第二のポイントです。後者については、神殿でいやされた人と再会したイエス様の言葉の意味を考えることによって説明しましょう。
- 4) 二つのポイントのおさらいです。二つのポイントを盛り込んだイエス様の姿にいたることが目的です。

ねらい

○主イエスは私たちの悩みを見て、御自分から助けの手を差し伸べてくださるお方である。神の摂理のすばらしい側面である。

話し合ってみよう!

○病人のいやしなどの善きわざを、主イエスは安息日に行っておられる。安息日には働くことが禁止されていたが、これはどう考えられるのだろうか。

展開例

○主イエスによる病気のいやしは、罪の赦しをもたらす主イエスの救いの、目に見えるしるしと考えられる。現代では、罪赦されることが、肉体的いやしに直接結びついてはいない。肉体的ないやしは、復活の希望の内に待望される。

祈り

安息日は、私たちのために備えられた恵みであることを理解させてください。

○暗唱聖句○

ヨハネ福音書5:17

聖書日課

日	ヨハネ福音書	5章1～9節
月	ヨハネ福音書	5章10～18節
火	マタイ福音書	12章9～14節
水	ルカ福音書	17章11～19節
木	マルコ福音書	2章1～12節
金	マルコ福音書	2章23～28節
土	マルコ福音書	3章1～6節

○祈りの課題○

☆三日記☆

テキスト ヨハネによる福音書6章1～15節

(1) 群衆

主イエスは弟子たちと共に船でガリラヤ湖の向こう側にわたります。その後を大勢の群衆が追ったと記されています。群衆は主の言葉を信じてついてきたのではなく、しるしを見てついてきた人々でありました。彼らは目の前で起こった不思議な業に驚きついて行っただけの人々だったのです。しかし、彼らは明らかにその目の前で起きた出来事から主イエスに対して何らかの期待を持っていたのです。

(2) フィリポへの問い

主イエスは御自身の後についてくる群衆をごらんになって、フィリポに、「この人たちに食べさせるには、どこでパンを買えばよいだろうか」との質問をします。ヨハネ福音書の5000人に食べ物を与える記事において、非常に特徴的なのは、共観福音書の扱いとは違って、群衆の食料の心配を主イエスが心配なさり、主イエスが主導的に質問なさっているという点です。主イエスはこれからなそうとすることをご存じの上で、フィリポをはじめとする無理解な弟子たちを試みられたのでした。このところに奇跡の業への期待を持つ群衆と、常に共にいながら主イエスの御力についてまったく理解していない弟子たちの対照的な姿が表されています。フィリポはこの迫っている状況の中で行き詰まり、金銭的にも解決出来ない状況を明らかにしています。フィリポには、この問いに対する解決の糸口すら見つけることはできなかったのです。

フィリポへの問いを聞いていたのでしょうか、ペトロの兄弟アンデレはたまたま少年が持っていた5つのパンと2匹の魚を指し示します。しかし、たったそれだけのものがあったとしても、5000人もの人に分け与えることは物理的に無理なことは明らか

であり、それらのものが何の役にも立たないと言います。このところで人間が期待をおくところの金銭も食物も、多くの大きな困難さの前に全く無力であることが明らかにされています。人間が無力であることが明らかにされるのです。

(3) パンを分け与えられる

人の力や、金銭やわずかな食料といった、目に見えるもののみ期待することの無意味さが明らかにされる一方で、キリストの力が示されます。主は人々を座らせ、パンと魚を分け与えられました。主イエスの創造者としての力がこのところで示されるのです。この力に弟子たちは期待すべきであったのです。しかし、彼らは無理解のために目の前にある現実的な視点からのみ判断をしていたのです。

このパンを裂いて分け与えたとの事柄は、共観福音書に見られる記事と同様のものですが、しかし、ヨハネ福音書の場合、51節以下に示される命のパンとしての主イエスへの言及と結びつけて考えることができます。主が直接に分け与えられることの描写を、キリストが分け与えてくださる命のパンと重ね合わせて理解することが大切です。

(4) 群衆のもとを去る主イエス

群衆はこの奇跡を見て、主イエスを預言者だと言い、政治的な王にしようと企てます。群衆の待ち望むメシアはこの世的な力強い王であったのです。人々は主イエスを王にしようとするのです。しかし、主イエスはこのような、世の誤解と誤った要求から身を引かれ、人々から退かれます。通常主イエスが山に退かれるのは祈るためであり、このときも、主は、誤解し興奮している人々を離れ、静かに祈られたものと思われれます。

(春名義行)

テキスト ヨハネによる福音書6章1～15節

【単元のねらい】

この物語は、四福音書に記されている。食物にかかわる奇跡はとくに忘れ難かったのであろう。しかし、ヨハネは、これが単に外的な祝福を越えて、主イエス御自身が命のパンであられることを指し示すためのしるしであることを告げる。『子どもカテキズム』の問69（御言葉）と74（聖餐）を参照されたい。ただし、この説教では、登場する少年に注目し、日ごとの糧を主イエスから求めること（問82—主の祈りの第四祈願—を参照のこと）にポイントを置いた。今朝あらためて、子らの日々の生活を信仰によって歩むよう励まし、育むときとしたい。

「イエスさまに用いられて」

イエスさまはたくさんの奇跡を行ない、病人を癒されました。ですから大勢の人たちがイエスさまのお話を聞きにイエスさまの行かれるところに集ってきました。そんなある日のことです。弟子のフィリポにおっしゃいました。「フィリポ、大勢の人々が集っているな。この人たちの食事を準備するために、どこでパンを買えばよいだろうか。」フィリポは、答えました。「イエスさま、ひとりひとりが少しだけ食べたとしても200万円はかかります。」どれだけの多くの人たちが集っていたかこれだけでも分かるでしょう。大人の男の人だけでざっと5000人、子どもたちやお母さんたちを加えたら1万人はいるはずですよ。

フィリポは、イエスさまに質問されたとき、どんなことを思っていたのでしょうか。「イエスさまは、何故、そんなことをおっしゃるのだろうか。こんなに大勢の人たちの食事を準備を自分たちでできるわけがないのに。お金だってそんなに持ってないし、近くにお弁当屋さんやコンビニなんかはないのに……」

すると、それを聞いていた弟子のアンデレさんが言いました。「イエスさま、ここに自分のお弁当として、大麦で作った五つのパンと二匹の魚を持っている少年がいます。けれども、こんな大勢の人々では、何の役にもたちませんね。」

ここに一人の少年が登場します。名前も分かりませんが、きっと、イエスさまの近くにいる、イ

エスさまのお話を聞いていたのでしょう。男の子は、イエスさまが、大勢の人たちがお腹をすかしたままではかわいそうだとおっしゃったと考えたのだと思います。そこですぐに気がつき、考えました。「自分には、お母さんが用意してくれたお弁当がある。これは、僕一人で食べるのはもったいない。イエスさまに分けてあげてもよいし、全部あげてしまってもかまわないさ。」

するとイエスさまは、お弟子さんたちに命じられました。人々を座らせなさい。わたしが見えるように、座らせなさい。お弟子さんたちは命じられるままに大声で、「みなさーん、イエスさまが座れとおっしゃいました。どうぞ、座ってくださいーい。イエスさまを見てください。」イエスさまは、男の子のパンを持って、それを高く上にかざして、感謝のお祈りをささげられました。「天のお父さま、このお食事を感謝いたします。神さまは、毎日の食べる物、着る物、必要なものを毎日与えてください。そして今、与えられていることを感謝します。どうぞ、食べられない人々にも食べ物を与えてあげてください。アーメン」とお祈りしました。どこかで聞いたことのあるお祈りです。主の祈りの4番目のお祈りですね。皆も、毎日、お食事の前にこのようにお祈りするでしょう。イエスさまは、このお祈りを今、原っぱでなさったのです。魚も同じようにして、座っている人々に手渡されました。

何人の手にパンが行き渡ったでしょうか。5つのパンですから、5人でしょうか。パンを二つにちぎって渡したかもしれませんから、10人分でしょうか。違います。なんと一人の手からもう一人の手に配られて行く時、それがなくなるのです。不思議です。先生は、どのように増えていったのか、想像ができません。けれども事実、そこにいた人々は全員、お腹いっぱい食べたのです。しかもパン屑が余ったのです。そのパン屑だけで12の籠がいっぱいになってしまいました。どのように増えたのか、水がぶどう酒に変わったところは誰も見ていなかったように、ここでも詳しいことは書いていません。とにかく、イエスさまがお食事を神さまに求め、感謝したときに、そうなったのです。

イエスさまは今、僕たち私たちに、「お食事をするとき、お祈りしていますか」と問いかけておられます。お食事は、お父さんお母さんが働き、お百姓さんが働いて、僕たち私たちの食卓にあがります。でも、それを本当に与えてくださるのは、

天のお父さまです。だから、僕たち私たちは、「日用の糧を今日も与えたまえ」「与えてくださって心から感謝します」とお祈りしなければなりません。それに、「自分だけ食べられれば食べられない人のことなんて知らない」なんて気持ちでお祈りできないでしょう。神さまは、すべての人を愛しておられるのですから、この少年のように、自分のお弁当を神さまに差し出すことが必要ではないですか。それは、どういうことなのでしょう。献金することです。その人のために、お祈りすることです。与えられたお食事を、神さまからの愛の贈り物として感謝して大切にいただくことです。イエスさまは、この少年のお弁当、少年の小さな愛の心を何百倍にも大きくして下さるのです。それなら、僕たち私たちも、たとえどんなに小さな奉仕でも、イエスさまにささげるなら、1万人の人たちを助けることだってできるはずです。イエスさまの教会は、どんなに小さくてもイエスさまのために働けば、世界を救う働きができるのです。
(相馬伸郎)

〔今日の暗唱聖句〕 主の祈り—第四祈願—

我らの日用の糧を今日も与えたまえ。

〈ねらい〉

イエスさまはわたしたちのちいさな献身を大きく用いてくださって、人々を養ってくださるお方であることを覚える。

〈展開例〉

ある日、イエスさまの奇跡の御業を見て驚いた人たちが大勢イエスさまについてきました。男の人だけでも5000人いたと言いますから、子どもや女の人を合わせると1万人以上いたのではないのでしょうか。そしてそのうち日が傾いてきました。するとイエスさまは弟子のフィリポに「この人たちに食べさせるパンをどこで買えばよいだろうか」とお尋ねになられてフィリポはすっかり困ってしまいました。こんなにたくさんの人たち全員が食べるだけのパンを買ってくるなどとてもできないし、第一そんなお金もないからです。

そんなさまを一人の少年が見ていました。少年はお母さんに持たせてもらったお弁当を持っていました。5つのパンと2匹のホシザカナです。少年はイエスさまとお弟子さんがお話をしているのを聴いて思いました。「イエスさまが困っていらっしゃる。そうだ、僕のお弁当を差し上げよう！」

そして自分のお弁当を近くにいたお弟子さんのアンデレに差し出したのです。アンデレは一応少年の差し出したお弁当を受け取りましたけれども、そのお弁当をイエスさまに見せながら言いました。「ここに5つのパンと2匹の肴を持ってきた子どもがいますけれども、こんな少しでは何にもなりませんよね。」ところが、イエスさまはその少年が差し出した5つのパンと2匹の魚を用いて、何とそこにいた人たち全員がおなかいっぱい食べてまだあまるくらいに増やしてくださったのです！

わたしたちがイエスさまのためにできることはちっぽけなことかもしれません。でもイエスさまは、わたしたちがささげるちいさな奉仕やちいさな献金やちいさな祈りを喜んで受け取ってくださいます。そして大きく用いてくださるのです。

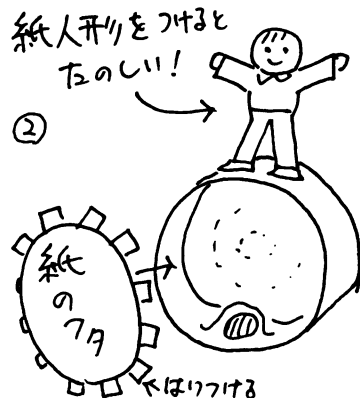
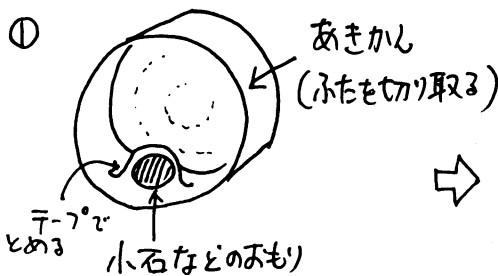
〈お祈り〉

イエスさま、ちいさなわたしたちのささげものをお受け取りください。そしてあなたの御用に用いてください。イエスさまのお名前によってお祈りいたします。アーメン。

〈やってみよう〉

工作をしよう！

おきあがりこぼしを作ろう！



〈ねらい〉

神様は、特別な力の無い私たちを、神様の働きのために用いてくださる。

神様は、私たちのささげるものを、たくさんに増やして下さる！

〈展開例〉

礼拝で聞いたお話を思い出しましょう。

○5000人の人たちがお腹をすかせていたとき、イエス様は、だれのお弁当をみんなに分けようと思われたでしょうか？

お金持ちの人だったかな？

・男の子（5つのパンと2匹の魚のお弁当）
 ※イエス様に選ばれて、イエス様の力を現すために用いられたのは、お金持ちでもなんでもない、小さな男の子でした。彼の持っているお弁当も、豪華なものではなく、ささやかなものにすぎません。しかし、彼には、自分の持っているものをイエス様に使っていただきたいという思いがありました。

○男の子のお弁当はどうなったかな？

・みんながお腹一杯食べた後でも、残ったものが

12カゴもあった。

※私たちは小さい者ですが、私の持っているもの（それも神様から頂いたものですが）をイエス様に使っていただくために差し出す時、イエス様はそれをとっても大きなものにして下さいます。

もし、この少年が自分のお弁当を、イエス様やみんなのために使おうとしなかったらどうでしょうか？ それは当然それ以上に増えなかったでしょうし、お腹を空かせた周りの人たちとの取り合いになってだれのお腹も十分に満たさなかったかもしれません。

私たちが、神様からの賜物を神様と隣人のために用いようと願う時、神様がその賜物をよろこんで大きく用いてくださる事を、教師の経験から自信を持って語りましょう。

〈ちいさなお祈り〉

○神様からどんな「いいもの」を頂いているかを考えて、ありがとうとお祈りしましょう。

○その「いいもの」を神様とみんなが喜ぶように使う事が出来るよう、お祈りしましょう。

〈やってみよう〉

「パンとお魚カード」をつくろう！

（図版は104ページに掲載しています。）

〈ねらい〉

人間の力や常識では不可能であると思われることでも、真の神である主イエスはそれを可能としてくださるお方です。確かに、この世界の様々な現実の前に、私たちは多くの弱さ、無力さを感じることがあります。けれども、主イエスはその弱く、無力な私たちを用いて、実は素晴らしい神の御業を行ってくださるお方です。この主イエスの偉大な力と恵みに信頼し、たとえ弱く、小さな存在であっても主イエスに仕えることを学びたい。

〈質問例〉

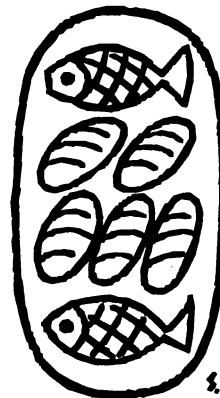
1. イエス様がガリラヤ湖の向こう岸に渡られた時、どうして大勢の群衆がイエス様の後を追ってついて来たのでしょうか。
2. 群衆が近づいてくるのを見て、イエス様は、弟子のフィリポに何とおっしゃいましたか。
3. イエス様の質問にフィリポはどのように答えましたか。
4. 群衆にパンを買って与えるにはいくらのお金が必要ですか。現在のお金で計算して見よう。

(1 デナリオン＝約1万円)

5. イエス様とフィリポの会話を聞いていたアンデレはどのように答えましたか。
6. イエス様はどのようにして群衆に食べ物をお与えになりましたか。

〈一緒に考えよう〉

1. イエス様はフィリポに、「この人たちに食べさせるには、どこでパンを買えばよいだろうか」とおっしゃいました。なぜイエス様はそのようなことをフィリポに質問したのでしょうか。
2. イエス様はわざわざ一人の少年が持っていた五つのパンと二匹の魚をお用いになって、集まってきた群衆に食べ物をお与えになるという奇跡をなさいました。なぜイエス様はここでそのような方法をおとりになったのでしょうか。
3. イエス様の素晴らしい奇跡を体験した群衆は、その後イエス様のことを信じるようになったのでしょうか。



ねらい

- 主イエスは、人間に命の糧を豊かに与えるために、十字架の死と復活の使命を果たされた。このことを学ぶ。

展開例

- 40年におよぶ荒野の旅において与え続けられた天からのマナ（パン）を思い起こそう。また、「人はパンのみによって生きるのではなく、神の言葉によって生きる」という御言葉を思い起こそう。人間の命は、神によって与えられ、生かされ、まっとうされる。
- 命は肉体的な命と同時に霊的な命としても、神から与えられ、養われる。とくに霊的命は、神

の御言葉と聖霊によって養われる。聖餐式はこの霊的養いを意味している。

話し合ってみよう！

- 霊的命（スピリット・スピリチュアリー）の存在について考えよう。
- 人間の霊（気）の作用についても話し合ってみよう（元気・気分・病気・気持ち・気が向かない、等）。

祈り

命の充実、生きがい感・生き生きさを与えてください。

○暗唱聖句○

マタイ福音書6:11

○祈りの課題○

聖書日課

日	ヨハネ福音書	6章1～15節
月	ヨハネ福音書	6章22～33節
火	ヨハネ福音書	6章34～40節
水	ヨハネ福音書	6章41～51節
木	ヨハネ福音書	6章52～59節
金	ヨハネ福音書	6章60～65節
土	ヨハネ福音書	6章66～71節

☆ニ日記☆

(1) 誰の罪によるのか

弟子たちは、たまたま通りすがりに見かけた生まれつき目の見えない人について、「この人が生まれつき目が見えないのは、誰が罪を犯したからですか」と問うています。これは、当時のユダヤ教の中に因果応報思想が存在したからです。もちろん、両親の罪を背負うという考えもわかりますが、当時ラビたちの中には、胎児が罪を犯してその罪の報酬を受けているという考えもあったようです。そのような思想から、生まれつき重い障害などを背負った人は誰の罪の罰を負っているのでしょうかという問いがなされています。

(2) 神の御業のために

当時の一般的な思想による問いに対する主イエスの答えは、生まれつきの盲人のすべての罪を否定なさいます。そして、「神の業がこの人に現れるため」に盲人となったのであると答えられました。神の業は光の業です。光の業は昼間になされるべきである。光の業は昼間の内になされるべきなのです。夜は否定的な時であり、悪魔的な神様の御意志に反対するものたちの抵抗が主導権をとるのです。

「人は昼間にしか働けない」という意味のことわざは、実際に当時あったようです。しかし、この言葉はむしろ主イエスが去って行かれることを暗示する言葉とも受け取れます。主が去って行かれた時、神様に反対する者たちの激しい抵抗が活発になるのです。その時が来る前に主はその御業をなさなければならないのです。

ですから、主は御自身がこの世におられる昼の

間に、その光の御業を行わなければならないとおっしゃるのです。そのために安息日であっても昼間の時を無駄にしているといまはないのです。(14節にこの御業が行われた時は安息日であったことが記されています)。また、この光の業をなされる御父が安息日であっても働かれているのだから、わたしも働くのだと5章で語られた事柄を印象的に思い出すと共に、そのように常に働いてくださる神様の御姿をそこに見ることができるのです。御子は御父と共に光のある昼間の内に光の業をなされるのです。

(3) 盲人の目を開く（一光を与える主の御業一）

主の御業は光の業であると書きましたが、その業は人に光を与える御業です。主はこの盲人の目を開くために御業を行われます。その目が開かれることによって彼の目は光を得るのです。

この光を得るための主の御業は唾で土をこね泥を作りそれを盲人の目に塗り、シロアムの池の水で洗うことによってなされました。「シロアム」とは遣わされた者との意味です。遣わされた者によって、その目が洗われこの盲人の目は開かれ光が与えられたのです。これは非常に象徴的な行為であったのです。

まさに主は目の見えない人に光を与えるために遣わされた者であったのです。それは生まれつきも盲人であった人の目が開かれたように、生まれつき霊の目が見えない人間の霊の目を開き、その目に復活と救いの光を与えるためなのです。

(春名義行)

11月16日 「生まれつきの盲人のいやし」 説教展開例

テキスト ヨハネによる福音書9章1～12節

(単元のねらい)

生まれながらの盲人を巡っての弟子たちの理解は、主イエスによって覆させられる。ここでは、神の全能（『子どもカテキズム』問11、14）と人間の罪の問題、贖い主イエス・キリストへの信仰の必要性（同問22）と信じる者の使命（同問79）等について、つまり、福音の真理の全体と真髄を説くことができる。本誌の求める日曜学校像は、分級において、教師が子らと一対一で向き合い一魂の配慮一、祈りのときを少なくとも一年に数度は持っていただくねば実現しない。待降節の準備に追われる前のこの時に……。障害を持った子がいれば、障害を背負いつつ信仰によって感謝をもって生きる人のことを紹介しても良いであろう。

「ひらがれる喜び」

ある日のことです。イエスさまとお弟子さんが歩いていると、一人の生まれながら目の見えない人を見かけました。弟子たちは、イエスさまにお尋ねしました。「先生、この人が生まれつき目が見えないのは、誰が罪を犯したからですか。本人ですか。それとも、両親ですか。」この時代の人たちは、生まれながら障害を持っていたり、あるいは子どもを産めなかったりする人は、その人自身が隠れて悪いことをしたから神さまの罰を受けている、そうでなければ両親が悪いことをしたので罰を受けていると考えていました。

このような考え方は、今でも僕たち私たちの周りにあります。仏教の教えの中にこんな教えがあります。人間は、死んでは生き、死んでは生き、いつまでもそれを繰り返すのだということです。こんなことを信じているので、「今この世に生まれてくる前には、あなたはもしかするとゴキブリだったかもしれません。」とかいうのです。あるいは、「この世で、悪いことをした人は、次はゴキブリになって生まれるかもしれません。」などと言うのです。けれどもこれは、嘘です。神さまは、人間をただ一度「このわたし」としてお造りくださったのです。何よりも、イエスさまはここでおっしゃいました。「本人が罪を犯したからでも、両親が罪を犯したからでもない。神の業がこの人に現れるためである。」イエスさまは、そんな嘘

の教え、間違った教えを許されません。生まれる前にどんな悪いことをしたのかだなんて考えても、もうどうすることもできないと思いませんか。もしもこの目の見えない人に、そんなことを言ったりしたら、この人はどんなに悲しい気持ちになるのでしょうか。どれほど辛いのでしょうか。ある仏教の教えでは、「お題目」、「お経」を唱えたら、次の時は良い暮らしができるのだと言います。本当でしょうか。

さて、イエスさまは、愛するお弟子さんたちまでそんなことを言いだしたので、心に決められました。「神の御業をこの人に、そして弟子たちにも見せてあげなければならぬ。」そしておっしゃいました。「どんな障害をもっている、神の御業がこの人の上に現われるのです。」イエスさまは、お弟子さんや僕たち私たちを、前に、将来に向かわせます。神さまに向かわせます。「神の業が現れることを期待しなさい。信じなさい。」と命じられます。それだけではありません。こう呼びかけられました。「あなたたちも、わたしと一緒に、神さまの栄光のために働くことができます。だから、わたしと一緒に神さまのために働きなさい。」

さあ、それなら、イエスさまはどのようにして神の御業、神さまの栄光を現されるのでしょうか。イエスさまはすぐに、しゃがみこまれました。そ

して、地面の土に唾を吐きかけられます。何をしておられるのでしょうか。土をこねておられます。泥んこ遊びみたいです。しかし、真剣になさっています。

皆は、最初の間がどのようにして神さまに造られたか知っていますね。神さまは人間を土からつくられたのでした。さて、イエスさまはつくられた泥を、この人の目に塗られました。まるで「わたしは神さまだから、わたしが治してあげます。」と言っておられるようです。その後で、すぐにこうおっしゃいました。「シロアムの池に目洗いをしてください。」シロアムという名前の意味は、「神さまから違わされた者」という意味があります。つまり、イエスさまのことです。

この人は、言われたとおり、シロアムの池に行きました。するとどうでしょう。イエスさまがおっしゃった通り、目が見えるようになったのです。イエスさまのところに来て、イエスさまの言葉を信じたとき、神さまの栄光を見ることができたのです。この人だけではありません。誰でもイ

エスさまを信じれば、神さまの御業を見ることができるとのことです。

僕たち私たちは、今どこにいますか。シロアムの池にはいませんが、イエスさまがおられるイエスさまの教会にいます。だから、僕たち私たちも心の目が開かれてイエスさまを礼拝できるようにしていただいたのです。なんて素晴らしいのでしょうか。それなら、僕たち私たちは、どんなお友だちでも、特に悲しんでいるお友だち、苦しんでいるお友だちには、どうしても教会に連れて来てあげたいと思います。そうならば、その子も僕たち私たちも神さまの栄光を見ることが出来ます。神さまの栄光を現す子どもになれるのです。

先生は、「盲人伝道センター」がある静岡教会の皆さんと礼拝をささげたことがあります。半分近くの方が目が見えないのです。けれども、悲しい顔つきではなくて明るい顔つきで讃美歌を歌い、聖書のお話を聴いてくださいました。たとえ、目が見えなくても、もう心の目は開いて、イエスさまを礼拝しておられたからです。（相馬伸郎）

[今日の暗唱聖句] ヨハネによる福音書9章3節

イエスはお答えになった。「本人が罪を犯したからでも、両親が罪を犯したからでもない。神の業がこの人に現れるためである。」

〈ねらい〉

イエスさまは人の心の目を開いてくださって、イエスさまを信じることができるようにしてくださいということを感じる。

〈展開例〉

一人の生まれながら目の見えない人が道端に座って人々から小銭をもらっていました。そこにイエスさまとお弟子さんたちが通りかかった時、あるお弟子さんがイエスさまに尋ねました。「先生、この人が生まれつき目が見えないのは誰のせいですか。この人のせいですか。それともこの人の親のせいですか。」ずいぶん失礼な質問ですね。でも、この目の見えない人は、先生がどう答えるか、耳をすまして聞いていました。実はこの質問は、この人自身が何度も心の中で問い続けてきた質問だったのです。イエスさまはこうおっしゃいました。「本人のせいでも、親のせいでもありません。神さまの業がこの人に現れるためです。」この答えを聞いて、この目の見えない人はびっくりしました。この先生が初めて自分のこれからの希

望を語ってくださって、生きる意味があることを教えてくださったからです。イエスさまはつばで泥をこねてその人の目に塗り、「シロアムの池に行って洗いなさい。」とおっしゃいました。エルサレムの町を目に泥を塗って歩いてゆくことは取れずかかったでしょう。でもこの人は、イエスさまのお言葉を信じて、おっしゃられたとおりにしました。するとどうでしょう。シロアムの池で目を洗うと、その人の目は開いてすっかり見えるようになったのです。今もイエスさまは、イエスさまのお言葉を信じて従う人の心の目を開いてくださるのです。

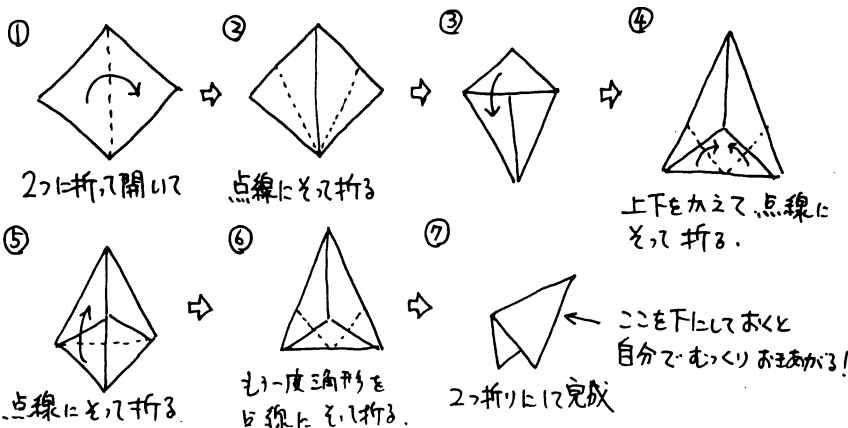
〈お祈り〉

イエスさま、わたしたちがイエスさまのお言葉を信じて、イエスさまのことがもっと分かるようにしてください。わたしたちのお友だちの心を開いてイエスさまを信じることができるようにしてください。イエスさまのお名前によってお祈りいたします。アーメン。

〈やってみよう〉

工作をしよう!

自分でおきあがる折り紙を作ろう。



11月16日 「生まれつきの盲人のいやし」 小学科下級

〈ねらい〉

神様の力は、弱い私たちの上にも明らかにされる。

神様は、私たちにも「ほんとうの光」を示してください。

〈展開例〉

礼拝で聞いたお話を思い出しましょう。

○弟子たちは、目が見えなくなったのはどうしてだと考えたかな？ イエス様は何と答えられた？

- ・この人か、両親が罪を犯したから。
- ・この人に、神様の力があらわされるため。

※私たちは、たとえ体に不自由な所が無かったとしても、根本的に心が不自由です。見えるべき目が見えないのと同じように、神様のほうに向くべき心が神様に背を向けようとします。

この「目の見えない人」は、特別な人ではなくて、私たち一人一人のことでありと語りましょう。その私たちに、イエス様は神様の力をあらわし

てくださいます。

○イエス様は、この人に何をしてくださったかな？
・つばでこねた泥を目に塗る事を通して、見えるようにしてくださった。

※私たちにとって「見えるようになる事」とは、神様の方を見ることが出来るようになるということです。

私たちが、教会に来てイエス様のお話が聞けるのも、イエス様が私を連れてきてくださるからです。

「ほんとうの光」である神様の恵みに触れることの出来る喜びを、教師自身の言葉で子どもたちに伝えましょう。

〈ちいさなお祈り〉

○イエス様が私に目を向けて、教会に連れてきてくださったことを「ありがとう」とお祈りしましょう。

〈やってみよう〉

クロスワードパズル

(図版は104ページに掲載しています。)

〈たてのかぎ〉

1. おてんきのいい日は〇〇に出てあそぶ。
2. はんたいは「おもて」
3. 〇〇の上に家をたてる人はかしこいひと。
4. おもちにつけて食べるとおいしい。
5. ここでピクニックをたのしむ。
6. 〇〇のぼりは気持ちがいい。

〈よこのかぎ〉

1. 聖書はこの書からはじまる。
7. きいろとくろのしましまようのどうぶつ。
8. これにはまると、さあたいへん。
9. クックー、クックーと鳴く。
10. これがないとよく眠れない。

〈ねらい〉

見えるべきものが見えないのが、盲人である。神様が示された大いなるめぐみも、尊い犠牲による愛も、人は何一つ見えないし、見ようとしぬ。神様の目からご覧になると、生まれつきの盲人はまさに私たち自身であることを学ぶ。

〈展開例〉

1. 誰の罪によるのか。

みなさんご存じのように、盲人ばかりではなく手足が不自由な人や知能に生まれつき障りをもっている人は世の中にたくさんいらっしゃいます。近代医学によってもその原因は解明できません、生まれてくるまでわからないことが多いのです。多くの人は幸いにも正常に生まれますが、人生の途上でいつ障りを背負うようになるか、誰も知りません。

誰かが悪いことをしたから罰としてそうなるのでしょうか。障りの原因として不注意や事故や毒ガスや化学物質の汚染および原爆の放射能による遺伝的な人体への悪い影響が報告されていますので、これらを作り出した人類の責任が無いとはいえませんが、科学の発達による悪の結果が生まれるずっと前から、この問題は人類にとって問題でした。科学や医学が発達するまでは障りも、病気も人類を悩ます悪魔的存在でした。

それで弟子たちがイエス様に質問して、イエス様が答えられました。「誰の罪によるのでもない」。神様は賜物をそれぞれに分け与えられます。障りをもつ人のほうが優れた働きをし、類いまれなる才能を持っているのを見ますときに、身体と知能、才能は神様から与えられる賜物の違いであることがわかります。

2. 神の御業のために生きよう。

神様が私たちに与えてくださった賜物は神様の御栄光を顯すために用いられなければなりません。すべての人に賜物をくださる神様は、どんな宝や能力より優れた救いの賜物を与えてくださいます。

生まれつきの盲人はイエスさまに通りすがりにお会いしました。そして一方的な御恩寵により癒されました。今まで見えなかったものが見えるようになりましたので、どんなに嬉しかったことでしょう。どんなにかお礼を言い、そして心から神様の御栄光を賛美したことでしょう。

私たちにも同じ喜びが用意されています。心の目が開いてイエス様の救いの御業を信じることができるのです。私たちの目は物を見ることができ、見えないものを見ることができ、心の目は自分の力で開くことができません。聖霊が私たちを助け導いて心の目でイエス様を見ることができるようになってくださいます。肉体の目が見えることが大切であるように、神様の御前では心の目が開かれることが大切です。

3. イエス様の言葉を信じよう。

かの盲人がイエス様の言葉を信じなかったら奇跡は起きなかったでしょう。彼は目の見えない物乞いでしたから、イエス様がこちらを見ていることも、多くの人たちの中での話も聞こえなかったでしょう。突然に思いがけない幸運が彼に訪れました。私たちに訪れる救いの恵もまったく同じです。神様が私たちを一方的に選んで教会に導いてくださり、イエス様の言葉を教えてくださり、信じることができるようにしてください。そしてイエス様の言葉を信じたとき、心の目が開かれて、今まで見えなかったものが見えるようになり、本当の幸福を手に入れることができるのです。

ねらい

- 世の光として来られた主イエスの働きとして、奇跡物語を学ぶ。

あろうか。神の恵みを恵みとして実感できるからであろうか。

話し合ってみよう！

- 静岡盲人伝道センターの働きについて紹介し、考えてみよう。

展開例

- 人間の障害を通して神の業があらわされる場合があることを考えよう。
- 障害ばかりでなく、病気、挫折、失敗等を通して神に出会い、救いにあずかるケースは多い。救いを求める気持ちが真剣で強いことが一因で

祈り

障害をも益として用いられる神の愛を見させてください。

○暗唱聖句○

ヨハネ福音書9:3

聖書日課

日	ヨハネ福音書	9章1～5節
月	ヨハネ福音書	9章6～12節
火	ヨハネ福音書	9章13～17節
水	ヨハネ福音書	9章18～23節
木	ヨハネ福音書	9章24～34節
金	ヨハネ福音書	9章35～41節
土	ヨハネ福音書	8章12節

○祈りの課題○

☆三日記☆

テキスト ヨハネによる福音書14章1～7節

(1) 心を騒がせるな

主イエスが地上を去る日が近づき、その決別について聞かされた弟子たちは不安になり、動揺しています。そのような拠り所を失う恐れや不安に駆られている状態の人にとって、「心を騒がせるな」との言葉はどれほどの意味を持つのでしょうか？ 通常、拠り所を失い動揺している人にとっては「心落ち着かせなさい」、「不安になってはいけません」などと言われたところで、何の意味も持たないでしょう。

しかし、このところで動揺している弟子たちに対して「心を騒がせるな」とおっしゃっておられるのは、主イエス御自身です。しかも、御自身がこの世を去られる意味を明らかにお示しになって、心を騒がせるなど励まされるのです。これは単なる慰めなどではなく、明らかな後ろ盾がある、期待に満ちた決別だからこそ、心を騒がせるなどおっしゃられるのです。そして、すべてを神様に委ねるように、この言葉を語る主イエス御自身に期待し、信じて委ねるように御語りになるのです。

(2) あなたがたのために場所を用意しに

主がこの世を去られるのは父の家に住むところを整えに行くためなのです。この住む場所とは単なる家ではなく、神と共なる場所を表します。主イエスがこの世を去られるのは、わたしたちのために神様と共にいることができる場所を整えてくださるためなのです。そして、その用意ができた時に主は再び迎えに来てくださるのです。だからこそ、主との決別は心を騒がせる事柄ではないとおっしゃるのです。そして、このわたしたちのた

めに場所を用意してくださるところこそ、主がおられる場所であり、また、その場所にわたしたちを迎え入れてくださるのです。このところに行く道を信仰が知っていることを前提として、「わたしがどこへ行くのか、その道をあなたがたは知っている」と御語りになるのです。

(3) 御父に至る道

主の語られた、わたしがどこに行くのか知っているはずであるとの言葉に、弟子たちは非常に驚きます。トマスは「その道をわたしは知らない」と言うのです。

そのトマスの言葉に対して主は、「わたしは道であり、真理であり、命である。……」とお答えになりました。御父のもとへ至る道は主イエスだけなのです。主イエス以外を通して御父もとへ行く道はなく、神と共にいるその場所へ至る道はありません。主イエスを通してなされる以外に神様へ接近する道はないのです。そのような意味で、主イエスを知る者は、父なる神様を知る者であると言われるのです。

この御父に至る道により、御父を知るだけでなく、すでに見ていると言われていました。つまり御父を知ること、御父を見ること、御父への接近は終末的将来の事柄ではなく、この世で神様と共に住むことに関しても語られているのです。今、主イエスと共にあり、主イエスという御父に至る道を歩んでいる者は、すでに御父に至り御父と共にあり、御父に近づいている者であると言われるのです。

(春名義行)

テキスト ヨハネによる福音書14章1～7節

〔単元のねらい〕

今年度のカリキュラムは救済史に基いて編んでいるが、諸般の理由で、今日でヨハネによる福音書は終わりとなる。その意味で、救済史の中心としての十字架と復活について語ることが手薄となった。昇天と再臨についてはまったく不十分であった。しかし、このテキストは、昇天と再臨にも言及されている。救済史の頂点たるイエス・キリストを豊かに説くことができよう。ただし、この説教は、十字架・復活に集中して語ることを試みる。分級では、救済史の完成としての再臨について補足していただくことも大切であろう。『子どもカテキズム』問22、26を参照のこと。

「天国への道」

イエスさまが十字架につかれる前に、イエスさまはなんども繰り返しておっしゃいました。「わたしは去って行きます。あなたたちから離れて行きます。」そこでお弟子さんはこのようにイエスさまにお尋ねしました。「イエスさま、イエスさまは、去って行く、離れて行くと何度もおっしゃいますが、どこへ行かれるのか、私たちには分かりません。お願いします。その道を私たちに、はっきりと教えてください。そうすれば、あとからでもついてまいりますから。」そこでイエスさまは、このようにおっしゃいました。「わたしは道です。真理です。命です。わたしを通らなければ誰も天のお父さまのところ、天国に行けません。」イエスさまは、御自分を道として自己紹介されました。それなら、どんな道なのでしょう。

僕たち私たちは今日、教会までの道を歩いてきました。自転車で来ました。車に乗って来ました。みんな、それぞれ道を通ってきました。先生は、何人もの人から、この新しい教会までの道を尋ねられました。その度に、「この交差点を曲がって……、このスーパーマーケットを目標にして……、この曲がり角を右に曲がって……。」道順を説明するのは苦手です。それなら、イエスさまはここで、天のお父さまのおられるところまでの道のりを説明しておられるのでしょうか。しておられません。ただ一言、「わたしが道です。」とおっしゃいました。すごいことですね。

聖書の中で、これまでいったい何人の人たちが神さまのことを語って来たでしょうか。これまでの預言者はこのように言いました。「神さまはこのようにおっしゃいます。神さまはこうお考えです。」つまり、神さまに至るまでの道、道順を教えたのです。ところが、イエスさまは、御自分が道そのものであるとおっしゃったのです。イエスさまは天のお父さまに至る道そのものなのです。どうしてそうなのでしょう。イエスさまは、神さまの御子です。もともと天のお父さまと一緒にいられたのです。けれども、僕たち私たちが神さまの子どもにするために、罪から救うために僕たち私たちと同じ人間になって、この地上に来てくださいました。それはクリスマスの出来事です。つまり、天国から地上への道を開かれました。そして、30年余りあと、イエスさまは僕たち私たちの罪を贖うために十字架についてくださいました。そして、死なれました。神さまの審きを受けて、地獄にまで降っていかれました。けれども、三日目に死人の中から復活されました。そして、また天に戻っていかれたのです。つまり、イエスさまというお方によって、天と地とを結ぶ道がしっかりとつながったのです。天から僕たち私たちが住んでいるこの地上、そしてこの地上から天国への道はイエスさまというお方によってつながったのです。

昔、ヤコブという人は、天からはしごが降りて

きて、そのはしごを天使たちが上り下りしているのを見ました。イエスさまは天国と地上を結ぶ道、架け橋です。イエスさまは、毎日、天のお父さまのおられる天国と僕たち私たちのいる地上を上り下りしておられます。今ここでしておられます。

だから、このイエスさまを信じている人は、天のお父さまとつながってしまっています。だから、イエスさまを信じる人は、天国に既に入ったような気持ちにすらなります。嬉しくなるのです。イエスさまの「御言葉」を信じているからそうなるのです。イエスさまの御言葉は真理です。真理の御言葉は神さまの命を与える手段、道、パイプです。僕たち私たちは、今、イエスさまの御言葉を聴いて信じています。だから、もう神さまの命、永遠の命を注がれているのです。もう、神さまの子にさせていただいているのです。

僕たち私たちは今どこにいますか。天と地上とがつながっているイエスさまの家です。イエスさまがおられる教会で、イエスさまのお名前でお祈

りすれば、天に通じるのは当たり前です。イエスさまを信じている僕たち私たちは、死んだ後、必ず天国へ行けます。

イエスさまは、この後すぐに十字架についてくださいました。僕たち私たちの支払わなければならない罪の罰を、御自分の命を身代わりにして償ってくださいました。僕たち私たちのために死んでくださいました。昔の道は、大勢の人が踏んで歩くところが道となりました。イエスさまは、僕たち私たちの汚い足で踏まれました。けれども、それを嫌がらずに、耐えてくださったのです。誰でも、イエスさまを信じれば、天国に行けます。この道を歩んでいる人は、決して迷子になりません。何のために生まれてきたのか。どこに向かって生きているのか。生きて行かなければならないのかわかります。お友だちに教えてあげることだってできます。イエスさまを信じ、イエスさまの言葉を行なうことが天国へのまっすぐな道です。

(相馬伸郎)

[今日の暗唱聖句] ヨハネによる福音書14章6節

イエスは言われた。「わたしは道であり、真理であり、命である。
わたしを通らなければ、だれも父のもとに行くことができない。」

〈ねらい〉

イエスさまは天国に至る道であられること、イエスさまを信じる者は必ず天国へ行けることを覚える。

〈展開例〉

みんなは教会に来るのに道を通ってきたよね。どこかへ行くには道を通らなければいけないよね。飛行機だってでたらめに飛んでいるんじゃないんだよ。空を飛ぶにも決まった道があるのです。ではわたしたちが天国へ行く道はどこにあるのでしょうか。わたしたちが一生懸命がんばって努力すればその道は見つかるのでしょうか。いっぱいよいことをすればその道が分かるのでしょうか。いいえ、天国に行くための道は唯一つだけ、それはイエスさまです。わたしたちのために、わたしたちの身代わりとなってわたしたちの罪の罰を全部

受けてくださったイエスさまを信じる人だけが天国に行くことができます。だから、天国につながる道はイエスさまだけなのです。わたしたちは自分の力で天国に行くことはできません。でも、イエスさまを信じるなら、イエスさまを通して父なる神さまのことが分かります。そして、イエスさまと一緒にイエスさまと言う道を歩いていって、最後には必ず天国に行くことができるのです。

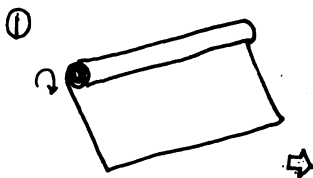
〈お祈り〉

イエスさま、わたしたちのために十字架の上で死んでくださって、わたしたちが天国に行くための道になってくださいましたことを感謝いたします。わたしたちがこの道を外れることなく歩みとおせますように、お導きください。イエスさまのお名前によってお祈りいたします。アーメン。

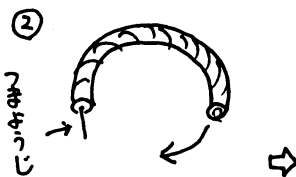
〈やってみよう〉

工作をしよう！

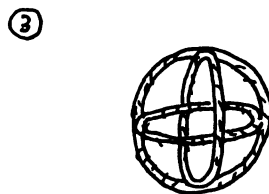
新聞紙のボールを作ろう！



① 古新聞をかたみ丸めて
ビニルテープで巻く。
(3本作る)



② つまようじを差し込んで
反対側とつなぎ、ビニル
テープでとめる。



③ 3つ組み合わせて。
ビニルテープでとめて
完成！

ぶつかっても
いたくないヨ。

〈ねらい〉

イエス様こそが、私たちを神様のもとへ導く道であること。

イエス様は、私たちを神様のところへ連れて行ってくださるために、また来てくださる。

〈展開例〉

礼拝で聞いたお話を思い出しましょう。

○イエス様は、「どうしたらイエス様の行かれる所へ行けるのですか？」とたずねたトマスに何と答えられたかな？

・わたしは道であり……、わたしを通らなければだれも父のもとに行くことはできない(14:6)。

※イエス様は、ご自分が神様のところへ行く方法を教えるのではなく、ご自分こそがその方法であるとおっしゃいました。私たちはイエス様にくっついていてだけで神様のところへ行けるのです。

イエス様にくっついていて、神様のところへ行けるという教師自身の喜びを語りましょう。

○イエス様は、どうやって私たちを神様のところへ連れて行ってくださるのかな？

・準備ができれば、私たちのところに戻ってきてくださる(14:3)

※イエス様は、今、天にいらっしゃいますが、私たちの手の届かない天の上から「ここまでおいで」と呼んでおられるではありません。

準備ができれば(それはいつのことなのか、私たちにはわかりませんが、必ず)、またここへおいでになって、いっしょに連れて行ってくださるのです。だから、私に歩く力が無くても大丈夫だし、道に迷うこともありません。

この確かな約束をイエス様が私に下さっている喜びを語りましょう。

〈ちいさなお祈り〉

○私は自分では何もできませんが、イエス様が神様のところへ連れて行ってくださるためにもどってくださることを、喜んで待つことができるように、お祈りしましょう。

〈やってみよう〉

がえうたさんびが「あるこう あるこう」

(「となりのトトロ」から、「さんぽ」のメロディーで)

1. あるこう あるこう 主イエスの道を

イエス様だいすき いつでもいっしょ

悲しい時には なぐさめを おこった時には 心の平和を

いつでもくださる 救い主

2. あるこう あるこう 主イエスの道を

イエス様だいすき いつでもいっしょ

悪魔がほくらを さそっても 一本道を まよわぬように

御国へみちびく 救い主

〈ねらい〉

主イエスが地上を去る日が近づき、弟子たちが動揺しはじめ、拠り所をすっかり失ってしまった。そんな弟子たちの態度にイエスは深く悲しまれたが、それでも弟子たちを励まし、救いに至る道を最後まで諭した。弟子たちの態度に人間の罪、欲、弱さが如実に表れるが、その人間（自分たち）の弱さを十分知ることによってイエス以外に救われる道、方法はほかにはない、ということを学ぶ。

〈展開例〉

イエス様の言葉に注目しよう。

1. イエス様の地上を去る日だんだんと迫ってきました。イエス様は何と言ってそのことを弟子たちに知らせましたか。
→イエス様の十字架による死と復活を少しずつ話していきました。はじめは何のことだかさっぱり理解できませんでした。これは、私たちの信仰の成長と一緒にです。はじめは何も分からないのです。弟子たちに知らせるのは、私たちに知らせるのと同じことなのです。少し戻って12、13章をじっくり読んでみよう。
2. イエス様は弟子たちに「心を騒がせるな」(14:1)とおっしゃいました。でも、イエス様がいらっしゃらなくなるのだから当然だと思いませんか？

自分か？ 自分がもしその場所にいたらどうでしょう。自由に話し合ってみよう。

- 弟子たちは心の支えがすっかり無くなってしまふかのようでした。本当の神様を目の前にして「生けるまことの神様はあなたです、心配していません」と神様に告白した人は残念ながら誰もいませんでした。それよりもこれからどうしよう……と自分のことで精一杯だったのです。イエス様は悲しくて仕方ありませんでしたが、それでもしっかりと励ましてくださいました。私達も弱い人間ですね。神様を前にしてどんなときも告白出来るように備えたいと思います。

3. 「どこへ行くか、あなたがたは知っている」(14:4)とイエス様はおっしゃいましたが、トマスは「その道をわたしは知らない」と答えました。それに対して、イエス様は三つのことをお答えくださいました。どんな意味があるのか、それぞれについて考えてみよう。

「わたしは

→ () であり、

() であり、

() である。

わたしを通らなければ、だれも父のもとに行くことができない。」

ねらい

- 主イエスを知ることが神を知ることであることを学ぶ。

展開例

- 主イエスは、洗礼の時、「あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」という天からの声を聞いた。それ以来、御自身の使命を自覚し、使命を果たすために、ご自身をささげて、御父に従順であられた。十字架の死をも堪え忍び、神の御子・罪人の救い主として、まったく人生を歩まれた。
- 神は、この主イエスに復活の栄誉を与え、永遠の命を与えられた。

- この主イエスを知り、主イエスと結び合わせられることこそ、御父への道、神への道である。「主イエスが道である」とは、この真理を意味している。

話し合ってみよう！

- 「道」の役割について、話し合おう。
- 「主イエスが父に至る道である」ということについて、具体的にどのようにその道を歩むのか、話し合おう。

祈り

道である主イエスに従って歩けるように導いてください。

○暗唱聖句○

ヨハネ福音書14:6

聖書日課

日	ヨハネ福音書	14章1～7節
月	ヨハネ福音書	14章8～14節
火	ヨハネ福音書	14章15～24節
水	ヨハネ福音書	14章25～31節
木	ヨハネ福音書	16章5～11節
金	ヨハネ福音書	16章12～15節
土	ヨハネ福音書	16章16～24節

○祈りの課題○

☆三二日記☆

テキスト ルカによる福音書1章26～38節

1 〈男の子を産む〉

- 2 おとめマリアのもとに、神の御使いが現れて、
 3 神の御言葉を告げました。第一に、主なる神がマ
 4 リアと共におられ、マリアに神の恵みが与えられ
 5 ていること。第二に、マリアがみごもり、男の子
 を産むということ。第三に、その子をイエスと名
 付けるべきこと。「イエス」とは「主は救い」と
 いう意味です。その子は「いと高き方の子」、す
 なわち神の御子です。彼には「父ダビデの王座」
 10 が与えられ、すなわちまことの王です。こうして、
 産まれてくる男の子が救い主メシアであることが
 明らかにされます。マリアは、救い主である主イ
 エスの母として選ばれ、召し出されました。
 このとき、マリアは15歳くらいの少女です。し
 かもまだヨセフのいいなずけに過ぎず、子どもが
 生まれるはずがありません。御告げの通りである
 ならば、未婚の母とならねばならないのかもしれ
 ません。驚きと戸惑い、恐れと不安が、マリアの
 心にあふれたでしょう。

20

・〈心柔らかな信仰者マリア〉

- しかし、マリアの応答は、信仰者の強さを明ら
 かにしています。マリアは、ここで、恐れと不安
 をあらわにすることなく、むしろへりくだり、心
 25 柔らかにして神の御心とご計画を受け入れ、強い
 信仰者として立っています。それこそが、主がマ
 リアと共におられ、恵みが豊かに注がれていたと
 いうことです。
 マリアは、「どうして、そのようなことがあり
 30 えましょうか」と答えました。これは、ザカリア
 の言葉(1:18)と比較されますが、神の御心を
 受け入れた上で、そのことがどのようにして実現
 するのか、その道筋を問う言葉です。マリアは、
 自分がまだ結婚していないことを告げて、神の方

35 Q

・9

・9

38 Q

法、神のなさり方を教えてくださいと言っている
 のです。

御使いは、「聖霊があなたに降り、いと高き方
 の力があなたを包む。……神にできないことは何
 一つない」と答えました。それは、神の霊である
 聖霊がこのことを行われる。その神の御力に信頼
 しなさい。神にできないことは何もありません。だから、
 聖霊に委ねて、あなた自身は何も心配しなくても
 よい、ということでしょう。御使いは、マリアの
 恐れと不安を取り除いて、励ましておられるので
 す。

マリアは、「わたしは主のはしためです。お言
 葉どおり、この身になりますように」と答えまし
 た。これは、マリアの信仰の姿勢をもっとも明確
 に表す言葉です。神の御前にへりくだり、神を信
 頼し、神の御心を喜び、自らの心を神の御心に重
 ね合わせる信仰です。それは、自らをささげて、
 神の器として用いていただくことへと至ります。

〈信仰者の強さ〉

このような信仰の姿勢は、私たち人間には不可
 能に思えるほどです。それは、人間には不可能で
 すが、主と共におられるならば可能なのです。主
 なる神ご自身が、マリアと共におられて、この信
 仰をお与えくださいました。ここに、マリアに与
 えられた神の恵みが極まります。私たちにおい
 て、マリアのように、突然、大きな困難や試練が
 襲ってくる場合があります。そのような時も、主
 が共におられるという信仰の確信があるならば、
 私たちは強いのです。私たち自身は弱いのですが、
 信仰によって私たちは強められ、どんな困難と試
 練にも負けることなく、恐れと不安に打ち勝って、
 神に従う者とされるのです。(望月信)

テキスト ルカによる福音書1章26～38節

【単元のねらい】

本当の「神の恵み」とは何かを、よく考えさせてください。それは時としてわたしたちが願ったり、考えたりするものとは、違う場合があります。そこでがっかりしたり、いやになったり、つまづいたりしないで、神さまが自分にしてくださることが、いつも最善であることを信頼し、従っていく信仰を与えられたいです。ここでは、神の恵みとは「神が共にいてくださる」ことだと教えられます。祝福と恵みの源である神が共にいてくださることこそ、わたしたちにとってのまことの恵みなのです。

1 2 3 4 5 10 15 20 25 30 35 40 45 50

「神に信頼するマリアの信仰」

ナザレの村でひっそりと暮らしていたマリアのもとに、天使ガブリエルが遣わされて、マリアの前に現れます。それを見たマリアは、はじめびっくりしたのではないのでしょうか。けれどもマリアが驚いたのは、天使が突然自分の目の前に現れたことだけではなく、それ以上に天使が言った言葉だったと思います。ここで天使ガブリエルはマリアに、「おめでとう、恵まれた方」と言ったからです。「恵まれた方」とは、神さまの祝福をたくさんいただいているということですが、マリアはどうしてそのように天使から言われたのでしょうか。

みなさんは、神さまの恵みとは、どのようなものだと思いますか。お金持ちになることでしょうか。自分のやりたいことが何でもできるようになることでしょうか。自分のほしい物が手に入ることででしょうか。それとも、おいしいご馳走をたくさん食べられることでしょうか。いいえ、そういうことではなくて、「神さまが共にいてくださる」ということなのです。ここで天使ガブリエルはマリアに、「主があなたと共におられる」、だからあなたは「恵まれた方」だと言いました。またエリサベトもマリアに対して、「あなたは女の中で祝福された方です」と呼びかけます。神さまの祝福をたくさんいただいている人、それは恵みと祝福の源である神さまが共にいてくださるということではないのでしょうか。「なんだ、それではつまらない」とあなたは思いますか。けれども、もし神

さまと一緒に、怖いものはありません。困った時にも助けてもらえます。悲しい時も慰めてもらえます。そして本当に必要なものは、神さまがちゃんと用意してくださいます。だから神さまが共にいてくださることが、本当の恵みなのです。

さて、この「神さまが共にいてくださる」祝福されたマリアに、天使ガブリエルが伝えたことは、さらに驚くようなことでした。まだ結婚もしていないマリアから、男の子が生まれ、しかもその子はイスラエルの民を治める王さまになると約束されたからです。ユダヤの人々は、長い間、自分たちを治めてくれる王さまを待ち望んでいましたが、それはかつてイスラエルを治めたダビデ王の子孫とされていました。そのダビデの子である王さまが、マリアから生まれるようになるということです。

マリアはその予告に対して、「どうして、そのようなことがありえましょうか。わたしは男の人を知りませんのに」と答えたのです。マリアは、ガブリエルの言葉が信じられなかったのでしょうか。いいえ、そうではありませんでした。同じようなことを、祭司ザカリアは自分の妻であるエリサベトに対して告げられますが、その天使の言葉と約束に対してザカリアは、「何によって、わたしはそれを知ることができるでしょうか」(18節)と尋ねました。そしてその後「わたしは老人ですし、妻も年をとっています」と付け加え、その言葉を信じようとはしませんでした。マリアが天

使ガブリエルに言った言葉も、ザカリアと似てい
 ますが、その意味はまるで違います。というのは、
 マリアはガブリエルの言葉を信じたからでした。
 「どうしてそんなことがありえましょうか」とは、
 そんなことはありえないとか、信じられないとい
 うことではなくて、どのようにしてそうなるのか。
 不思議（ふしぎ）だという意味の言葉なのです。
 こうして祭司のザカリアは、神さまの約束を「あ
 りえないこと」として信じようとしませんでした。
 が、マリアはそれがどのようにして起こるのかと、
 その不思議さを驚いたのです。それは疑ったから、
 でも、信じられなかったからでもありませんでし
 た。マリアは、自分からダビデの位をつぐイスラ
 エルの王さまが生まれることを、そのとき信じた
 のでした。

そして天使ガブリエルに言った言葉が、「わた
 しは主のはしのためです。お言葉どおり、この身に
 なりますよう」という言葉でした。結婚もしてい
 ない女の人から子どもは生まれません。けれども
 「神にできないことは何一つない」と天使は言い、
 マリアはその約束を信じたのです。そこで聖霊が
 マリアを包み、その力ときよさによって罪のない
 神の子が、マリアから生まれることになるのです。
 それはとても不思議なことで、ありえないことの
 ように思いましたが、この不思議な約束を、マリ
 アは心から受け入れ、信じたのでした。そして神

さまのお言葉どおりになりますようにと、それに
 素直に従ったのでした。

この神さまの約束は、マリアにとっては、実は
 とても危険なことになるかもしれないことでもあ
 りました。というのは、結婚もしていない女の
 人が子どもを生むと、それは悪いことだとして、石
 で打ち殺される決まりがあったからです（創世記
 38章24節、申命記22章21節）。ですから、ここで
 天使ガブリエルから告げられた神さまの約束に自
 分を委ねるということは、もしかすると殺されて
 しまうかもしれない危険に自分をさらすことにも
 なることだったのですが、マリアはそのことも含
 めて神さまを信じ、心配と恐れを神さまに委ねて、
 従ったのです。

しかし、このような危険を含め、これらの出来
 事のすべてについて天使ガブリエルが言ったこと
 は、「おめでとう、恵まれた方」、「恐れることは
 ない。あなたは神から恵みをいただいた」という
 ことでした。神さまの恵みというのは、わたした
 ちが考えたり、理解したり、願ったりするものと
 は違います。時には、それはわたしたちの思いと
 はまったく違うものであったりしますが、神さま
 のなさに間違いはありません。天使ガブリエル
 はマリアに「主があなたと共におられる」と
 約束しました。そしてこの、「主が共におられる」
 ということこそ、本当の恵みなのです。

(三川栄二)

[今日の暗唱聖句] ルカによる福音書1章28節

天使は、彼女のところに来て言った。
 「おめでとう、恵まれた方。主があなたと共におられる。」

28
 29
 30
 .
 .
 .
 .
 35
 .
 .
 40
 .
 38

〈ねらい〉

主が共におられるということの恵み、この主に従うことの喜びを伝える。

〈展開例〉

天使がマリアさんに現れて、「あなたは男の子を産みます。その子をイエスと名づけなさい。その子はイスラエルの救い主になります。」と告げた時、マリアさんはどう思ったでしょう。「そんな馬鹿なことがあるもんですか。」なんて思いませんでした。34節の質問は、「どのようにしてそうなるのですか」という、天使の言葉をもっと詳しく知ろうとする質問だったのです。また、「わたしは救い主のお母さんになるのよ！ラッキー！わたしってシンデレラガールだわ！」と言って喜んだでしょうか。いいえ、この時代、ユダヤの国では結婚していない人が子どもを生むようなことがあれば死刑になると言う決まりがあったので

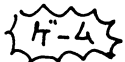
す。でもマリアさんは、「神さまが共におられます。」という天使の言葉を信じました。そして、神さまの御用のために用いていただけることを喜びました。

神さまはわたしたちともいつも一緒にいてくださってわたしたちを守ってくださいます。たとえわたしたちの思い通りにいかないことがあっても、神さまはわたしたちに一番よいように導いてくださるお方です。わたしたちもそこを信じて、どんな時も神さまに従っていきましょう。

〈お祈り〉


神さま、わたしたちがマリアさんのように、神さまがいつも一緒にいてくださることを信じて、喜んで神さまに従う子どもにしてください。イエスさまのお名前によってお祈りいたします。アーメン。

〈やってみよう〉



クリスマスビンゴ

- ① 下のよなわくに9つ
クリスマスで思い出す
言葉を書かせる。

かみば おけ	エリヤ エン	ヨセフ さん
博士 たち	イエス さま	星
クリスマス ツリー	フエル ゼント	

うーん



- ② 教師がクリスマスに関する言葉を
読み上げてゆき、同じことは「かみば」
○をつける。3つそろえばビンゴ!

かみば おけ	エリヤ エン	ヨセフ さん
博士 たち	イエス さま	星
クリスマス ツリー	フエル ゼント	みじ かい

ビンゴ

みじ
かい

〈ねらい〉

イエス様は、約束された救い主であること。

マリアは、神様が自分に良い事をしてくださるということを確認していた。

〈展開例〉

礼拝で聞いたお話を思い出しましょう。

○天使ガブリエルは、マリアに生まれてくる子どもはどんな人になると言ったかな？

・偉大な人、いと高き方の子（神の子）、ユダヤ人の王（1：32・33）。

※ブツダという人は、昔のインドの王子様でしたが、きびしい修行をして、人々を救う道を探し当てたと言いました。でも、イエス様はそうではありません。生まれる前から、イエス様こそが人々を救う道であることが、神様からマリアをはじめとする人々に教えられていました。

イエス様が来られた事は、私たちを神様のところへ連れて行ってくださるための、神様のご計画であったことを語りましょう。

○ガブリエルのお告げを聞いたマリアは何と答えたかな？

・お言葉どおり、この身になりますように。

※まだ結婚もしていないのに、男の子、それも「救い主」を産むと言われたマリアは、ものすごくおどろいたことでしょう。でも、マリアはそのことを受け入れました。それは、マリアが、神様は自分の思いもつかない方法を使っても、私により良い事をしてくださるということを確認していたからです。

アドベントに入ります。クリスマスは、神様が私たちにしてくださったとても大きな「良い事」です。そのことを喜んでクリスマスを迎える準備をしよう子どもたちに語りかけましょう。

〈ちいさなお祈り〉

○イエス様が来て下さったクリスマスを、心から喜んで準備する事ができるよう、お祈りしましょう。

〈やってみよう〉

さがさまことば解読ゲーム

- ① リーダーが次の言葉を声に出して読む。
- ② 聞いているみんなは、何と言う言葉をさがさまから読んだかを当てる。
- ③ わかった人は手を挙げて答える

- | | | |
|------------|----------|----------|
| 1. ルエリブガ | 2. アリマ | 3. スマスリク |
| 4. トンベドア | 5. マサスエイ | 6. イカウヨキ |
| 7. コノミカ | 8. イカヅツヒ | 9. ビウヨチニ |
| 10. リカヒノシホ | | |

だんだん速くしていったり、もっと長い言葉を反対から読んでも楽しいよ！

〈ねらい〉

天使の御告げを心から信じたマリアのように、私たちが御心に従い、主と共に歩むことを喜ぶ。待降節を迎え、クリスマスの本当の意味を知り、救い主の誕生を待ち望んだ旧約の人々のように、神様に祈り、感謝をもってこの時を過ごす。

〈展開例〉

話し合いの導入として……

マリアは皆さんとあまり変わらない年齢（15歳くらい）でした。あなただったら天使の告げたことを、祝福として素直に受け入れることができますか？ 自分に起きた出来事が、神様の御心だとは信じられない、怖い、心配、などと思ってしまうことはありますか？

→人間には不可能なこと、理解できないことも、神様にはできることを確認する。天使の御告げを臆することなく受け入れ、主に従ったマリアの信仰にならい、私たちもまず、主が共にいてくださることを心から喜ぶことができるように導く。

〈工作〉

アドベントカレンダーを作ろう！

○材料……色画用紙二色（緑と赤など）、
カラーペン、はさみ、カッターナイフ、
のり、等

○作り方

- ①色画用紙にツリーの形を描き、2枚重ねて（貼り合わせず）切り抜く。
- ②表にする方の色画用紙に26の扉を作り、開け閉めできるように切る。
扉に30・1～25の数字を書き入れる。
- ③2枚の色画用紙を、扉の部分避けて貼り合わせる。
- ④扉の中（下の方の色画用紙）に、聖句を一言ずつ書き入れる。

○聖句の例 ルカ2：10-11

- 30「天使は」、1「言った」、2「恐れるな」、3「わたしは」、4「民全体に」、5「与えられる」、6「大きな」、7「喜びを」、8「告げる」、9「今日」、10「ダビデの」、11「町で」、12「あなたがたの」、13「ために」、14「救い主が」、15「お生まれに」、16「なった」、17「この方」、18「こそ」、19「主」、20「メシア」、21「である」、22「ルカによる」、23「福音書」、24「2章」、25「10～11節」

☆子どもたちに、それぞれ好きな聖句を選ばせて、26に分けて書き入れさせても良い。

☆扉は一度全部閉じておき、毎日ひとつずつ開けていくようにする。

☆皆でひとつのカレンダーを作り教会に飾って、日曜日ごとに1週間分、下級や幼稚科の子どもたちに開けてもらうのも良い。

ねらい

- カトリックのような「聖母マリア」という信仰は、私たちにはない。しかし、マリアの信仰的態度、謙そんさは、私たちも見習うべきである。

展開例

- 洗礼者ヨハネの父ザカリアは、天使の言葉に対する不信仰のゆえに、口が利けないようにされた。それに対して、マリアの態度は、神への信頼に満ちている。
- 主なる神を信じ、信頼する者は、神にゆだねるがゆえに、結婚前に身ごもるという大きな出来

事、苦難をも受け入れ、堪え忍ぶことができる。神の大きな御計画の前にへりくだり、神の器として用いられることを喜ぶ者とされるのである。

話し合ってみよう！

- 神の御言葉に対する、マリアの謙そんさ、従順について、話し合おう。

祈り

マリアのように、「お言葉どおり、この身に成りますように」と、神の御言葉に従順でありますように。

○暗唱聖句○

ルカ福音書1:28

○祈りの課題○

聖書日課

日	ルカ福音書	1章26～33節
月	ルカ福音書	1章34～38節
火	イザヤ書	2章1～5節
水	イザヤ書	7章13～17節
木	イザヤ書	9章1～6節
金	イザヤ書	11章1～10節
土	イザヤ書	12章1～6節

☆三日記☆

テキスト ルカによる福音書1章39～55節

〈信仰者の交わりの祝福〉

神の御使いより、「身ごもって男の子を産む」、「その子は偉大な人になり、いと高き方の子と言われる」という、驚くべき御告げを受けたマリアです。神の御言葉を信じて受け入れたマリアでありましたが、心の内はどれほど驚きと不安でいっぱいであつたらうかと思われます。親類のエリサベトのことが指摘されており(1:36)、マリアは、すぐにエリサベトを訪ねて、驚きと不安を分かち合おうといたしました。

そのマリアを、祝福の言葉が迎えました。エリサベトの胎内の子が喜びおどるほど、マリアに与えられた幸いは大きいのです。エリサベトは、聖霊に満たされて、マリアと胎内の子が祝福されていることを語り、マリアを励まします。これから多くの困難がマリアを襲うでしょう。しかし、御言葉が必ず実現すると信じた者に与えられる祝福は、その困難を打ち砕いて余りあるほど大きいのです。「幸いなるかな、主がおっしゃったことが必ず実現すると信じた者は」。そう言って、エリサベトはマリアを慰め、カづけました。

ここには、信じる者たちが信仰の労苦と戦いを共に分かち合い、互いに励まし合う祝福が示されています。このような祝福ある交わりが、私たちにも与えられています。

〈マリアの賛歌〉

エリサベトの励ましにカづけられて、驚きと不安で心がいっぱいであつたマリアも、あらためて心を開いて、心のまなざしを神に向けます。私たちを用い、私たちを超えて、ご自身の大きなご計画を成し遂げられる神、その神へと心を向けるのです。

47節から55節は、「マリアの賛歌」(マグニフィカート)と呼ばれます。この歌の特徴は、冒頭の

言葉にあります。日本語の翻訳では語順が変わってしまうのですが、ギリシャ語原文では、「あがめる」が冒頭の言葉です。これが、「マグニフィカート」(ラテン語)という言葉の由来です。

この「マグニフィカート」とは、本来、「大きくする」、「拡大する」という意味です。すなわち、「あがめる」とは、神を大きくすること、主なる神が大きくなることなのです。

驚きと不安で心がいっぱいであつた時、マリアの思いは、自分自身に向いていたでしょう。これから何が起こるのか、どんな誤解と混乱が自分を待ち受けているか、それをどう乗り越えていくか、自分のその悩みや迷いがたいへん大きくて、自分の心の大部分を占めていたでしょう。しかし、信仰者が信仰者として歩むためには、私たち自身の思いを小さくして、むしろ神がどんなお方で、どれほど力強く大きなお方であるのか、そのことを思いめぐらすことが大切です。そして、神が大きくなり、私たちが小さくなるとは、私たち自身が失われてしまうようなことではありません。むしろ、神に造られた良きものとしての、ありのままの姿を回復させられることです。神の命に生かされる、本来の私たちとされるのです。神の大きさ、広さ、深さ、豊かさに心を目を向ける時にこそ、私たちの疑いや恐れと不安が取り除かれて、神への信頼と平安で心が満たされます。

マリアの賛歌は、ですから、自分についてへりくだり、謙そんであり、神を喜びほめたたえます。神のみわざを讃美します。もう一つの特徴は、思い上がる者、傲慢な者が打ち砕かれて、身分の低い者、へりくだる者が高められるという点です。神は、真の正義と公平をもたらしてください。ここに、救い主イエス・キリストのみわざが指し示されているとすることができます。(望月信)

テキスト ルカによる福音書1章39～55節

〔単元のねらい〕

心配と不安が心を一杯にし、大きくなっていくのではなく、むしろ神さまを心から信頼して、神さまを大きくしていったマリアの信仰を見ましょう。神さまをあがめるとは、神さまを「大きくしていく」ことです。子どもたちの心が、不満やいらいら、悲しみや不安、悩みや心配で一杯になる（大きくなる）のではなく、神さまが大きくされていくなかで、それらのものが小さくなっていくことを伝えていきたいものです。

「マリアのさんび」

天使ガブリエルからの知らせを聞いたマリアは、そのことを信頼できる人と分かち合いたくて、親戚であったエリサベトのところに行きました。エリサベトにも、神さまが不思議な業を起こしてくださったことを知っていたマリアは、エリサベトならマリアに起こることを理解し、受けとめることができると思ったからでした。そこでマリアがエリサベトに会うと、エリサベトにはマリアがどんな人であるかが分かりました。エリサベトはマリアよりずっと年上の人でしたが、自分よりずっと年の若いマリアは、主が約束なさったことはかならずそうなると思える信仰の深い人だと分かったのです。マリアはすでに天使ガブリエルを通して神さまに、「お言葉どおりこの身になりますように」と祈り、自分を神さまにささげていました。そのような信仰をもったマリアは、神さまからとても祝福された人だとエリサベトには分かったのです。マリアが、神の子イエスさまのお母さんに選ばれたのは、マリアが神さまを恐れ、神さまに心から従う、素直な信仰をもっていた人だったからでした。しかしここでマリアが言った、神さまの「お言葉どおり」ということで意味することは、マリアが焼き殺されるか、石で打ち殺されることになるかもしれないという、自分についての不幸な出来事をも含んでいました。しかしマリアは、それらのことも含めて、これらの約束の全部を受け入れたのです。わたしたちも、マリアのように「主のおっしゃったことはかならず実現

すると信じ」、神さまを信頼して、祝福される本当に幸いな人になりたいですね。

そしてここで、このように小さな自分をかえりみて、祝福してくださった神さまに感謝して、マリアは賛美をささげました。それは小さな自分、身分の低い、卑しい自分を、神さまは軽んじたり、ばかにしたり、恥をかかせたりすることなく、目を留めて、幸いを与えてくださったと感謝するのです。そして自分は偉い、自分はすごいと思いがっている人を低くして、みんなから卑しめられたり、ばかにされている人を高く引き上げてくださるのです。

このマリアの賛美は、実はサムエルのお母さんのハンナの賛美（サムエル記上2章1～10節）に似ています。ハンナの賛美も、低くされている人を神さまが高く上げてくださることを賛美したもので、これまで多くのイスラエルの人々、とりわけ女の人たちを励まし、希望を与えてきた賛美なのでした。マリアも、このハンナの賛美をロブさみながら、つらいとき、悲しい時に、慰めと励ましを得ていたのではないのでしょうか。そして同じ神さまの恵みが自分の上にも実現した時に、自然と口をついて出て来たのが、このハンナの賛美だったのでした。

ここでマリアは「わたしの魂は主をあがめる」と歌います。わたしは神さまを賛美するということが、それはどういうことでしょうか。神さ

まを「あがめる」とは、どういうことなのでしょう。この「あがめる」という言葉は、「大きくする」という言葉です。つまり神さまをあがめるとは、神さまを「大きくする」ということなのです。自分の心の中で、思いの中で、神さまを大きくしていくこと、それが神さまをあがめ、賛美するということなのです。

今、あなたの心の中を一杯にしているのは何ですか。ほしい物のことですが、したいと考えていることですか。こうなってほしいと願っていることでしょうか。わたしたちは、心の中でいつも、何かを大きくしています。しかしそれはかならずしも自分の思いや願いどおりにならなくて、むしろ不平や不満、文句やいらいらが心を一杯にし、

ふくらませていくかもしれません。そうではなく、わたしたちはいつも、神さまを大きくしていきたいですね。心に神さまが満ちあふれるとき、喜びと感謝も心に一杯になるのです。マリアには、きっとこれから先どうなるかといった不安や恐れもあったかもしれません。しかしマリアは、それを心の中で大きくするのではなくて、むしろ神さまへの信頼を大きくしていきました。心の中で神さまが大きくなっていく時、わたしたちの心の中の恐れや不安、心配や悲しみや、小さくなっていくのです。わたしたちの心の中で、いつも神さまが大きくなっていくことを、祈り、願っていきましょう。

(三川栄二)

[今日の暗唱聖句] ルカによる福音書1章47節

わたしの魂は主をあがめ、わたしの霊は救い主である神を喜びたたえます。

〈ねらい〉

自分の心の中を自分のことではなく、神さまのことでいっぱいにする時に、悲しみや不安は小さくなってゆくことを覚える。

〈展開例〉

みんなはうれしいことで心がいっぱいになった時、思わず歌いたくなることってあるよね。天使によって救い主のお母さんになることを告げられたマリアさんも、喜びで心がいっぱいになって歌いました。その歌が今日の聖書の箇所に乗っています。でもマリアさんは、他の女の人ではなくてこのわたしが選ばれたからうれしい、と喜んだのではないのです。神さまがこんな小さなわたしのことをお心に掛けてくださったということを楽しんだのです。そして神さまをあがめ、喜びたえました。この、「神さまをあがめる」という言葉は、「神さまを大きくする」ということです。マリア

は神さまのことで心がいっぱいだったから、不安や恐れに負けませんでした。

わたしたちの心の中は今、何でいっぱいですか。好きなテレビのこと？新しいゲームのこと？でも、そういうことで心がいっぱいになると、思うように行かなかった時、不平不満が心の中にいっぱいになってしまいます。わたしたちもマリアさんのように、神さまのことで心がいっぱいになりたいですね。神さまのことで心がいっぱいになる時、わたしたちの心の中にある不安や恐れや文句などは少しずつ小さくなっていきます。そして心から神さまをあがめ、讃美することができるようになるのです。

〈お祈り〉

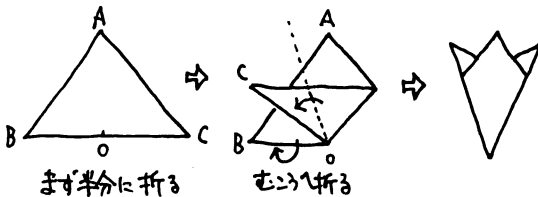
神さま、どうかわたしたちの心を、神さまのことでいっぱいにしてください。イエスさまのお名前でお祈りいたします。アーメン。

〈やってみよう〉

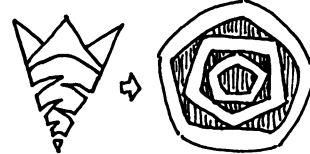
工作をしよう！

美しい切り絵をつくろう！

① 色紙を下のよう折ってゆく。



② 自由に切って広げる



※ 黒い紙でつめて裏から色紙のフタをはり、ステンドグラスのようなカゴロになるよ！

〈ねらい〉

マリアの喜びは、神様への信頼がもとになっていること。

自分の事を考えるよりも神様の事を喜ぶ事によって、自分も嬉しくなっていく。

〈展開例〉

礼拝で聞いたお話を思い出しましょう。

○エリサベトのところに行ったマリアは、神様のことを「すごいなあ」と喜ぶ歌を歌いました。

それは、ほんとに何もすごいところのない、ちっけな自分を神様が選んでくださって、救い主を産むという素晴らしいことをさせてくださるからでした。

まだ結婚していないマリアが赤ちゃんを産むということは、マリアにとって心配な事もたくさんあったのですが、マリアは、大好きな神様がいつも「自分にいつも一番良い事をしてくださる」ことを知っていたので、とても嬉しかったのです。
※神様はマリアにしてくださったように、私たちにも一番良い事をしてください。教師がそのことを喜び、子どもたちに教師の喜びを伝えましょう。

○私たちにはいろんな心配事があります。でも、そのことばかり考えていると、心配事が心の中でどんどん大きくなって、心の中の神様の場所がどんどん小さくなってしまいます。すると、私たちの心はいつそうしゅんとしてしまうのです。

マリアが神様のすばらしいことをいっぱい考えて心配事を小さくしてしまったように、私たちも神様のしてくださった良い事を数え上げてみましょう。

※繰り返しになりますが、アドベントは神様が私にくださった最大のすばらしいもの「救い主」を喜び準備の期間です。

子どもたちとともに神様のしてくださった「良い事」を数え上げ、その頂点に救い主を置く事を語りましょう。

〈ちいさなお祈り〉

○神様が私にしてくださる「良い事」を見つけることができますように。

○イエス様のお誕生という神様が下さった「良い事」を喜ぶ事ができますように。

〈やってみよう〉

- ① この一週間の中でうれしかったこと、楽しかったこと、良かったことを三つ以上思い出して書いてみましょう。
- ② 今、喜べることを三つ以上書いてみましょう。

例) 自分の大好きな食べ物が夕食に出てきた。
けんかしていたお友だちと仲直りできた。
さがしていた大切なものが見つかった。 など。

〈ねらい〉

「神様をあがめる」とは、心の中で「神様を大きくしていくこと」であることを学び、私たちも共に神様をあがめることができるよう導き、励ましたい。神様の愛の大きさに心をむけ、感謝しつつクリスマスを迎えられるよう備えたい。

〈展開例〉

○みんなで考えてみよう。

- ①天使のこぼれを聞き、親類のエリサベトの家に向かうマリアの心の中は、どの様な気持ちだったでしょう。
- ②エリサベトからの祝福のこぼれを受けて、マリアはどうしましたか。
- ③「神をあがめる」とは、どういうことですか。
- ④私たちの心はいつも神様をあがめているのでしょうか。
- ⑤「神をあがめる」ことにより、私たちの心はどう変えられていくのでしょうか。

○みんなでやってみよう。

- ①今、あなたの心の中で、大きくなっていること

は何ですか。具体的に書きだしてみましょう。

- ②神様はどんなお方だと思いますか。いくつでも書き出してみましょう。

☆神様の偉大さ、愛の大きさ、素晴らしさに目を向けられるように導いてください。

☆複雑な友だち関係、身近におこる様々な事件等、子どもたちなりに多くの不安や心配をかかえていることがあるかも知れない。神様に心の目を向け、祈り合い、励まし合えるようにしたい。

〈暗唱聖句〉

わたしの魂は主をあがめ、わたしの霊は救い主である神を喜びたたえます。

ルカ1:47

〈折り〉

神様、「主のおっしゃったことは必ず実現する」と信じたマリアのように、私たちが心から神様を信頼し、あがめることができるようにしてください。アーメン。

ねらい

- マリアの謙虚さと信仰にならう。
- 「マリアの賛歌」のすばらしい歌を味わう。

展開例

- マリアがエリサベトを訪ねた時の、胎児であるヨハネと主イエスの関係が興味深い。マリアの声を聞いてヨハネが胎内で喜びおどる。生涯の縮図を見ているようである。
- 神を大きくし、私たち自身は、小さくなる。しかし、それは、私たちが失われることではない。神によって生かされ、神の恵みの器とされるのである。

- 神は、思い上がる者を低くし、マリアのように謙そんな者を高く引き上げられる。私たち自身を省みさせられる歌である。

話し合ってみよう！

- 「マリアの賛歌」は、冒頭の言葉から、「マグニフィカート」と呼ばれる。クリスマスソングとして多く歌われているので、音楽鑑賞をするとうい。

祈り

- マリアの信仰と謙そんさにならう者とならせてください。

○暗唱聖句○

ルカ福音書1:47

○祈りの課題○

聖書日課

日	ルカ福音書	1章39～45節
月	ルカ福音書	1章46～56節
火	イザヤ書	30章18～26節
水	イザヤ書	32章1～8節
木	イザヤ書	32章15～20節
金	イザヤ書	33章2～6節
土	イザヤ書	35章1～10節

☆三日記☆

テキスト ルカによる福音書1章57～66節

〈ヨハネ誕生の予告〉

この57節以下の御言葉は、1章5節～25節の御言葉の続きです。ザカリアとエリサベトは、祭司の家系に属し、神のおきてを重んじて、信仰に生きてきた夫婦でした。しかし、子どもが与えられないまま年をとっていました。二人は、もちろん子どもを求めて祈り続けていたでしょう。しかし、子どもが与えられず、そのことが二人を苦しめていました。

ある日、ザカリアが祭司の務めのため、一人で聖所に入り、香をたいていると、神の御使いが現れました。御使いは、ザカリアの妻エリサベトに男の子が生まれると告げました。しかし、ザカリアはその御告げを信じることができず、「わたしは老人ですし、妻も年をとっています」と答えました。そのため、御使いは、ザカリアの口を閉じます。それは、沈黙して、神のみわざを待ちなさいということでしょう。私たちの理性、人間の知識や常識は、雄弁です。その雄弁さの中で、神のみわざを拒否することが起こります。その意味で、ザカリアに沈黙が与えられたことは、恵みでさえあります。ザカリアとエリサベトは、沈黙のうち神のみわざを待ち望み、祈り備える幸いを与えられました。

〈ヨハネの誕生〉

神の御使いの御告げ通り、エリサベトはみごもり、月満ちて男の子を産みました。ザカリアとエリサベトは、たいへん喜んだでしょう。子どもは神の祝福の証しであるからです。

生まれて八日目に、子どもに割礼を施し、名付けます。割礼は、その子が神の民イスラエルに連なるしるしであり、家族や親族友人が集まって、

誕生を祝う時でもあります。親類縁者の見守る中、割礼が施され、名前が付けられます。通常、一族の中の誰かの名前がとられて、その子の名前とされました。集まっていた人々は、父の名をとって、その子にザカリアと名付けようとしていました。

しかし、エリサベトは、その子の名前をヨハネとするよう主張します。それは、神の御使いによってザカリアに示されていた名前です。エリサベトにとって、ヨハネと名付けると主張することは、周りの人々に逆らい、また当時の常識に逆らうことになります。しかし、このことは、彼女にとって、信仰の戦いであり、神を神とすることにほかなりませんでした。人を恐れることなく、神を畏れ敬って戦ったのです。そして、声を発することのできないザカリアも、その戦いを共にして、字を書く石板に、「この子の名はヨハネ」と書きました。

〈神の恵みの賜物〉

「この子の名はヨハネ」と書いたザカリアは、たちまち口が開きました。それは、もはや彼の口から人間の雄弁な知識が語られるのではなく、神への感謝と讃美があふれ出るからです。神讃美には、沈黙を打ち破り、石が叫び出す（ルカ19:40）ほどの力があります。「ヨハネ」とは、「神は恵み深い」という意味です。ザカリアは、年老いて与えられた子どもを神の恵み深い賜物として受け止めて、神に感謝と讃美をささげました。また、救い主メシアを指し示し、ヨハネがその先駆けとして用いられると預言しました（1:67-79）。ザカリアは、ヨハネを神にささげて、神からの賜物として、神の僕として、養い育てました。（望月信）

テキスト ルカによる福音書1章57～66節

(単元のねらい)

エリサベト、そしてザカリアが、「この子の名はヨハネ」としたのは、御使いの言葉に従ったからですが、それは同時に二人の祈りに真実に応え、その願いをかなえてくださった恵みの神に対する信仰告白でもありました。ヨハネとは「主は恵み深い」という意味ですが、それがこれまで口を開くことができなかつたザカリアから最初に出てきた言葉でした。そこに、沈黙の中で神の恵みを見つめたザカリアの信仰が言い表されています。この出来事の中に、このような二人の信仰と神への感謝が込められていることを語ってください。

「この子の名はヨハネ」

子どものいなかったエリサベトに、待望の男の赤ちゃんが生まれました。この日をエリサベトとザカリアの二人は、どれほど心待ちにしていたことでしょうか。二人はこれまでずっと、二人の間に男の子が与えられることを祈りつづけてきたのです。長い間そのことを祈りつづけてきましたが、二人の間に子どもは生まれませんでした。そのことは二人をととも苦しめてきました。というのは、昔のユダヤでは、神さまの祝福は、何にもまして子どもがたくさん生まれるということだったからでした。二人は、「神の前に正しい人で、主の掟と定めをすべて守り、非のうちどころがなかった」(6節)のですが、それにもかかわらず、これまでずっと、子どもが与えられてきませんでした。だから周りの人たちは、この二人に子どもが生まれないのは、何か問題があるからではないか、隠れた罪があって、それによって神さまから裁かれ、呪われているからではないかと勘ぐり、あらぬ噂を立てていたかもしれません。また当時のユダヤの女性にとって、子どもを産むことができないということは、とても悲しい、そして恥ずかしいこととされていたのです。ひどいことです。そのように見られていたのです。

だからエリサベトが子どもをみごもることができたとき、その喜びはひとしおで、「主は今こそ、こうして、わたしに目を留め、人々の間からわたしの恥を取り去ってくださいました」(25節)と

感謝したのです。子どもが与えられなかったことは、エリサベトにとって「恥」だったからでした。神さまを心から恐れ、従って生きている正しい人にとって、神さまの祝福の目に見えるしるしである子どもが与えられないことは、耐えられないことでした。だから二人は長い間、そのことを神さまに祈りつづけてきたのです。

二人の間に子どもが生まれることを予告しに来た天使ガブリエルが、「ザカリア、あなたの願いは聞き入れられた。あなたの妻エリサベトは男の子を産み。その名をヨハネと名付けなさい」(13節)と語ったのは、それだけ長く、また熱心に二人がそのことを祈りつづけてきたこと、そしてその祈りに神さまが応えてくださったことを表しているのです。あなたは、自分が心から願うことについて、いつまでも忍耐強く、祈りつづけているでしょうか。神さまは、わたしたちの祈りを無視したり、聞き流したりする方ではありません。神さまはあなたの祈りをちゃんと聞いてくださっています。ただ、それが実現するのは、神さまのご計画と時間があるのです。またそれは自分が祈ったり、願ったとおりに実現するとはかぎりません。しかし神さまは、わたしたちにとって一番良い時に、一番良い方法で、その祈りに応えてくださる方なのです。大切なことは、このザカリアのように神さまを信じ続けて、忍耐強く祈りつづけていくということなのです。

さて、ユダヤでは、男の子が生まれると、その8日目に割礼を授けて、その子に名前をつけるならわしになっていました。それによって正式にその子が、イスラエルの一員となったことを意味したのです。普通は父親が子どもの名前をつけますが、このときザカリアは口がきけなかったので、エリサベトが名をつけることになりました。そこでエリサベトは、生まれた子に「ヨハネ」とつけます。しかも彼女はするように「しなければなりません」ときっぱりと言ったのです。なぜならそれは、天使ガブリエルが命じたことだったからでした(13節)。それを聞いたのはザカリアだけで、彼は口がきけなくなっていましたから、ザカリアはそのことをエリサベトに、書いて教えたのかもしれない。とにかく二人は、子どもが生まれるというガブリエルの約束を信じ、名をヨハネとつけるようにとの言葉に従ったのでした。だからエリサベトは、きっぱりと生まれた子の「名はヨハネ」と言ったのです。

ところが、このヨハネという名は一族にはない名前でした。その時代、子どもの名は一族の中から、特に父親や祖父から名をつけるならわしとなっていたため、人々は納得せず、今度は本来の名づけ親であるザカリアに子どもの名前をたずねます。それを「手振り」(62節)で聞いたのは、ザカリアがおそらくは耳も聞こえなくなっていたからでした。ところがそこでザカリアも、「この子の名はヨハネ」と答えます。それは、ガブリエルの言葉に基づくものであり、こうしてザカリアもガブリエルの約束を信じ、それに従ったのでした。

わたしたちは、しきたりに捕らわれたり、みんなの言うことに押されて、なかなか自分の意見を言うことができないことがあります。しかしエリサベトとザカリアは、ここでみんながなんと言っても、「この子の名はヨハネ」と主張しました。こ

のような強さは、一体どこから来たのでしょうか。二人が、他のだれよりも、神さまを畏れる人たちだったからではないのでしょうか。わたしたちは、神さまを畏れるよりも、人間を恐れてしましますが、まずだれよりも神さまを畏れ、神さまに従う人でありたいと思います。

このヨハネという名は、「主は恵み深い」という意味でした。ですからここでザカリアが「この子の名はヨハネ」と言ったのは、ガブリエルに従って子どもの名前を言ったというだけではなく、神さまは恵み深い方だと信仰を告白したということでもありました。するとザカリアの口は開き、舌のもつれがほどけて言葉をしゃべることができるようになります。そこでザカリアの口から出て来た言葉は、今まで話せなくてつらかったことのぐちゃや文句、神さまから罰を受けたことの非難や不平ではなくて、神さまを賛美することでした。こんな時、わたしたちだったら、最初にどんな言葉が出てくるでしょうか。口をきくことができず、おそらくは耳も聞くことができなくなっていた沈黙の期間、ザカリアは深い祈りの中で、自分の不信仰と、しかしそれにもかかわらず自分たちの祈りを聞き、それにちゃんと応えてくださった神さまの恵みを思い巡らす中で、心が不満や不平ではなくて、賛美と感謝にあふれてきたからではないでしょうか。人は心にあることを話します。イエスさまは「人の口からは、心にあふれていることが出てくる」(マタイ12章34節)と言われました。今、あなたの心を満たし、一杯にしているものはなんでしょうか。マリアのように、神さまで心が一杯になり、ザカリアのように、感謝と賛美が心にあふれるようになりたいですね。

(三川栄二)

[今日の暗唱聖句] ルカによる福音書1章63～64節

父親は字を書く板を出させて、「この子の名はヨハネ」と書いたので、人々は皆驚いた。

すると、たちまちザカリアは口が開き、舌がほどけ、神を賛美し始めた。

〈ねらい〉

苦難の中でも神さまを信頼して祈り続けるなら、神さまは最善の方法でこたえてくださることを覚える。

〈展開例〉

みんなはつらく苦しいことがあるとき、どんなことで心がいっぱいになりますか。もしかすると不平や不満かもしれませんね。でもザカリアさんはそうではありませんでした。ザカリアさんは、聖所で天使に出会って、「あなたの妻は男の子を産む」と告げられた時、とても信じることができませんでした。すると天使によってザカリアさんは、口が利けなくされてしまいます。けれどもそれは、ザカリアさんが信じなかった罰を受けたものではありませんでした。ザカリアさんはしばらくの間自分の口を閉じて、きっと神さまにひたすら祈ったと思います。そしてその中で次第にエリサベトのおなかが大きくなってゆくを見ながら、神さまの恵みをしみじみと感じたのでしょう。で

すから、子どもが生まれて口が利けるようになった時に、ザカリアさんは、真っ先に神さまを讃美したのです。

わたしたちも、苦しいことやつらいことがあるとき、文句を言いそうになる時もあるかもしれませんが、もしかすると神さまは、そのつらいことを通して大切なことを教えて下さろうとしていらっしゃるのかもしれませんが。わたしたちはどんな時も神さまを信頼して、祈り続けましょう。そうすれば、そのつらいことの中にも神さまのお恵みを見つけることができるはずですよ。

〈お祈り〉

神さま、わたしたちは苦しいことやつらいことがあるときにすぐつぶやいてしまいそうになります。どうかわたしたちがどんな時も神さまを信頼して祈り続けることができるようにしてください。イエスさまのお名前でお祈りいたします。アーメン。

〈やってみよう〉

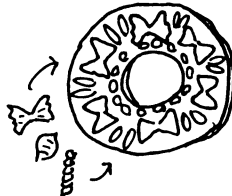
工作をしよう！

マカロニリスを作ろう！

- ① 厚紙やダンボールで輪を切り始めて土台にする。



- ② マカロニを自由に土台の輪にボンドではりつけてゆく。



- ③ 金や銀のラッカースプレーをかけるとキレイ！



※ 外でやります！

〈ねらい〉

イエス様に先立って生まれたバプテスマのヨハネは、約束された救い主が来られる事を先触れする役割があった。

クリスマスを来週に控えて、私達も救い主のお誕生をむかえる喜びを語ろう。

〈展開例〉

○ヨハネの役割は？

※今日のお話に出てきたザカリアとエリサベトの子ども「ヨハネ」も、イエス様と同じように、生まれる前に天使から生まれることが前もって知らされ、名前も決められていました。

イエス様は、「救い主」としてこられることが知らされましたが、ヨハネは、何のために前もって生まれることが知らされていたのでしょうか。

ヨハネは、大きくなってから「洗礼者ヨハネ(バプテスマのヨハネ)」とよばれました。イエス様がみんなの前で神様のところへ行く道についてお話し始められる前(イエス様が皆にお話を始められたのは30歳位になってからでした)に、皆に「もうすぐ救い主が来られるぞ。みんなその方についていきなさい」と話しました。そして、イエ

ス様が皆の前に出てこられると、「この方こそ救い主だ」と皆に教えました。

ヨハネは、人々がイエス様のお話を聞く準備ができるように、前もって「宣伝」する役割を持って生まれてきたのです。ここでも、イエス様がお生まれになったことは、神様によって前もって計画されたことがわかります。

○私たちはクリスマスが来ることを皆に宣伝しよう！

※来週は、いよいよクリスマスです。日曜学校ではクリスマス礼拝やお祝い会をします。クリスマスがうれしくてお祝いするのは、私たちの「救い主」イエス様が来られた日だからです。

私達も、この1週間、バプテスマのヨハネのように、「来週はイエス様のお誕生日だぞう！」とお友だちに「宣伝」しましょう。

〈ちいさなお祈り〉

○来週は、クリスマスです。

私達がお友だちに、イエス様が来てくださってうれしいことを伝える事ができるよう、お祈りしましょう。

〈やってみよう〉

クリスマスカードをつくろう！

(図版は105ページに掲載しています。)

来週はいよいよクリスマスです。

クリスマスカードをつくって、お友だちを日曜学校のクリスマスにさそいましょう。

お父さんやお母さんにプレゼントするのもいいかも！

〈目標〉

神様の御計画は、私たちの小さな心では理解できないことが多い。しかも罪深い私たちは、自分の思い通りにいかない時、すぐに勝手な解釈をして、神様の恵みを否定してしまうような言動を起こしてしまう。物や情報が氾濫した今の時代において、神様の御心を求め続ける忍耐強い祈りと、御心であるならば必ず神様がかなえてくださることを確信する純粋な信仰を、この箇所から学びたい。

〈展開例〉

ゼカリヤとエリサベトの二人は、年をとるまで何十年も、子どもが与えられるように、神様に祈り続けました。みなさんは何か一つのこと（二つ以上でもOK）を長い間祈った（祈り続けている）経験がありますか？

1. それはどんな祈りですか？

一人一人に簡単に話してもらおう。

話すことのできないこと、恥ずかしいことの場合もあるので、配慮が必要。

2. その中でかなえられたものはありますか？

3. 何度祈ってもかなえられない時、私たちはどうすれば良いでしょうか？

〈祈りの時間〉

1. 分級で出し合ったそれぞれの祈りの課題を祈りあう。

輪になって順番にそれぞれ隣りのお友だちのために祈る。最後にみんなで主の祈り。

2. 一週間の曜日ごとに、一人一人の祈りの課題をわりあてて、毎日短くても全員が一人のために祈る。一人がみんなのために祈ることになる。

☆神様の御心であるのなら、必ず私たちの祈りは聞き入れられます。神様と正しく会話するために聖書を読むことが重要です。神様の御心は聖書を通して語られるからです。聖書を読むことと祈ることはセットであることを、しっかりと愛する子どもたちに、伝えていきたいと思えます。

ねらい

- ザカリアの不信仰が信仰へと変えられたことを学ぶ。

展開例

- ザカリアは、神を知る神の民であり、神に仕える祭司であったが、天使を通して与えられた神の言葉を信じるができなかった。これは、私たちキリスト者の陥る不信仰と同じであると言することができる。
- 口を利けないという罰を通して、ザカリアの信仰を目覚めさせた神のはからいは、私たちにし

ばしば同じ様にして教育されることを思い起こさせる。

話し合ってみよう！

- 信仰に導くための刑罰や困難と思われることを経験したことがあるかどうか、考えてみよう。

祈り

願わくは、ザカリアのようにではなく、マリアのように、あなたを信頼できますように。しかし、ザカリアのように、刑罰を通してでも、あなたを信じほめたたえることへとお導きください。

○暗唱聖句○

ルカ福音書1:64

○祈りの課題○

聖書日課

日	ルカ福音書	1章5～25節
月	ルカ福音書	1章57～66節
火	ルカ福音書	1章67～80節
水	イザヤ書	40章1～11節
木	イザヤ書	42章1～9節
金	イザヤ書	52章13節～53章12節
土	イザヤ書	61章1～4節

☆ニ日記☆

テキスト ルカによる福音書2章1～20節

〈まことの神の子、まことの救い主〉

ルカ福音書は、主イエス誕生の時代背景をていねいに描き出しています。皇帝アウグストゥスは、ローマ帝国の初代皇帝です。ローマの覇権が確立し、「ローマの平和（パクス・ロマーナ）」が始まりました。そのため、アウグストゥスは、「神の子」「救い主」と呼ばれるほどでした。その治世に、全領土の住民に最初の住民登録が命じられて、ローマ帝国による新しい世界体制が始まりました。

もう一方で、福音書は、生まれてくる幼子がダビデの家に属し、その血筋であることを強調しています。この幼子は、ダビデの町の出身であり、すなわち、エッサイの若枝、ダビデの子としてお生まれになったのです。

福音書は、一方で「神の子」「救い主」と仰がれたアウグストゥスを指し示し、もう一方でダビデの子である幼子を指し示します。アウグストゥスはローマの軍事力に基づいて平和を確立しました。しかし、まことの平和、神の平和はどこから来るのか。それは、ダビデの子である幼子からにはかなりません。福音書は語っています。この幼子こそ、まことの神の子、まことの救い主である、と。

〈神の御子・救い主のへりくだり〉

福音書が指し示すまことの神の子、救い主は、へりくだりの主であられます。主イエスは、神殿でお生まれになるのでもなく、王宮でお生まれになるのでもありません。主イエスは、生まれる場所がなく、家畜小屋で、家畜のえさを入れる飼葉桶に寝かされました。当時、どれほど貧しい人であっても、生まれてくる子どものために最低限ゆりかごは用意したそうです。主イエスは、寝る

ところもない、そのような貧しいさまで、お生まれくださいました。

そのへりくだりのさまは、神の御使いの御告げにもあらわれています。すなわち、主イエスの誕生は、地位と名誉のある人々に告げ知らされるのではなく、羊飼いたちに告げ知らされました。この羊飼いたちは、住民登録が命じられている中、自分の町に帰ることなく、野宿をして、羊の群れの番をしていました。それは、この羊飼いたちが、住民登録の数に入れられていなかったということです。いわばこの世界の枠組みの中でのけ者扱いされて、居場所を持たない人々です。この世界の狭間、暗闇に生きていた羊飼いたちにとって、救い主メシア誕生の告知は、たいへん感動と喜びにあふれるものであったでしょう。彼ら羊飼いたちも、神の御前には、そしてまことの救い主の前で、居場所を持つのだと、神の民なのだとして示されたのです。

主なる神は、この羊飼いたちをして、福音の器、福音の担い手としてお用いになります。羊飼いたちは、ただちに主イエスのもとに駆けつけて、主イエスにひざまずいて神を礼拝したでしょう。そして彼らは「この幼子について天使が話してくれたことを人々に知らせ」ました。神に用いられ、神をほめたたえて歩む者とされたのです。

こうして、主イエスは、地上でよそ者として生きる者の友となられました（ヘブライ11:13-16）。私たちの苦しみと試練をすべてご存じであり、私たちのためにご自身をささげて執り成す救い主となられました（ヘブライ4:15）。へりくだられた主イエスこそが、真の神の子、救い主なのです。

(望月信)

テキスト ルカによる福音書2章1～20節

(単元のねらい)

イエスさまは、羊飼いに代表される、きらわれ者、憎まれ者、見捨てられた人々の救い主としてお生まれくださった方であることを理解させてください。それが羊飼いに対する告知の意味なのです。そしてこの方を心に迎え入れることこそが、わたしたち一人一人にとってもクリスマスとなるのです。汚い家畜小屋に生まれてくださった救い主は、罪に汚れたわたしたちの心にお生まれくださることを願っておられます。行事として祝うクリスマスではなく、本当のクリスマスを祝うことができるように導いてください。

「羊飼いの救い主、イエスさま」

ヨセフとマリアは、ナザレに住んでいました。その二人がベツレヘムまで旅をしなければならなかったのは、人口調査のためでした。人口調査は、ローマ帝国が住民から税金をしぼり取り、労務(ただで働かされる仕事)をさせ、兵隊に取るためのもので、ユダヤの人々には何も益しいものではありませんでした。マリアは出産まじかでしたが、それでもローマ帝国の命令には従わなければならず、ナザレからの遠い道を、おそらく歩いてベツレヘムに向かったのです。身重の女性が歩いて旅をすることは、本当に大変なことでした。そしてそこでやがて生まれるイエスさまも、この重い税金をかけられる中の一人に数えられることとなります。こうしてイエスさまは、税金を取られたり、したくない仕事をしなければならず苦しむ、そんなわたしたちと同じ一人になってくださったのでした。それは、その苦しみや悩みをいただくわたしたちを、よりよく理解できる方となってくださるためでした。だからあなたの悩みや苦しみも、イエスさまはよく理解し、それに必要な慰めと励ましをあなたに与えることができるのです。

こうして遠い旅をしてやっとベツレヘムに着いた二人でしたが、すでに町は人々でごったがえし、宿屋には泊まる部屋がどこにもありませんでした。そしてやっと二人が家畜小屋で休むことができたとき、イエスさまはその家畜小屋で生まれ、かいた桶の中に寝かされたのでした。そこは決して

きれいな場所ではなく、馬や牛の糞尿(うんちとおしっこ)のにおいでむせかえる、うす暗くて汚い場所でしたが、イエスさまはそこに喜んでお生まれくださったのです。そこは豪華できれいな宮殿ではなく、牛や馬の小屋にすぎませんでした。どんなに貧しい人でもそこまでひどい場所で生まれることはありません。このときマリアは、おそらく13歳くらいだと考えられます。場所は清潔な所ではなく、汚い家畜小屋でした。しかもお産は初めての経験で、何をどうしたらよいかも分からず、不安と心配で一杯だったと思います。それなのに、お産を助けてくれる人はおらず、出産に必要なものを用意することもできませんでした。このときマリアはどんなに心細かったのでしょうか。マリアが家畜小屋でお産をしたことの大変さを想像してみてください。けれどもイエスさまは、こんな汚い、そして何も無い場所で、あなたのためにお生まれくださったのです。

さて、このイエスさまの誕生が、真っ先に伝えられたのは、野原で野宿しながら羊の番をしていた羊飼いたちにてした。この知らせは天使によって伝えられたのですが、しかしそれは天使が現れたのが、たまたま羊飼いの目の前だったというのではなく、神さまはわざわざこの羊飼いたちに知らせるために、天使を羊飼いのもとに遣わされたということでした。この時代、羊飼いはみんな

のつまはじき者、きられ者でした。まともな社会生活を送ることもできない罪人として、人々から追い出されて生きていた人たちだったのです。その羊飼いたちに向かって、天使は「あなたがたのための救い主が生まれた」と伝えたのでした。ここで「あなたがた」と言われているのは、目の前にいる羊飼いたちのことです。こうしてイエスさまは、社会のつまはじき者として仲間はずれにされていた羊飼いや、彼らを代表とした、皆からきられ苦しんでいたたくさんの人々のためにお生まれくださった方であることを明らかにしたのです。イエスさまは、この羊飼いたちのように、皆からいじめられ、つまはじきにされ、嫌われて苦しんでいる人々のための救い主としてお生まれくださったということです。そしてそのイエスさまこそ、あなたのためにもお生まれくださり、あなたの救い主となってくださった方だったのです。

羊飼いたちはこの天使の言葉に驚きながらも、それを信じてイエスさまに会いに行きます。大切な羊の群れをほったらかして、町に行ったということは、彼らがそれほど真剣に天使の約束を信じたということだったのです。そして町に行ってみると、天使の言ったとおりだったので、羊飼いは喜び、救い主がお生まれになったことを町の人々に伝えたのです。しかしこの時代、羊飼いは「うそつき」とか「ぬすっと」と言われて、彼らの言うことは皆から信用されませんでした。裁判の証人になることが禁じられるほど、羊飼いはみんなから信頼されていなかったのです。ところが

神さまは、救い主イエスさまの誕生という、とても大切なことを、その羊飼いの言葉に委ねられたのです。それは救い主の誕生という事実が信用されなくなる危険さえありました。けれども神さまは、きられ者の羊飼いを憐れみ、ないがしろにされている彼らを用いることで、彼らを祝福してくださいました。

こうしてイエスさまは、汚い家畜小屋でお生まれくださいました。ベツレヘムの町は、イエスさまを拒み、その町に入れようとしませんでした。もしあなたが、イエスさまを心に迎え入れるなら、イエスさまは、あなたの心の中に、罪に満ちた汚いあなたの心においでくださるのです。ベツレヘムに泊まる部屋がなかったことは象徴的なことでした。多くの方は、主イエスのことを聞いても、それを自分のこととは思わずに、無視してしまいます。主イエスはあなたの心の中にお入りになりたいと願っておられます。あなたは どうしますか。「見よ、わたし（主イエス）は（あなたの心の）戸口に立って、（あなたの心の扉を）たたいている。だれかわたしの声を聞いて（心の）戸を開ける者があれば、わたしは（心の中）に入る」（ヨハネの黙示録3章20節）とイエスさまは言われます。あなたの心の戸を開けて、イエスさまをあなたの救い主として心に受け入れてください。イエスさまがあなたの心にお入りくださるとき、それがあなたにとっての本当のクリスマスなのです。

（三川栄二）

【今日の暗唱聖句】 ルカによる福音書2章11節

今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである。

〈ねらい〉

イエスさまの誕生物語を通して、イエスさまは人の痛みを知り、とりなしてくださるお方であること、弱い者たちの救い主でいらっしゃることを覚える。

〈展開例〉

みんなはもし、虫歯になったら医者さんに行くとしたら、虫歯が一本もない歯医者さんと、虫歯がいっぱいある歯医者さんと、どちらに行きたいと思う？ 先生ならきっと、虫歯がたくさんある歯医者さんのほうにいくと思います。なぜなら、その歯医者さんは虫歯の痛みを知っているから、きっと丁寧に治療してくださると思うのです。

イエスさまは神さまなのに、本当の人間になって、しかも家畜小屋の飼い葉おけの中に生まれてくださいました。それは、イエスさまが人間の悲しみや苦しみを全部知ってくださって、思いやってくださいって、慰め、助けてくださる救い主だからです。また、この救い主のお誕生の知らせは、

人々から馬鹿にされ、嫌われていた羊飼いたちに真っ先に知らされました。それは、イエスさまがちいさな、弱い者たちの救い主でいらっしゃるからです。

わたしたちは小さく、弱く、すぐに悲しんだり悩んだりするかもしれないけれども、イエスさまはそんなわたしたちの救い主として、この世に来てくださいました。このイエスさまを信じて心の中にお迎えする時、本当のクリスマスが来るのです。

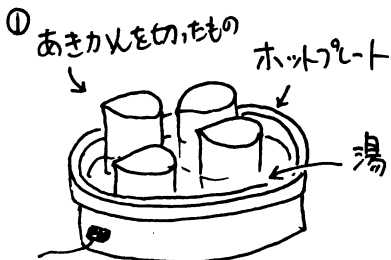
〈お祈り〉

イエスさま、わたしたちのために人間になって、家畜小屋の飼い葉おけの中に生まれてくださって、時々悪いことを考えてしまうわたしの心の中に住んでくださいますことを感謝いたします。どうかわたしたちがイエスさまに喜ばれる子どもになることができますようにお導きください。イエスさまのお名前によってお祈りいたします。アーメン。

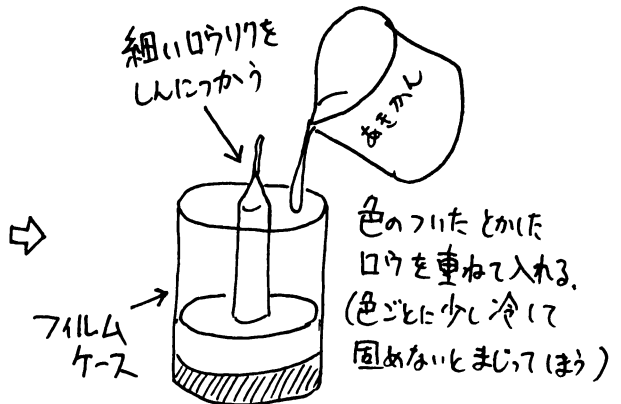
〈やってみよう〉

工作をしよう！

レインボーキャンドルを作ろう！



ホットプレートでろうそくをとかし
クレパスをけずって色をつける。



〈ねらい〉

イエス様は「神の子」なのに、家畜小屋というひどい環境の中にお生まれになった。それは、イエス様がどんなに汚れた私たちであっても受け入れてくださるという恵みである。

〈展開例〉

礼拝で聞いたお話を思い出しましょう。

○イエス様が生まれたのはどんなところだったかな？

・宿屋の家畜小屋

※「家畜小屋で生まれた」ということについて、あたたかそうなワラの上に寝かされた赤ん坊のイエス様を MARIA とヨセフのほか、ロバや馬たちがやさしく見つめている、というイメージの絵を見たりします。しかし、本当の家畜小屋というのは、そんな生易しいものではないということを具体的に子どもたちに語ってください。それは、誕生の場所としてこれ以上ないような悪い環境です。

○イエス様は、神の子なのに、なぜこんな汚い臭

いところで生まれられたのでしょうか。

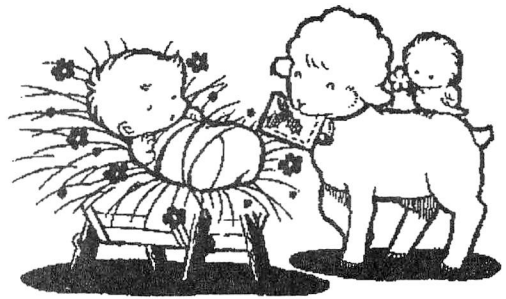
※私たち人間は、神様によって「よいもの」（創世記1:31）として造られたのに、神様に従うよりは自分が神様みたいになりたいと思って、神様のところからはなれてしまいました。せっかく神様が「よいもの」にしてくださったのに、自分でめちゃくちゃにしてしまったのです。そんな私たち人間の心は、神様から見れば家畜小屋のようにそこで住んだりしたいとは思わない汚れた所です。

でも、イエス様は、そんな私たちの汚れた心の中に住んであげよう、そうして、神様のところへいけるようにしてあげよう、とおっしゃいます。きれいな宮殿ではなく、汚い家畜小屋に生まれてくださったイエス様こそが、汚れた私の心に入ってきてくださるのです。

〈ちいさなお祈り〉

○今日はクリスマスです。

家畜小屋でお生まれになったイエス様が、私の心の中にも住んでくださってありがとうございます、とお祈りしましょう。



〈ねらい〉

子どもたちも繰り返し聞いているイエス様の降誕の物語であるが、その中でも、特に、救い主降誕の知らせが社会的に差別された羊飼いのもとに告げられたことをクローズアップし、イエス様の誕生がどのような意味をもったのかを考える。ひいては、聖書の教える救い主の姿を考えたい。

〈展開例〉

設問と一緒に一つずつ解きながら、上記の「ねらい」の理解を目指す。

○設問

1) 以下の文章は、イエス様の降誕を描いたルカ福音書の箇所です。聖書を見ずに、カッコに下の言葉を入れましょう。

そのころ、皇帝（ ）から全領土の住民に、登録をせよとの勅令が出た。これは、キリニウスがシリア州の総督であったときに行われた最初の（ ）である。人々は皆、登録するためにおのおの自分の町へ旅立った。ヨセフも（ ）の家に属し、その血筋であったので、ガリラヤの町（ ）から、ユダヤの（ ）という（ ）の町へ上って行った。身ごもっていた、いいなずけのマリアと一緒に登録するためである。ところが、彼らが（ ）にいるうちに、マリアは月が満ちて、初めての子を産み、布にくるんで（ ）に寝かせた。宿屋には彼らの泊まる場所がなかったからである。

☆言葉☆

飼い葉桶、住民登録、ベツレヘム、ナザレ、アウグストゥス、ダビデ

- 2) 羊飼いという職業はどんなイメージか、みんなでも自由に話しあってみましょう。
- 3) イエス様がお生まれになったころのユダヤでは、羊飼いは人々からどのように思われていたでしょうか。
- 4) なぜ、イエス様がお生まれになった知らせは羊飼いに告げられたのでしょうか。
- 5) イエス様はどのような人を救うためにこの世に来られたのでしょうか。ルカ5章31-32節も読んで考えましょう。

○設問の説明

- 1) 子どもたちもよく知っている聖書の箇所なので、聖書を見ずにクイズ感覚でやってみましょう。二回使う言葉が二つあるのがミソです。
- 2) まずは、子どもたちが一般的に羊飼いにどのようなイメージを持っているか、自由に話し合いましょう。
- 3) 移動する民である羊飼いが、ユダヤ教の律法の枠組みの中では蔑視され、差別された弱者であることを学びます。
- 4) 5) イエス様が、悩める者、しいたげられた者の救い主であること、そして、罪にまみれた私たちのために来られた救い主であることを共に考えます。

ねらい

- 主イエスの誕生の喜びを知ろう。

展開例

- 飼葉桶の中に寝かされている乳飲み子が救い主メシアのしるしであるとは、どういう意味であろうか。これは、主イエスの生涯の縮図を示している。貧しい様での誕生は、十字架の死の影を暗示している。
- 普通の宿屋でさえ泊まることができなかったとは、この世界が主イエスを拒否する罪の世界、暗闇の世界であることを暗示している。
- しかし、主イエスは、暗闇に輝く光である。主

イエスが生まれたことが、民全体の救いであり、大きな喜びであり、神のこの世への大きな愛を示していると言えよう。

話し合ってみよう！

- 主イエスの一生を振り返ろう。主イエスは、生まれたときから、十字架を指し示して歩まれたのである。

祈り

主イエスのすばらしい生涯に感謝をささげる者とならせてください。

○暗唱聖句○

ルカ福音書2:11

○祈りの課題○

聖書日課

日	ルカ福音書	2章1～7節
月	ルカ福音書	2章8～21節
火	ルカ福音書	2章22～38節
水	マタイ福音書	1章18～25節
木	マタイ福音書	2章1～12節
金	ヨハネ福音書	1章1～13節
土	ヨハネ福音書	1章14～18節

☆ニ日記☆

テキスト 詩編121編

〈都に上る歌〉

エルサレム神殿を目指して旅する巡礼の歌です。この詩が詠まれた時代は、バビロン捕囚から解放された後の、第二神殿時代です。イスラエルの民は、アッシリアとバビロンの捕囚に始まる困難の中で、アッシリアやバビロンはもとより、ベルシャ、エジプト、小アジア、さらにはローマやスペインに至るまで、世界の各地に散らされていました。ディアスポラ（離散）です。

そのような中、遠く世界の各地から、エルサレム神殿で礼拝をささげるために、巡礼者が仲間たちと連れだって旅をします。交通手段や宿泊場所の整っていない時代の困難な旅であり、巡礼者たちは歌をうたって互いを励まし、力づけます。この詩編は、巡礼者たちを力づけ、励ましてうたわれた詩です。

信仰者の人生は旅になぞらえられます。そうであるならば、信仰の生涯の旅路の詩と読むこともできるでしょう。この詩は、信仰の生涯を励まし力づける詩でもあります。

〈天地を造られた主のもとから〉

「目を上げて、わたしは山々を仰ぐ」。

日本人の私たちは、山々に親しみをおぼえ、「母なる大地」と呼ぶような自然観を持っています。しかし、パレスチナの気候風土はたいへん厳しく、人間に敵対的です。ですから、詩人は、大きな山々が目の前に立ちはだかっている。旅には大きな危険と困難がつきものである。その困難を前にして、わたしの助けは、ただ天地の創造主なる神、大いなる主からのみ来る、と言いたいのです。

また、カナンの宗教的な環境として、高いとこ

ろ、山々に「聖なる高台」をもうけて、異教の神々の礼拝、偶像礼拝が行われていたことを指摘できます。「山々」とは、偶像礼拝であり、私たちを偶像礼拝へと誘惑する場所なのです。人生の旅路は、この意味でも、多くの誘惑と危険が山のように立ちはだかり、大きな困難が私たちを取り囲んでいます。詩編の詩人は、そのような偽りの神々を拒否して、ただ「天地を造られた主」に依り頼み、神にのみ救いを求めようとしています。真の救いは、生けるまことの御神にあるのです。

〈主が見守ってください〉

パレスチナを旅するにあたっての大きな危険は、太陽と月です。昼、太陽が厳しく照りつけて、それは人を死の危険へと追いやるほどです。逆に、夜は気温が下がり、寒暖の差の故に病となるほどです。寒さに震えて、空を見ると青白い月が光っている、そうして、月から病が来ると考えられたほどです。こうして、昼、太陽が人を撃ち、夜、月が人を撃ちます。しかし、天地の造り主なるお方は、太陽も月も支配しておられるお方です。まどろむことなく、眠ることなく、御翼を広げて太陽を遮り、月から覆い隠して、旅人を守られます。「右」とは、右腕、力強い助け手を意味します。神ご自身が、力強い助け手となってくださるのです。

「見守ってくださいるように」との祈りが繰り返されます(3,7,8)。これは、祈りの言葉であると同時に、信頼と信仰の確信を言い表す言葉です。天地を造られた主は、神を礼拝するために集い、御国を目指して旅する者たちを、ご自身の力強い御手によって確実に守り、支え、導いてくださるのです。(望月信)

テキスト 詩編121編

(単元のねらい)

過ごしてきた一年が神によって守られたことを覚える。どのような困難の中でも神が支えてくださることを信頼して、新しい一年を迎えることができるように、この詩篇を学ぶ。

「助けは天地を造られた神から」

今日は今年最後の日曜学校です。この一年間、どんなことがありましたか。うれしいこと、楽しいこともたくさんあったでしょう。しかし悲しいことや苦しいこともあったかもしれません。けれども神さまに守られて、今日を迎えることができましたし、新しい年を迎えようとしています。来年はいったいどんな年になるのでしょうか。困ったことや問題に悩んだり、苦しんだりするのでしょうか。そうであったとしても、かならず神さまが守り支えてくださることを信じて、平安な心で新しい一年を迎えたいと思います。

詩編121編は、「都に上る歌」とあるように、イスラエルの人々が都、つまりエルサレムを目指して旅をしたときに、励まし合うために歌った歌のひとつです。みなさんもハイキングや登山をしたことがあるでしょう。それはとても苦しくてつらい旅ですが、目的地を目指して進み続けていく旅行です。この賛美歌も、イスラエルの人たちが、エルサレムを目指して巡礼の旅をする時に歌ったもので、苦しい旅の道中に互いに歌い交わして、励まし合った賛美でした。それはただ単に、地上のエルサレムを目指す旅だというだけではなく、人生を旅になぞられて、天のエルサレムである天国を目指すわたしたちの旅において互いに励ましあいながら、歌い交わしていく賛美でもありました。

その最初は、「目を上げて、わたしは山々を仰ぐ。わたしの助けはどこから来るのか。わたしの助けは来る。天地を造られた主のもとから」と歌われます。わたしたちの住む日本は、緑がとても豊かで、自然に親しみを覚えますが、聖書が書か

れたユダヤの自然はとても過酷で、つねに人間に敵対するものでした。わずかでも気を許せば命を失うような過酷な自然、そんな厳しい状況と危険の中で、エルサレムを目指す巡礼は続けられていきました。巡礼の旅を続けている人は、まだはるか遠いエルサレムの方角を見つめながら、苦しい旅の中で山々を見上げて言うのです。「目を上げて、わたしは山々を仰ぐ。わたしの助けはどこから来るのか」と。この言葉には、深いため息をつきながら、苦しい巡礼のただ中で祈るような思いで山々を見上げる巡礼者の思いが込められています。昼は焼けつくような日差しに苦しめられ、のどはからからになりながら、夜は霜が降りるほど凍えるような寒さに悩まされ、獣があたりをうろつき回って命を狙っており、獣の遠吠えの声におびえながら、野宿を重ねていきます。そのような苦しい旅の中で、巡礼者は自分たちの無力さと小ささを覚えずにはおれません。この大きな厳しい自然の中では、一ひねりで息絶えてしまうほど小さく無力な自分だからです。そしてひとりぼっちの寂しい旅行と、苦しみと悩みの連続の旅の中で、巡礼者は「わたしの助け」がどこから来るのかと問うのでした。

そして辛い苦しい道行きの中で、目指す方を見つめて山々を仰ぐと、その山並みの向こうに、日に照らされてきらりと金色に輝くものが目に留まります。それは自分が目指しているエルサレムの神殿でした。そのわずかばかりの光がきらりと目に入って来るのです。そこで巡礼者は気づくのです。そうだ、わたしの助けは、この天地を造られた主から来るのだと。そこで巡礼者は勇気づけら

れ、励まされて、エルサレムへの道を急ぐことになります。厳しい現実の中で、うなだれ、弱りがちな思いに身をすくませながら、かろうじて山を見上げている、まさにそのところで山を見上げていった時、巡礼者は堅く信仰へと立たせられていくのでした。「わたしの助けは来る。天地を造られた主のもとから」と。この「山」とは、自分の力ではどうすることもできない大きな問題であるかもしれません。自分の知恵や経験では乗り越えていくことができない巨大な試練であるかもしれません。この巡礼者は、自分の助けが「山」から来るというのではなく、「天地を造られた主」から来ると思えることができたのです。この天地、山の前に消え入りそうなほど小さな自分を、しかしこの天地を造り、今のその全能の力で支配しておられる方が助け、守ってくださる、そう信じて立つことができたのです。山といえるような、自分が直面する問題をも、天地を造られた主が支配し、その御手のうちに握りしめておられる、そう信じて巡礼者は立ち、再び旅を続けることができたのでした。

するとそこで、神殿の祭司からの祝福の言葉が聞こえてくるのです。それは、足がよろめかないように神さまが助けてくださるよう、無防備の寝ている間も神さまが寝ることなく守られるように、暑い日差しに撃たれて弱り果て、寒さにこごえる夜に心萎えることがないように、いつも神さまがあなたを「覆う陰」となってくださるよう、そしてあらゆる災いを遠ざけて、神さまが見守ってくださるよという祈りでした。「足」とは、信仰の足です。信仰の歩みにおいて、わたしたちはたびたび挫折し、挫け、くずおれます。自分の力では歩き進むどころか、立っていることさえできないこともしばしばです。足を滑らせて谷底に落ち、危険な目にあうこともあります。信仰の道筋の中で、わたしたちは何度も足をよろめかせることがあるのです。足を滑らせてしまうのです。

あるいは疲れ果てて、もはや一歩も歩けなくなることがあるのです。しかしその中で、天地を造られた主が、この小さなわたしを見守り、支えてくださるばかりか、主が担い、背負って、その困難な道筋を導いていってくださるのです。炎天下の直射日光のように、刺すような言葉や場面に直面し、「針のむしろ」のようなつらい中を耐えなければならぬこともありますし、また冷たく刺す月の光のように、凍えるような友だちの薄情さに苦しめられ、悩まされることもあります。しかしそんなただ中であっても神さまは、まどろむことなくわたしたちを見守り、常にわたしたちを覆う陰となり、そのような試練によって撃たれ、打ちのめされることがないように、足がよろめくことがないように、支えてくださるのです。

かつてイスラエルがエジプトを脱出したとき、神さまは荒れ野の道を、昼は雲の柱となってイスラエルを覆い、包んで照りつける日差しからイスラエルを守り、夜は火の柱となってイスラエルを照らし、獣と夜の危険から守ると共に、温かみを与えて凍える寒さからイスラエルを守ってこられました。そのように神さまは、巡礼の道に行き悩むわたしたちとも共にいて、陰となり覆いとなって守ってくださるのです。

こうして、「主がすべての災いを遠ざけて、あなたを見守り、あなたの魂を見守ってくださる」、この確信に支えられて、わたしたちは自分の巡礼の道をたどって行くことができるのです。こうして巡礼の旅全体を神さまが守ってくださり、弱りやすく、萎えやすい「魂」を見守ってくださることが約束されます。この約束を握りしめながら、辛く苦しい人生の旅のただ中、足をすくわれるような試練に直面して、途方に暮れながら山々を見上げる時、そこで「わたしの助けは、天地を造られた主から来る」ことをもう一度確信して、足取りを支えられ歩み進めていきたいと思えます。

(三川栄二)

[今日の暗唱聖句] 詩編121編1～2節

目を上げて、わたしは山々を仰ぐ。

わたしの助けはどこから来るのか。

わたしの助けは来る。天地を造られた主のもとから。

〈ねらい〉

この一年の歩みを守ってくださった神さまに感謝しつつ、新しい年も、すべてを支配しておられる神さまのお守りを信じて歩むように導く。

〈展開例〉

みんなは旅行するのが好きですか？ みんなで旅行するのは楽しいよね。けれども、昔の人の旅は大変でした。今日の聖書の箇所は、イスラエルの人々がエルサレムで礼拝をするために旅をする時に歌った歌なのです。もちろん電車や車なんてありません。昼間はかんかん照りの太陽が照りつけ、夜は霜が降りるほど寒い中を、歩いて旅をするのです。それは心細かったでしょうね。大きな山を目の前にした時などは、「もう無理だ！」とおもったかもしれません。でも、そんな時にこの詩を書いた人は思い出したのです。「そうだ、わたしが信じている神さまは、この山も、空も、すべてのものをおつくりになられた神さまだ。この

神さまがわたしを守ってくださるから、わたしは何があっても大丈夫なんだ。」そう信じてまた歩き始めたのです。

この1年もいろんなことがありましたね。でも神さまがいつもわたしたちを守ってくださいました。新しい年もいろんなことがあるでしょう。時には泣きたいようなこともあるかもしれません。でも、山のような困ったことが起こっても、すべてのものを造られて、今も導いておられる神さまがわたしたちを守ってくださることを信じて、歩んでゆきましょう。

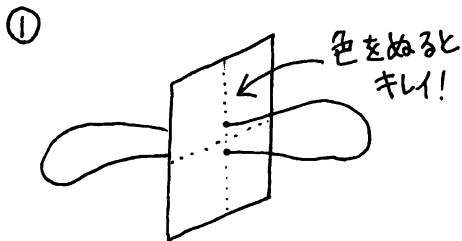
〈お祈り〉

神さま、この1年のあゆみをすべてお守りくださいまして、ありがとうございました。新しい年も、どんなことがあっても、神さまを信じていたがってゆくことができますように、お導きください。イエスさまのお名前によってお祈りいたします。アーメン。

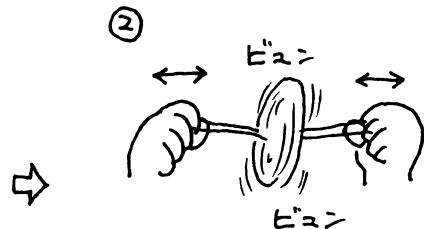
〈やってみよう〉

工作をしよう！

ビュンビュンゴマを作ろう！



ダンボールか厚紙を円や正方形に切り、中心をはさんで8~12mmくらいの間かたで2つ穴をあけ、1mくらいのタコ糸を通す。



糸をくるくるまいて、糸をひっぱったりゆるめたりするとビュンビュン回る！

〈ねらい〉

この一年、私たちに神様がしてくださったことを数え上げて、神様に「ことしもありがとうございます」とお祈りしましょう。

自分の事だけではなく、お友達（隣人）のこともお祈りしましょう。

〈展開例〉

いよいよ今年最後の日曜学校です。今日は、今年神様が私たちにしてくださったことを数え上げてみましょう。

○紙を配り、「楽しかったこと」「うれしかったこと」「いやだったこと」「悲しかったこと」、それぞれ2項目ほどを、書いてもらいましょう。

たくさんある子どもはたくさん書いてもらっていいですが、なかなか「思い出さない」という子どももいるかもしれません。教師が日曜学校であったことを「こんなことがあった」「あんなこともした」といっしょに話しながら導く事も必要かと思えます。

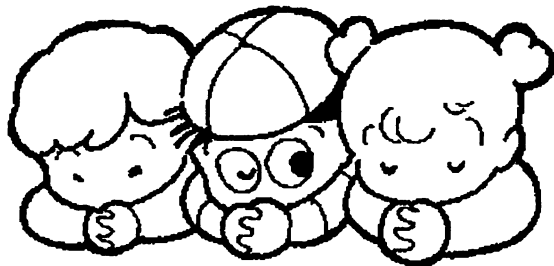
○書き終わったら、隣にいるお友達と交換してください。お友達がどんな事を思い出したのか、分かち合いましょう。

○それでは、みんなで一言ずつお祈りしましょう。

まず、さっき書いたことを思い出して、神様が、楽しかったことやうれしかったことを与えてくださった事、いやだったことや悲しかったことから守ってくださった事、を一つでも良いですから「ありがとう」とお祈りしましょう。

そして、お友達と交換した紙を見て、お友達に神様がしてくださったことを「ありがとう」とお祈りしましょう。

※子どもたちと一言ずつでよいので祈禱会をしましょう。教師は、子どもたち一人一人の名前を挙げて、彼らに神様がしてくださったことを感謝しましょう。また、休んでいる子どもたちのことも名前を挙げて祈ってください。



〈ねらい〉

一年間はあっという間に過ぎ去る。子どもたちにとって、中学受験が始まり、競争社会に突入する受難の始まりである。しかし、学校では教えてくれない大切なことを教会で教えてくれる。体は年と共に成長するが、心は交わりにおいて、とくに神様との交わりにおいて命を得て成長する。過ぎた一年を省みて、神様に真実であったかを自問し、新しい年に神様からいただくであろう恵みの数々に希望を抱いて、忠実に生きることの大切さを学ぶ。

〈展開例〉

1. 神様が天地をつくられた。

神様が私たちにご自分を示された、二つの方法があります。私たちが目にする美しい大自然、山々や川や草花さえ、どれ一つとっても神様の創造のみ業を賛美せざるを得ません。

昔から神様を信じる人々は、四季折々にまた人生の折り目に困難や苦しみの時に神様を見上げて助けを求めて訴え、慰めをいただきました。

礼拝をささげるための神殿への旅は、旅行手段の無い時代には、まさに難行苦行であったでしょう。強盗や自然の脅威にさらされながら、それでも神様を礼拝したいと心から願ったのです。そして、神様から賜る大いなる恵みを待ち望みました。

神様を見上げる目の先には山があり、山は昔から聖なることとされました。山の頂に犠牲をささげ、祈る場所が設けられました。モーゼが神様とお会いして十戒をいただいたのも聖なる山でした。日本では富士山を初め沢山の山が聖地として崇拜され、信仰の対象となりました。偶像礼拝も高い山や人工的に作られた高いところで行われ、世界各地で古い神殿の遺跡が発見されています。神様は神殿にはお住みにならないと言われました

が、人々の礼拝の場所として神殿が建てられました。いま私たちは教会で神様を礼拝しています昔から神様を信じる人々が祝福を願い求めたように私たちも、天地を造られた神様の祝福を願って良いのですし、願うことを神様は喜ばれます。

2. 神様が見守ってくださる。

神様がご自分を示されるもう一つの方法はみ言葉、聖書です。昔は言い伝えを通して、また預言者を通して、神様は人々を導きました。今は聖書が私たちの手元に与えられて、いつでもみ言葉を学ぶことができます。旧約聖書は人類の歴史であり、私たちの人生の良き助言を与えてくれます。神様を信じている人々に神様がいつも手をさしのべて、助けてくださったこと、神様がいつも見守っていてくださって危険から救ってくださったことを知って、力強く人生の荒波を越えていくことができます。

詩編121篇には繰り返し「見守ってってください」と祈られています。神様は私たちの味方ですが自分ではありません。私たちが助けを願うときに、祈りに応えて願いを聞かれます。いつも見守っていてくださることを、もしかして窮屈なことだと感じてはいませんか？ 自分が必要なときだけ出てきて助けてくれるウルトラセブンやアラジンのランプのような神様だと良いなど考えているのではありませんか？ とんでもない考え違いです。

私たちは神様に守られているからこそ生きていけるのであって、自分の力だけで生きていけるではありません。新しい年も神様に信頼して、神様に忠実に、恵みにより生かされている自分を感謝しながら教会を休まずに、教会学校でも学びましょう。

ねらい

○この一年の恵みを数えて、主への感謝をもって新年を迎える。

話し合ってみよう！

○一年の恵みを数え上げて、感謝の祈りをささげあってはどうだろうか。

展開例

- さまざまな困難、試練の中で、主が共にいてくださることの意味、またその恵みを考えよう。
- 「見守る」という言葉に注目して、その意味を考えてみよう。

祈り

この一年間、主なる神の恵みは、わたしに十分でした。あなたに感謝し、また依り頼んで、新しい年を迎える者とならせてください。

○暗唱聖句○

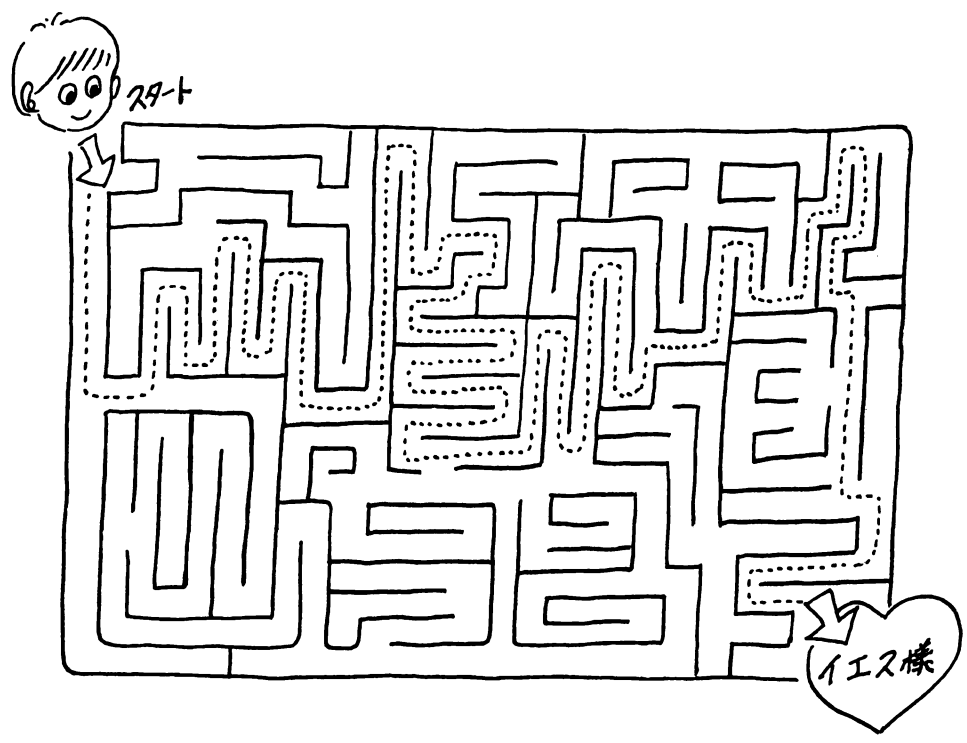
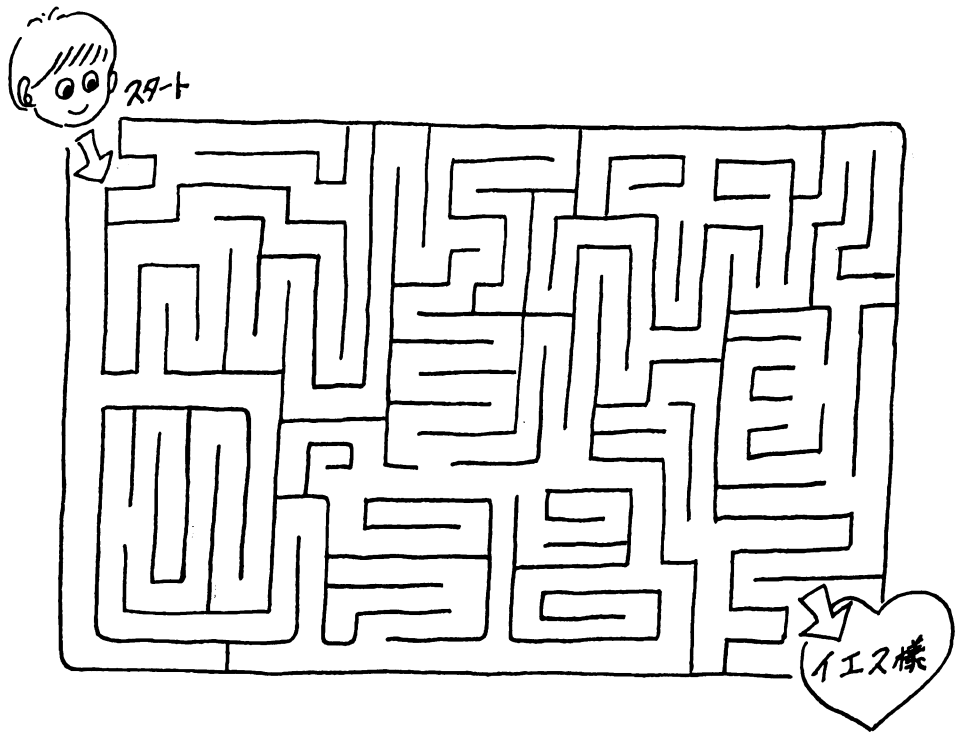
詩篇 121 : 1~2

○祈りの課題○

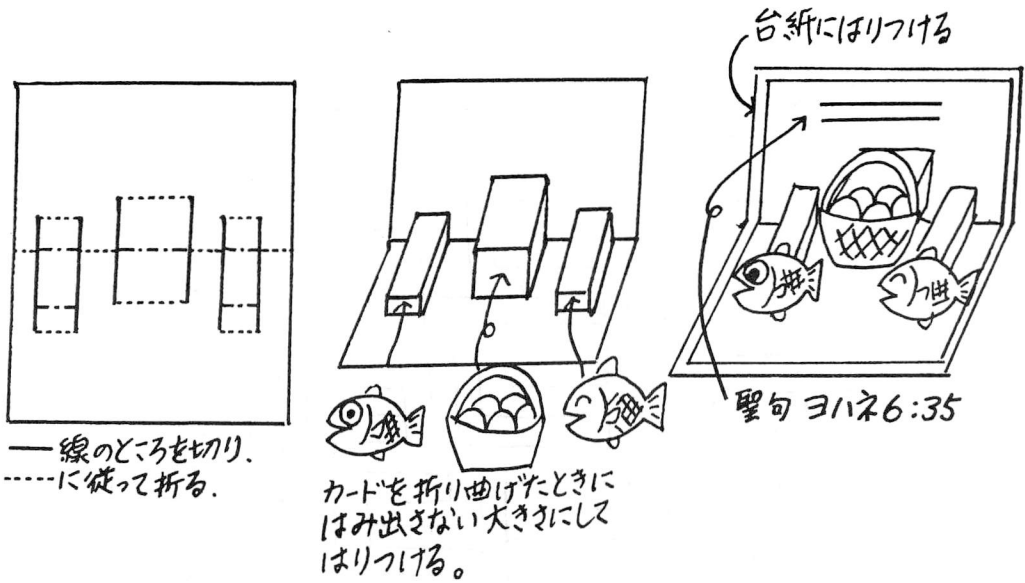
聖書日課

日	詩編121編	1~8節
月	詩編122編	1~9節
火	詩編124編	1~8節
水	詩編125編	1~5節
木	詩編135編	1~21節
金	詩編136編	1~26節
土	詩編139編	1~24節

☆三日記☆



《11月9日分 小学科下級教材》



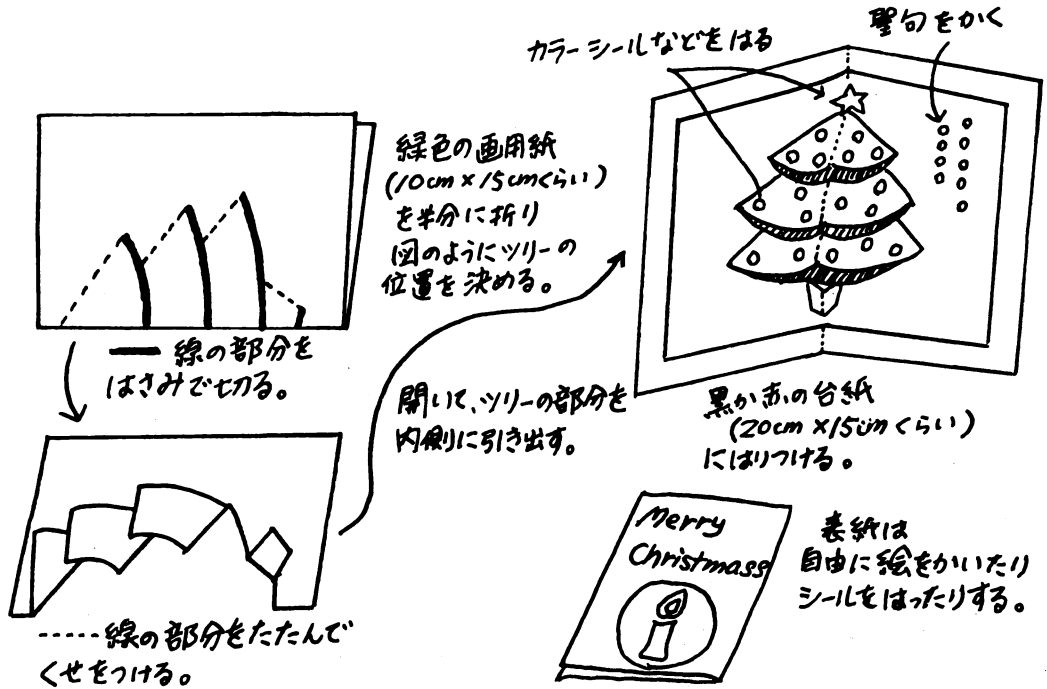
《11月16日分 小学科下級教材》

1	そ	2		3	4
7		ら		8	
			5	の	
6			9	と	
10					り

解答

そ	う	せ	い	き
と	ら		わ	な
		の		こ
や		は	と	
ま	く	ら		り

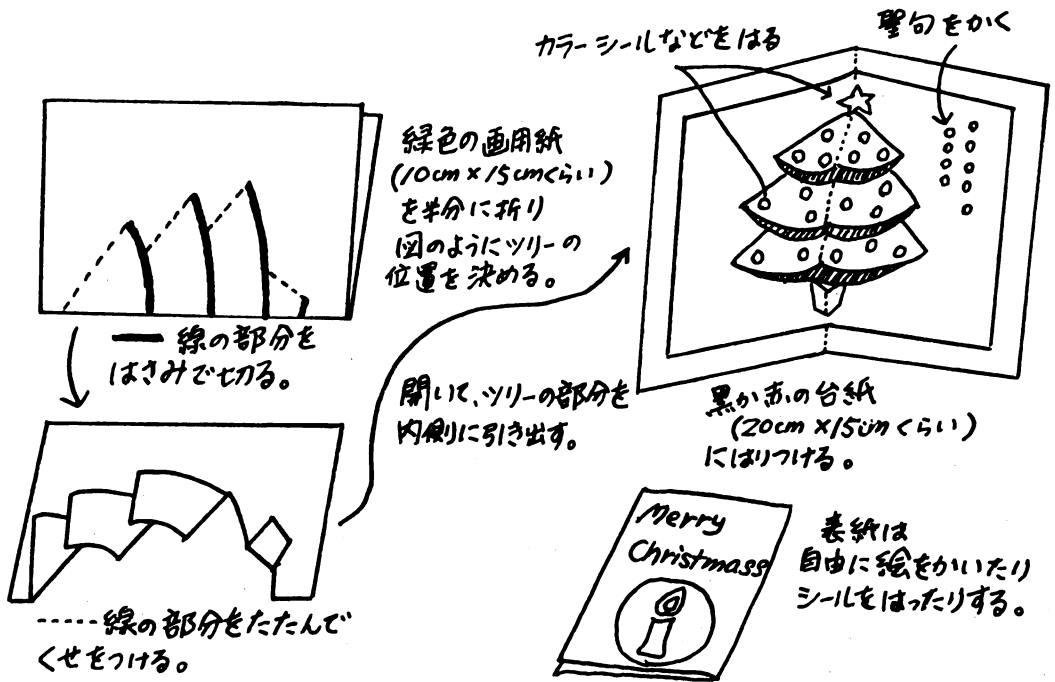
《12月14日分 小学科下級教材》



日本キリスト改革派教会 中部中会 『日曜学校教案誌』
2003年10・11・12月号（季刊）
第11号
2003年9月14日発行

発行 日本キリスト改革派教会 中部中会 教育委員会
発行所 日本キリスト改革派教会 中部中会 日曜学校教案誌編集部
名古屋岩の上传道所 宣教教師 相馬伸郎
〒458-0021 愛知県名古屋市緑区滝の水2-2012
Tel/Fax. 052-895-6701
編集・印刷 株式会社あるむ
〒460-0012 愛知県名古屋市中区千代田3-1-12 第三記念橋ビル3F
頒価 700円（本体価格）

《12月14日分 小学科下級教材》



日曜学校 2003年度カリキュラム (2004年1～3月分)

—救済史に基づく一年間のカリキュラム—

月日 教会暦・行事	主 題	聖 書 箇 所	暗 唱 聖 句
	単 元 の 目 標		
1月4日	聖霊の降臨	使徒言行録2:1-13	使徒2:4
	わたしたちを励まし、力づけてくださる聖霊の恵みを知ろう		
1月11日	ペトロの説教	使徒言行録2:14-42	使徒2:21
	「わたしのための主イエスの十字架」であることを知り、主の御名を呼ぼう		
1月18日	足の不自由な人のいやし	使徒言行録3:1-10	使徒3:6
	暗闇と悲慘を造りかえて、喜びをあふれさせてくださる主をほめたたえよう		
1月25日	ペトロの神殿での説教	使徒言行録3:11-26	エゼキエル33:11
	主イエスを十字架につけた罪を悔い改めて、神に立ち帰るよう招く		
2月1日	ステファノの殉教	使徒言行録7:54-8:1	使徒7:60
	ステファノを福音の使者として用い、力づけ、勇気づけた主イエスを仰ごう		
2月8日	宦官の救い	使徒言行録8:26-40	使徒8:35
	福音の使者とされ、福音を語り伝える喜びを知ろう		
2月15日	サウロの回心	使徒言行録9:1-19	テモテ1:15
	心の目が開かれて、主イエスを知り、信じる者として歩もう		
2月22日	第一次伝道旅行	使徒言行録13:1-12	マタイ28:18-19a
	聖霊によって遣わされて福音が宣べ伝えられる、その大きな御業を仰ごう		
2月29日	マケドニアの幻	使徒言行録16:6-15	使徒2:17
	神の御心を祈り求めて、神の御計画・幻・使命を担うことへと招く		
3月7日	エフェソでの告別説教	使徒言行録20:17-38	使徒20:32
	主イエスと教会を愛する愛を教え、また神の恵みの御言葉への信頼へと招く		
3月14日	ローマへの旅	使徒言行録27章	ヘブライ11:1
	神の御言葉に信頼し、主にのみ依り頼むことへと招く		
3月21日	ローマにて	使徒言行録28章	テモテ2:9
	神の御言葉の力とその広がりを示し、御言葉の力への驚きと信頼に導く		
3月28日	受難節	ヨハネ18:38-19:16	コリント2:5:21a
	わたしたちの罪を担って裁きを受けてくださった主イエスの十字架を仰ごう		

あ と が き

中部中会教育委員会日曜学校教案誌編集部

主の御名をほめたたえます。

今号より、再び編集と印刷を株式会社あるむにゆだねました。前号までと少し装丁が変わっておりますのは、そのためです。教案誌出版の財政が守られており、外部に委託することができるようになりました。神の御前に心より感謝申し上げます。また、諸教会の皆様のご支援とお励ましに、心よりお礼申し上げます。

2003年度の歩みも後半に入り、それぞれの教会ではクリスマスの計画なども話し合われて、備えておられることであろうと思います。今年度後半の日曜学校の営みが祝福されるよう、心よりお祈り申し上げます。編集部でも、すでに2004年度以降のカリキュラム等を検討し、執筆を始めております。「すべての子どもたちに福音の喜びを」と願って、共に祈り励んで参りましょう。

なお、印刷・製本には慎重を期しておりますが、乱丁・落丁の場合は、お取り替えいたしますので、ご連絡ください。

Soli Deo Gloria!

☆ 執 筆 者 一 覧 ☆

聖書研究

木下裕也 豊明教会牧師
春名義行 津島伝道所宣教教師
望月信 高蔵寺教会牧師

説教展開例

相馬伸郎 名古屋岩の上传道所宣教教師
三川栄二 稲毛海岸教会牧師

分級展開例

幼稚科 吉田実 神戸長田教会牧師
小学科下級 四日市教会日曜学校
小学科上級 新座志木教会教会学校
中学科 吉岡良昌（東部中会）
表紙イラスト……弓矢容子

☆ 編 集 部 ☆

相馬伸郎（長） 名古屋岩の上传道所宣教教師
木下裕也 豊明教会牧師
春名義行 津島伝道所宣教教師
望月信 高蔵寺教会牧師

教案誌のお申し込みは、津島伝道所・春名義行までご連絡ください。

バックナンバーもあります。

春名義行 〒496-0038 愛知県津島市橘町2-30 津島伝道所

Tel/Fax. 0567-26-4221

日本キリスト改革派教会 中部中会 『日曜学校教案誌』
2003年10・11・12月号 (季刊)
第11号
2003年9月14日発行

発行 日本キリスト改革派教会 中部中会 教育委員会
発行所 日本キリスト改革派教会 中部中会 日曜学校教案誌編集部
名古屋岩の上传道所 宣教師 相馬伸郎
〒458-0021 愛知県名古屋市緑区滝の水2-2012
Tel/Fax. 052-895-6701
編集・印刷 株式会社あるむ
〒460-0012 愛知県名古屋市中区千代田3-1-12 第三記念橋ビル3F
頒価 700円 (本体価格)
